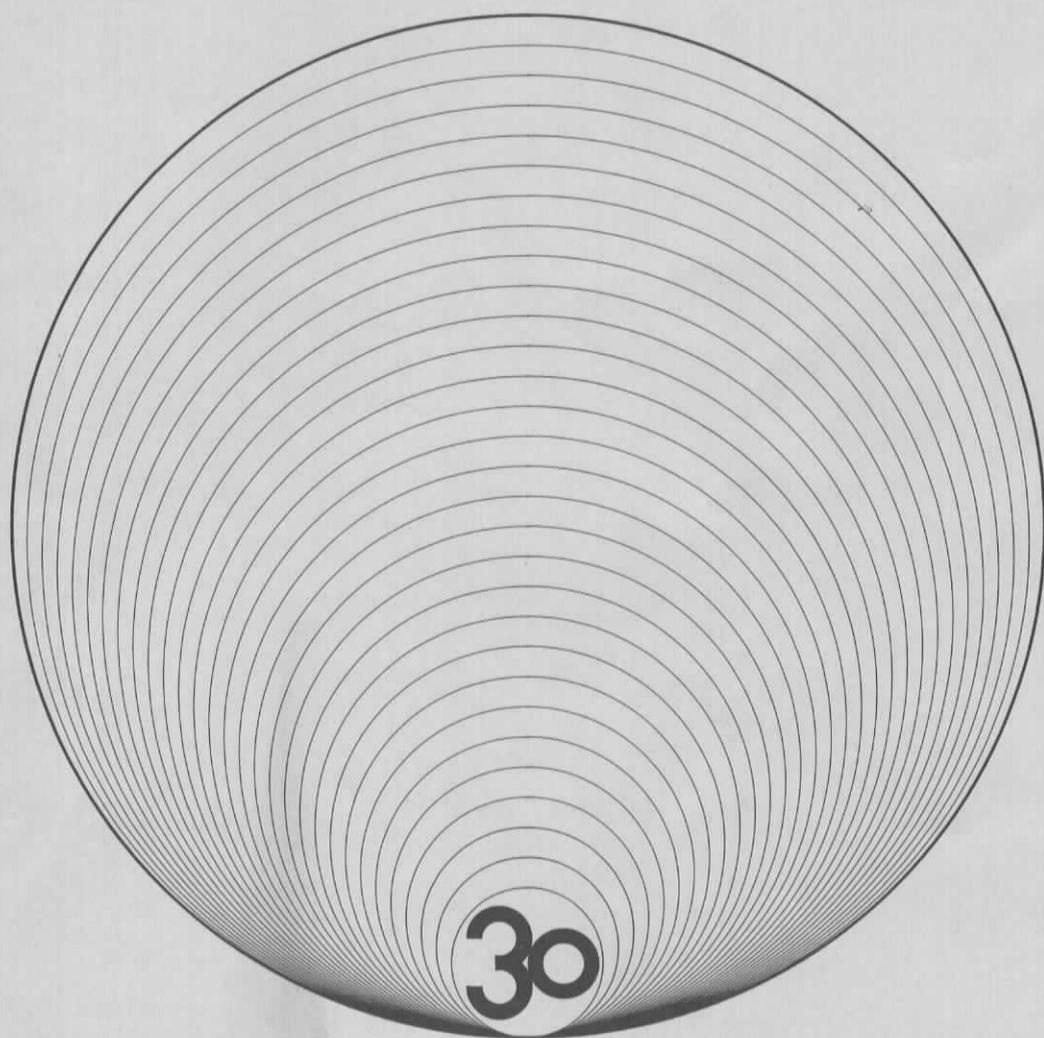


創立30周年

記念誌



東日本建築教育研究会

創立30周年

記念誌

東日本建築教育研究会



構造部会



計画部会

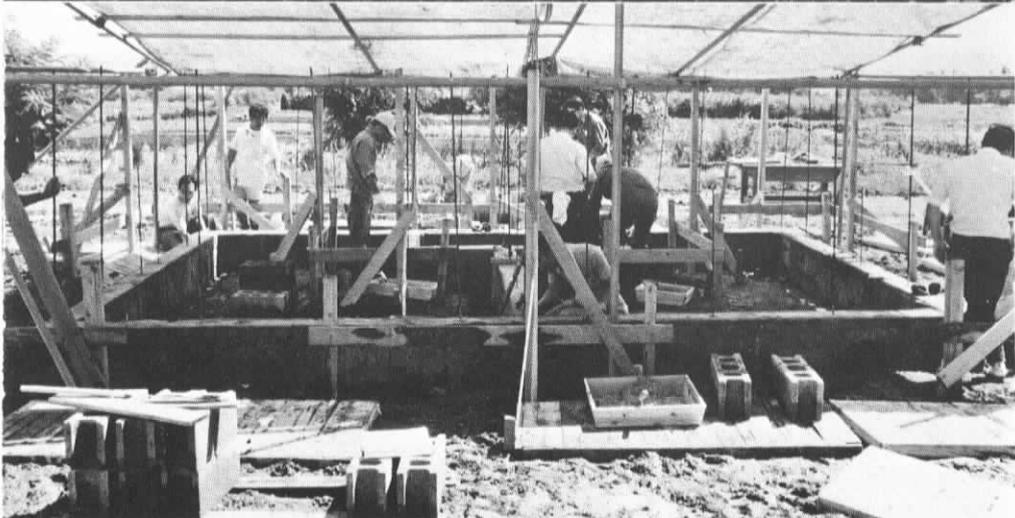
(計画実習)



(木造実習)



(鉄筋コンクリート造実習)



(補強コンクリートブロック置実習)

目 次

本会創立30周年記念誌発刊に際して.....	2
東日本建築教育研究会会長	堀 重雄
祝 辞.....	4
初代理事長	伏見三郎
文部省職業教育課教科調査官	関口 修
全国工業高等学校校長協会理事長	伴 義夫
(社)全国工業高等学校校長協会事務局長	宮地克巳
日本大学生産工学部建築学科教授	山口 廣
学校紹介.....	9
東日本建築教育研究会のあゆみ.....	76
東日本建築教育研究会創立30周年記念誌のための座談会.....	81
分科会報告.....	90
製図分科会 東京工業大学付属工業高等学校	五十嵐永吉
計画分科会 東京都立小石川工業高等学校	佐藤 賢吉
構造分科会 東京都立墨田工業高等学校	井上 満
施工分科会 神奈川県立神奈川工業高等学校	山室 滋
東日本建築教育研究会会則.....	97
東日本建築教育研究会加盟校一覧表.....	98
工業高等学校建築科教育課程の変遷.....	100
編集後記.....	103

本会創立30周年記念誌発刊に際して

東日本建築教育研究会会長

堀 重 雄

本会は昭和26年、敗戦の荒廃にその傷をいやす間もなく、東京四谷の若葉荘において呱呱の声をあげました。爾来、文部省関係においては教科書の編集、産振設備基準案の作成、学習指導要領とこれに基づく学習指導要領の手引書の作成等、全国工業高校長協会においては標準テスト問題作成、教材映画、スライドの作成、JISの選定、さらに、建築学会や産業教育振興中央会においても応分の務を果してまいりました。

すでに、昭和46年には、この壮挙の20周年を記念し、第3代理事長富塚信司先生のもとに史誌を発刊し、本研究会成長の跡と節目を整理したところであります。

さて、20周年から30周年への変遷は、西暦1980年を期して、世上80年代といわれております。そして、80年代の我が国の展望はいかにあるべきか、云々されております。

それは、70年代の経済高度成長の歪が単に産業界にとどまらず、教育界にも波うってきたからであります。かつて、工業高校において教育されるものも、教育するものも産業界の中堅技術者をめざしていた様相が大きく変貌しました。高等学校が普通国民教育機関とみなせるほど敷衍し、さらに、高学歴指向は遂に同世代の4分の1を大学を含む高等教育機関に追いこむことになりました。いずれ、大学も普通国民教育機関と化するのかもしれませんが。教育の内容、実情の変化もさることながら、私もこれを決して喜びとしないものではありません。そこに、我が国を支えるのに心身ともに健全でたくましい職業人を育成するという脈うつものが前提かと思えます。

資源、エネルギーにも恵まれず、狭隘な国土に稠密な人口をかかえるわが国が生きる道は、かの悪名高いエコノミックアニマルならぬ世界に通じる日本人であり、工業を中心に自立する外にないことはいうまでもありません。

よく、わが国に対比される西洋の経済大国西ドイツでは、いまなお、職業人育成の方法とシマイスター（親方）の制度が確立され、長い伝統のもとに厳しい道程を早期から歩まされ、社会的にも相当な尊敬を受けているといわれます。技術的にも経済的にもその背後にかなりの国民性のちがいがあられるのですが、力強い健実さを感じざるをえません。

技術、技能、科学は時に相寄り、相容れてこそ結実するものであり、分科できるものと分科できないものがあり、そこに、国民一人ひとりの持場を社会が要求し、個人がこれにこたえることが調和のとれた社会といわれましょう。

そこで、工業高校がこれからの工業人を育成するための指針として、移行されつつある

新学習指導要領に次の点が記されています。

教育課程審議会の答申（昭和51年12月8日）に基本方針として、自ら考え、正しく判断する力をもつ生徒の育成を重視し、次のようなねらいを定めたことです。

- (1) 人間性豊かな生徒を育てること。
- (2) ゆとりありしかも充実した学校生活を送られるようにすること。
- (3) 国民として必要とされる基本的、基礎的内容を重視するとともに、生徒の個性や能力に応じた教育が行われるようにすること。

さらに、専門教育に関する各教科・科目については、実験、実習等の実際的、体験的な学習を重視しつつ、各学校において弾力性に富んだ特色ある学校づくりをめざしております。すなわち、工業技術の動向……経済の安定成長、各技術分野の複合化と集積化を80年代の課題としております。

このような意を受け、昭和38年には建築科で履修する科目がおよそ14科目、昭和48年にはおよそ8科目であったのが、今回は、工業基礎、工業数理、実習、製図を除き、4科目に整理統合されました。

本来、教育とは保守的な面が強く、また、それは尊重されるべきものです。しかし、われわれは未経験なだけに、一般工業人としての教養的側面をもつ工業基礎や工業数理の科目の目標達成には特に研修の必要があるでしょう。

思えば、単位数といい、科目数といい、逐年窮屈になった観もありますが、特色ある教育課程をめざし、たとえば、建築科にも情報技術や処理の教育に力をいれているところもあります。70年代以来の住宅産業の拡大に連なる新建材の量産体制の組織化と合理化は焦眉の問題であり、建築教育の中でも特色あるものの一例といってよいでしょう。

また、建築が個人の安息の場であると同時に、建築物の集団においてはそれをとりまく地域社会を形成するものであります。地震や台風に対する耐久性をそなえることはもちろん、人間社会の共同体として快適なものでなければなりません。あれやこれ、建築法規に定める法的基準など、技術的要素を実際的なものと結びつけるところに、工夫の余地があるように思います。

さらに、建築は造形芸術の最たるものであり、芸術も技術も豊かな創造性のあるところに無限の可能性が得られることの誇を持ちたいものです。

最後に、この30周年記念誌を発刊するに当り、建築に対して素人の私がおこがましいことを申しあげたことをお詫びし、研究会の役員諸氏の献身的な努力を深く感謝するものであります。加えて、本研究会がかつて広域研究団体の先達としての栄光を支えた創設以来の先輩各位の献身的な努力と先見の明に思をはせ、関係団体のほか賛助会員の皆様のご厚情にも深甚の謝意を表するものであります。

(東京都立足立工業高等学校長)
(前東京都立葛西工業高等学校長)

祝 辞

祝 辞

初代理事長 伏 見 三 郎

東日本建築教育研究会が本年に創立30周年を迎えられたことは同慶至極です。

本会は昭和26年に中江齊先生（元静岡工高長）岸田林太郎先生（現読売工業技術専門学校教授）に小生が加わって関東地区建築教育研究会の名称で発会させました。

当時全国高等学校長協会では会の統制上科別の研究会の発足を喜ばず研究会としての参加校数を一単位40～50校以下と定めて来ました。当会としてもやむなく関東地区の工業高校を目標とし「関東地区工業教育研究会」として発足したのです。然し東北地方や中部地方からも続々参加を求めて来ましたので、今日の「東日本建築教育研究会」へと発展して来たわけです。其の後応用化学や工芸、土木科では全国組織を作りましたが、建築科では既に近畿工高建築連盟が存在していましたので合同することなく協力関係で会の運営を図りました。昭和27年の設備基準改訂案の作成には、名古屋・大阪・沼津で再々会合を開き当時としては最良に近い案を作成しました。但しその案は機械科等の専横により結果は淋しいものとなり責任者の1人として会員各位に御迷惑をおかけしたことを今尚恥しく思っています。組織の成り立ちは以上ですが会自体は優秀な会員の協力により独創的な活動により、「ワークブック」の刊行、学力検査の実施等凡て全国工高長協会に先駆して行いました。これにより協会自身遅ればせで学力検査、計算尺検定等実施された。この点で我々が先見の明があったことと独り誇りとしています。

昭和30年以後は会の基礎も定り各学校長も当会に理解せられ定期秋期大会は多額の経費を負担せられ楽しい研究会が開かれました。沼津・甲府・長野・新潟・宇都宮・飯能、更らに遠く弘前の大会等は夫々楽しい思い出の地です。

私は昭和36年に定年退職し、一時、私立工高長を勤めていましたが、その後、引退し、余世を過ごしています。

30周年に当り過去を思い、本会の益々の御発展を祈ります。

創立30周年を祝って

文部省職業教育課教科調査官 関 口 修

東日本建築教育研究会が結成以来本年をもって30周年を迎えることとなり、本記念誌を発行されるに当たり、ひとことお祝いの言葉を申し上げます。

本会が結成された昭和26年は、産業教育振興法の制定された年であり、新制高等学校の学習指導要領試案の発表された年でもあります。我が国の産業が戦後の疲弊からようやく立ち上るとともに、種々の行政施策が打ち出されたことに呼応して、当時建築教育に携わ

っておられた先輩有志の先生方のご熱意によって、本会が呱呱の声を上げ、今日まで高等学校建築教育の発展のため多大な貢献をしてこられました。ここに各位の30年にわたる永年のご尽力に対し心からの敬意を表しますとともに、今日のご発展を衷心よりお慶び申し上げます。

その間、高等学校教育に関する体制も様々に変遷してきました。先づ学習指導要領については、昭和26年の試案以来、同31年の前記試案の改正による正式な制定、同35年の改正および文部省告示事項となり教育課程編成の基準としての性格が明らかにされ、さらに同45年の改正を経て今回53年8月30日の改正告示となったものです。また、施設・設備の整備に関しては、昭和27年に基準が定められ、その後同40年4月の改正を経て同51年12月の全面改正となって今日に至っております。いずれも、各都道府県や各学校の創意と工夫によって特色ある教育課程が編成されたり、特色ある設備が整えられるように、大幅な弾力性が付与されたことを特長としております。

これら種々の施策の制定に際して、その都度本会の先生方にも多大なご協力をいただいたことは申すまでもありませんが、ここに改めて深甚な謝意を表します。

教職員定数の標準に関しては、目下省内でも新学習指導要領に基づく教育課程のより効果的な運用を図るため、鋭意研究中ですし、やがて、その成果が世に問われることになると思われまふ。

以上のように、高等学校の特に工業などの産業教育をとりまく教育諸条件は、よりよく整備されつつあります。一方、工業教育全般に関して多くの新たな課題に直面している昨今ですが、ひとり建築科については、生徒の学習成果と相まって、社会的な評価も安定しているなど、本会関係の先生方にはまことにご同慶の至りに存じます。

今後さらにこの評価を維持し、向上させるために、各位の一層のご研讃とご尽力を念願しますとともに、西日本地区の建築教育研究会とのさらに緊密な連携を図るなどして、一層のご発展あらんことを心から祈念致しまして、創立30周年のお祝いの言葉に替える次第です。

30周年を祝す

全国工業高等学校長協会理事長 伴 義 夫

東日本建築教育研究会が発足以来、30年を経たことを心からお祝い申し上げます。30周年を記念して記念誌が発行されますことは、過去を顧み、現在を踏まえて、未来の発展に資するという意味で誠に時宜を得たことと思います。また、私どもの全国工業高校長協会が、研究会の発展に、ひいては工業教育の進展に大いに関心があることは言うまでもありません。そんな意味で一言お祝いを申し上げるものであります。

工業教育におけるさまざまな問題の中で、現在当面する最大の課題は、昭和53年8月に告示され、57年度から実施予定の新学習指導要領でありましょう。指導要領は、最近では10年おきに改訂になり、今回は9年目であります。現行のものが48年に実施された直後

に、早くも次の改訂の議が持ち上ったのでありますから、その早さには驚かされます。それほど現在の高等学校の生徒の実態の変化が著しいということだと思えます。「教育課程審議会」と「職業教育の改善に関する委員会」がほぼ同時期に設置されて、委員会の報告が51年5月に審議会の答申が同年12月に出されたのであります。職業関係では双方の委員が重複していることもあり、また、審議会の答申の中の職業教育に関しては、改善委員会の報告を参考にしたと明記してありますので、新指導要領の基本的な考え方は、審議会答申の具体化であり、しかも職業教育に関しては、改善委員会報告の結論がそのまま反映されていると言ってよいと思えます。

世の中には、一つのことだけを見て、そのよって来るところをないがしろにしてしまう例がいくらかでもあります。今回の指導要領の中でそのような例をとり上げてみますと、例えば、必修教科のほとんどが、原則として第1学年で履修すると書かれてありますが、もしそれを原則通りに実施すると、国語Ⅰ・現代社会・数学Ⅰ・理科Ⅰ各4単位、保健体育3単位、必修ではありませんが、英語Ⅰ4単位、芸術2単位を加えて25単位になってしまい、専門教科の単位数が極めて少なくなってしまいます。ところが、審議会答申には、専門科目の最低必修総単位数の3分の1程度を低学年で履修できるよう、普通教科・科目を分割履修することも認める（改善委員会報告の通り）とありますから、各必修教科の1学年履修の原則を崩して分割履修することの方が、弾力化という改訂の精神に合致することは明らかであります。木を見ずに森を見よとか、総論賛成各論反対とか、このような例はわれわれの周りには数多くあります。しかも、何が木でどこまでが森かということは、各々がおかれた立場によっても、その人のものの見方によってもかなり違いますから、物事の結論を出す場合の議論というものは、各人が初めから視点の拡大を心掛けなければどうにもならないことになりましょう。建築教育は工業教育の一部であり、工業教育は教育の一部であります。それぞれの立場は必ずありますが、教育という全体を通しての見方が、この頃やや欠けているような気がするのですが。

お祝いにならないようなことを書き並べて、祝辞に代えさせていただきます。

(前東京都立蔵前工業高等学校長)

研究会と全工協会とのつながり

全国工業高等学校長協会事務局長 宮地克巳

専門教員の自主的研究会の創始者として、戦後まだGHQの管理体制下にあった昭和26年発足した東日本建築教育研究会は、各学科別の研究組織の中では最も伝統のある研究団体で、昭和55年度は創立30周年になるという誠に喜びにたえない次第であります。

現在は発足当時に比較し問題にならない組織に発展された。この成長の蔭には歴代の会長を始め理事の先生方の並々ならない努力があったからだと考え、深甚なる敬意を表すものであります。

昭和26年度は全工協会が中心になり、戦後の工業高校（職業高校）建直しを図った年で、

6月11日には議員立法第1号として「産業教育振興法」が公布され、翌27年9月6日には政令が公布、同年12月23日には省令が公布され、初めての予算が7億6千万円計上され、補助金が国から負担されるようになった。

昭和29年11月11日には産業教育70周年を記念し、第1回全国工業高等学校科長会議が全工協会主催で開催され、翌12日には機械、電気、化学、土木、建築、染織・色染、工芸、採鉱・冶金・金属工業の各分野に分れた分科会がもたれ、建築を除く各学科の分科会ではそれぞれ研究会創立の動きがでた訳であります。現在全工協会に登録されている研究団体は30にも及んでいる程発展した。

また全工協会が昭和32年度から始めた専門科目の標準テストについても、東日本建築教育研究会は先覚者であったが、当時の伏見会長と話し合いを行い翌33年度からは全工協会に合流して頂き、建築教育の発展のため大局的見地から全工協会にこの事業をゆだねられたものと考えております。それから以降現在にいたるまで色々なつながりがもたれております。

さらに現在の工業教育会館の前身の会館（現在日本工業大学に移築され、工業教育記念会館と名付けられ再建されている）は、昭和12年建設されたものであったが、全工協会が取得した時点では図面がなかった。そのことを岡登先生（元都立小石川工教諭）に話したところ、先生は生徒の教材として旧会館をとりあげ、スケッチをもとに作成して頂いた図面が再建に役立つとは夢にも考えていなかった。

このように研究会を通じ色々な方とつながりができたことは、私にとっても全工協会にとっても幸したと考えております。

色々印象的なことは数限りなくありますが、与えられた字数の関係で、その一端をご紹介します。

「工高建築教育の崩壊」を書いたことなど

日本大学生産工学部建築学科教授 山口 廣

東日本建築教育研究会に部会が設けられたのは何年であったか正確には覚えていない。ただ、計画部会の最初の責任者をお引き受けしたことは確かだ。構造、施工、計画、製図といった部会制度は、奇しくも最近の大科目制を先き取りしているが、よい発想であったと今も思う。

本会は研究会の名称を持つが、アカデミックな研究団体ではない。情報交換と相互研修が主目的と、私なりに解釈していた。したがって最初から教科目単位の部会でなくてよいと思っていた。

特に熱心な会員でもなかったが、いろいろプランはあった。建築見学地図、建築史ワークブック、見学会、公開授業など、考えてはみたがほとんど実現しなかった。改めてこう並べてみると、現場ですぐ役立つようにと考えてみたものが多い。

しかし、会全体としての大きな仕事を思い出してみると、多様化の問題をはじめ教育制

度や教育行政に随分と振り廻わされたように思う。もともと現場のわれわれにとって、制度いじりは苦手なものだ。ところが、文部省や教育委員会は、本会を官許の諮問機関とも思っていたらしい。それならそれでよい、なぜもっと現場の声をよく聞き、じっくり腰を落着けて制度の手直しをしないのか、不満でならなかった。

数年前、ひょんなことから文部省の委員の末席に加えられ、ある委員会に毎月引っ張り出された。そこで製図のことが出、建築では壁、屋根で囲い取られる空間の表現手段として製図があると述べた。しかし、手法が同じだからと機械製図が優先し、建築製図は無視されてしまった。精密な機械のためには精密な図面が書ければよいであろう。しかし、建築ではただきれいな図面が書けても、豊かな空間把握の力は養えない。教養をその即物的な教授法の面からのみ見る視野の狭さに驚かされた。

工高の現場を離れてもう10年になろうとしている。工高もすっかり変わってきたようだ。私なりに関心を持ち理解しようと努力している。先年、ある雑誌に「工高建築教育の崩壊」なる拙文を寄せた。直後に関西の畏友から強い非難の書状を頂いた。標題がいけなかったらしい。崩壊とは何事か、俺達がこんなに頑張っているのに、現場を離れて傍観者になったからとて、工高はもう駄目ですよとは失礼な、というお叱りだった。

読んで欲しかったのは工高教師ではなく、その他の建築人であった。彼らを工高教師のシンパにしたかったのだ。

工高教育は曲り角に来ている。千葉県だけでも今後5年間で200クラス分の高校増設が必要という。しかし、工高はその中に一つの子定もない。

工高教育を破壊しているのは、試験制度であり文部省だ。教師がこれに手を借さずとも諦めてしまったら終りであろう。こんな時代にひとりでも多くの理解者をと、前記の一文を草した。

しかし、崩壊の本当の原因はもっと根深い所にあるように思う。それは工高だけでなく大学もすでに侵しは始めている。こんな巨大な障害を乗り越えるには、個々の教師の力はあまりに小さい。本会が衆知を集め、建築教育の未来を開く拠点であり続けて欲しいと願わずには居れない。

(元東京都立蔵前工業高等学校建築科教諭)

学校紹介

東日本建築教育研究会に入会の学校でそれぞれの特色を持たれている学校や、新設校、古い伝統のある学校などに下記のようなアンケートを求めました。(編集部)

- (1) 学校所在地・学校規模。(地名でなく判りやすい目標など)
- (2) 学校の歴史(旧制・新制度を含め創立から現在まで)
- (3) 学校・科の特色(教育方針・内容など)
- (4) 卒業生実態(卒業生の社会的地位・業界での活躍・有名人《建築以外などでも》)
- (5) 進路・就職状況(方面・職種・進学学校名など)
- (6) 其他(クラブ活動・地域社会とのむすびつきなど)

北海道

北海道旭川工業高等学校(全日制)

- (1) 国鉄旭川駅前一条通りを東へバスで15分。昭和56年をもって創立40周年を迎える木造2階建校舎がある。7科9間口、1,080名の大規模校である。現校舎は老朽化が激しいので、57年完成を目指し、旭川医科大の隣接地2万3千坪の土地に鉄筋コンクリート4階建の校舎を設計中である。
- (2) 昭和16年北海道庁立旭川工業学校として、化、建、土の3科で発足。昭和23年北海道立旭川工業高等学校と改称され、定時制課程も併置される。
- (3) その年によって多少の差異はあるが、1.5~2倍の競争率である。科毎の比較、全道的な比較でもトップクラスで、“信頼される人になれ”を目標に、主にゼネコン向け教育を行っている。
- (4) 古い卒業生あるいは近年卒の者は、地元企業へ就職する者が多く、更にはUターン者も加えて地元で独立するため、旭川市内の企業の大半は旭工卒で占めている。特に有名人はいない。
- (5) 例のオイルショック以来、就職は大企業から、小企業へと落ち込んだが、本年は多少上向き加減の様相である。就職率と進学率はやや半々であるが、進学先は、筑波大、千葉大2部で、日大、東海大旭川、東北工大、工学院大、各種専門学校。
- (6) 地域とのつながりはないが、同窓会とは濃く、部活動への援助は大きい。

北海道小樽工業高等学校（全日制）

- (1) 北海道。国鉄小樽駅下車、最上町行きバス15分。天狗山スキー場のふもと。後に天狗山、前に石狩湾を望む風光明媚な学校。7学科8間口。55年には鉄筋コンクリート4階建の校舎改築に着手予定。
- (2) 昭和14年庁立小樽工業学校として発足。以来道立小樽工業学校、道立小樽工業高等学校、北海道小樽千秋高等学校と校名変更となり昭和43年工業単置校として現在の校名になる。
- (3) 競争率は2倍前後で工高としてのレベルは高い方であるが、年々低下している。中堅技術者の養成を目標にしているが、近年進路は多様化

してきている。

- (4) 建築関係の管理者・中堅技術者として各方面で活躍中。同窓会建築部会の活動は盛んである。
- (5) 以前は大企業、設計事務所、官庁関係への就職はかなりあったが、最近は中小企業が多い。年々大学進学率が向上し、最近では5割前後になる。道工大が多く東海大、東北工大、八戸工大等に毎年若干入学している。建築関係が多い。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで、ボート部は全国大会出場の常連。他にサッカー、バレー、テニス、バドミントンなどが良い。

北海道小樽工業高等学校（定時制）

- (1) 小樽市。「運河と倉庫群」保存派と臨港自動車道の新設をめざす運河埋立派の論議が盛んな都市。小樽駅より最上行バス乗車10分。スキートのふるさと天狗山麓千秋通りに面す。
- (2) 昭和14年北海道庁立小樽工業学校設置、同19年夜間において授業を行う課程機械、電気科、同38年地域社会の強い要望で定時制建築科が設置される。
- (3) ここ数年来全日制普通科進学希望の増加や管内地域の過疎化に伴い、入学者、学力共に漸減傾向を示す。設計（製図、実習、構造）に力を

入れる。

- (4) 建築家業を継ぐ者を除き中小企業。進学、道工大、道都大、測量専門学校など。1年時より建築に就職進学した者の市内定着率が良い。
- (5) 就職分布、建築60%、製造業15%、商業部門10%、他公務員、運輸など。
- (6) クラブ活動。バドミントン部定体連地区優勝、全道大会優勝。定体連野球、バレー、バスケット各部共、優秀な成績をあげ、卓球個人優勝など運動部の活動がめだつ。

北海道帯広工業高等学校（全日制）

- (1) 北海道帯広市。国鉄帯広駅下車、国鉄バスで帯広駅前より帯広畜産大学行バスに乗り距離にして約5km、時間にして20分程で帯広工業高校につく。文教地区に指定されている閑静な地域に建っている。敷地面積は43,400㎡校舎延べ面

積は10,422.6㎡で並列式4線校舎からなり、第1線3階建鉄筋コンクリート造、2、3線は平家建ブロック実習棟4線2階建鉄筋コンクリート造実習棟からなっている。

- (2) 北海道帯広柏葉高等学校に併置されていた、

建築、土木と新たに設置された機械2間口の3科4間口で昭和39年4月1日付で開校された工業高校である。更に54年4月電気科が設置され、現在4科5間口の工業高校となる。

- (3) 生徒自身の希望で入学してくるのは46%前後で、親、教師に言われて入ってくる者が多い、最近では郡部からの入学者が減少して、市内からの通学生が多くなってきている。年度により異なるが競争率は1.5倍程度であり、レベルは少

しづつ低下してきている。

- (4) 最近の傾向として地元企業に就職希望する者が増えてきている。
- (5) 大企業就職8%程度中小企業70%、公務員、設計事務所、自営22%年度により多少異なる、進学は30%程で、東北工大、東海大、道工大、八戸工大、その他専門学校などに行っている。
- (6) 部活動は盛んで特にバスケット、ラクビーなどは地区でも強い部である。

北海道釧路工業高等学校（全日制）

- (1) 北海道釧路市。国鉄釧路駅、バス15分、釧路工業高校前下車2分、春採湖、春採公園が近くにある。昭和45年度に鉄筋コンクリート3階、1号館～3号館、一部平家2階の4号館が完成、現在、5科8間口である。

- (2) 昭和14年3月20日、北海道庁立釧路工業学校として、採鉱科、機械科、応用化学科の3科で発足、昭和23年4月1日、土木科新設、昭和38年4月1日、建築科、電子科新設、昭和45年4月1日、鉱山機械科（昭和38年科名変更）、電子科募集停止、建築科1クラス40名定員。

- (3) 中学校でしぼって受験するので、1.4倍前後で、工高としてのレベルは高い方であるが、年

々低下しつつある。大部分が市内の子弟であり、一部郡部の子弟である。設計製図、実習に力を入れている。

- (4) 中小企業に就職している者が多い。一部独立して、建築会社、設計事務所を営んでいる。有名人はなし。
- (5) 大企業就職0.5%、中小企業68～73%、設計事務所、自営1.5%、進学25～30%前後で、日大、関東学院、日本工大、東海大、道工大、道都大、その他の私大に入学している。主に建築関係が多い。
- (6) クラブ活動が盛んで、アイスホッケー、野球、バレーボールなどが良い。

北海道札幌工業高等学校（全日制）

- (1) 札幌駅前五番館デパート南側より市バス北桑園線乗車、北20条西14丁目下車（本校前）、その間約15分。道立工業試験場。公害防止研究所その他2研究機関と隣接。昭和51年現新校舎（鉄筋4階）に移転。機、電、建、土の4学科、各科学年定員80名。敷地面積53,000㎡、校舎延面積15,500㎡、別棟札工会館（鉄骨2階、延面積480㎡）。

- (2) 大正5年北海道庁立札幌工芸学校（北海道最

初の工業学校で採鉱、機械、木工の3学科）として発足、同9年土木・建築科が増設。昭和45年学科再編成により採鉱、工芸、工業化学、電子科の募集停止、現学科各2学級編成となる。

- (3) 過去5年間の競争率2.1～1.4（建築2.0～1.6）。入学レベルは工高としては高い方、普通高の市内新・増設と関連してかなり変動する。学習指導面では特に構造設計、計画、設計製図等の基礎的内容に重点をおく。生徒自身による建築研

究会も盛ん。

- (4) 地方自治体、大・中企業各方面に広く中堅、(部・課長、事業所長等を含む)として活躍、又会社・事務所経営者もかなりの数。議員、画家、医師、大学教授等も散見。同窓会員数17,300、(建築2,800)。支部数73。札工建築会の活動は活発でない。

- (5) 就職75～85%、大・中小企業、設計事務所等の建設系(女子は例年7、8名)、官公庁は少。進学は推薦入学が約80%、北海道工大、東海大等私大建築関係学科。
- (6) 運動系クラブ数17、文化系12、特筆すべき事項なし。地域との関連は殆んどない。

北海道札幌工業高等学校(定時制)

- (1) 札幌市。地下鉄北18条駅下車徒歩15分。五番館前発南新川バス停終点前。北海道大学農学部畜産学科裏手に当る。51年北海道の工業高校のモデル校として新校舎が落成すると同時に移転した。それまでの約60年間は藻岩山麓伏見山鼻の地に旧校舎があった。
- (2) 明治41年札幌第一工業補習学校として発足。昭和16年札幌市立工業学校。昭和24年北海道札幌工業高等学校となりその夜間課程(二部)と称された。定員40名32年から定時制と呼ばれるようになった。
- (3) 28年頃は受験者が多くなり、1組、2組と2クラスの時も数年続き、倍率も3倍ぐらいが続いた。20年以後45年頃までの卒業生のレベルは相当高く、地域社会に大きく貢献している。52

年までは北海道全体から入校、3分の2が地方、3分の1が札幌の下町出身子弟だったが、昨年から90%が札幌子である。設計(設計・製図)を中心としている。

- (4) 20年から30年頃の卒業生には社会的地位の高い者も多くいるが、これからは中小企業を中心となる者が多くなりそうである。校友会は各クラス毎にやっている。
- (5) 大企業就職0%、中企業10%・小企業60%・設計事務所、自営20%・進学は5～10%ぐらいで東海大・北海道工大・道都大・工学院2部程度である。
- (6) クラブ活動は定時としては盛んな方で、ボクシングは毎年インターハイ全国のトップクラス選手が出ている。

北海道苫小牧工業高等学校(全日制)

- (1) 北海道苫小牧市、国鉄苫小牧駅下車、国道36号線沿、徒歩約15分約58,000平方メートルの広大な校地に約13,000平方メートルの木造校舎が建ち、一部は創立以来の古さを誇っているが、明年は市北東部高台に移転新築に着手する予定になっている。
- (2) 大正12年3月5日設立され、創立以来56年の歴史と伝統を有する道内でも古い工業高校の一つである。現在6学科30学級のうち建築科は2クラス80名定員。

- (3) 建築科は創立以来の歴史があり、卒業生数、旧制435名、新制1,679名(うち女子34名)である。生徒は道内各地から志願するため優秀なものが多く、苫小牧市の発展のみならず、北海道の発展にも寄与している。質実剛健の校風のもと建築産業の広い分野に適応する人材の育成につとめている。また昭和53年度より設備コースを設置している。
- (4) 卒業生の中には、道議、市議はじめ業界の重

要なポストにある人々が多く、さらにスポーツの盛んな学校としても知られ、特にアイスホッケーで全国制覇の実績と実業団での国際選手、スピードではオリンピックメダリストの鈴木恵一選手などを輩出している。

(5) 進路状況では、古くから東京方面の大手企業に入社するもの多くその数こそ少なくなったが今なお中央に出て活躍している者もいる。近年道内、東北への工大進学者が増加している。

北海道苫小牧工業高等学校（定時制）

- (1) 苫小牧市末広町。苫小牧駅下車15分。苫小牧市の中心部に位置し、大正12年に建設された木造建築である。昭和57年に郊外の高丘に移転し、新校舎となる。
- (2) 昭和30年4月、定時制建築科設置。1クラス40名定員。
- (3) 国家・社会の有為な形成者として、人格の完成をめざし、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重じ、自主独立の精神

に充ちた、心身ともに健康な中堅技術者を育成する。

- (4) 大企業より、中小企業、事務所など営む者多い。
- (5) 大企業就職5%、中小企業80%、設計事務所、自営、官庁15%程度で年により変動ある。また進学も5~10%前後で主に建築関係が多い。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで卓球部、柔道部など全国大会に出場するなど活躍している。

北海道函館工業高等学校（全日制）

- (1) 函館市川原町5番13号（史跡五稜郭近くに位置する）校地面積47,375㎡、校舎面積15,575㎡鉄筋4階建。
- (2) 明治44年3月函館区立函館工業補習学校として設立し、大正10年3月函館区立工業学校として設立認可、翌年の大正11年3月に北海道庁立に移管され現在に至る（建築科1クラス、定員40名）。
- (3) 建築に関する知識と技術を習得させ、建築業、建築行政などの諸分野において設計、施工管理、指導などの業務に従事する技術者を養成することを柱として、進んで建築の文化的意識の理解、建築技術者の使命の自覚、建築産業への意欲と技術者としての態度と人格形成の育成を目指し

現業とのふれ合いを考えて、昭和28年より3年生の全員参加による夏季実習を復活、現在に至っている。

- (4) 大企業就職や独立して事務所を営む者も多く、北大教授の土橋由造氏等が同窓生である。（校友会も盛んで、各地に支部ももつ）を
- (5) 大企業就職10~15%、中小企業50~60%、設計事務所15~20%、官公庁5~10%、自営0~5%、年により変動あり。進学者は5~10%前後で北大、日大、明治、工学院、東海大、東北工大などに入学している。
- (6) クラブ活動では運動部が盛んで、硬式野球、ハンドボール、陸上、バドミントン、ラグビー、サッカー、相撲、文化系では放送局が盛んである。

北海道函館工業高等学校（定時制）

- (1) 学校所在地などは全日制と同じ、学科数は3（機械科2間口、電気科1、建築科1、の16学級）で生徒数は約400名を数える。
- (2) 明治44年3月、函館区立函館工業補習学校として設立。昭和5年8月現在の函館市川原町に移転した。又、昭和10年4月、函館市商工青年学校と校名変更。昭和16年3月、函館市立工業学校となる。昭和18年3月、修業年限4ヶ年の機械科、建築科、電気科の3学科が認可。更に昭和23年4月、学制改革により新制高等学校に昇格、校名を昭和24年4月、北海道立函館工業高等学校夜間部、翌昭和25年4月、北海道函館工業高等学校と改称、定時制課程となって現在に至る。
- (3) 全日制普通科指向のおおりを受けて、本校に入学せる生徒は、中学成績段階の低い者が受験させられて来ているのが実状で、必ずしも技術修得にはつながっていない。したがって本校での教育指導目標を勤労学徒としての喜びをもち、かつ、健康で、情操豊かな中堅技術者としての資質の発見、育成につとめている。
- (4) 卒業生の実態は全国的にまたがり活躍。最近の卒業生については、中規模建設業の監督技術者の地位にある。当地で有名な澄建築事務所の所長、澄信一氏もその一人である。
- (5) 石油ショック以来、進路は若干閉ざされているが、本州に就職せるものの中、Uターン現象も目立つ。クラスの三分の二くらいは大工をしている関係もあり、際立って職業の転換者はいない。
- (6) 地域との結びつきを考慮、本校では雇用主懇談会を定期的に開催、交流を計っている。

北海道名寄工業高等学校（全日制）

- (1) 北海道名寄市。国鉄宗谷本線名寄駅下車徒歩で20分。我国最北の建築科設置校。旧制名寄中（名寄高校）の跡地である。国道40号線に面し、木造・一部鉄筋コンクリート2階建の校舎を有し、自然環境にはめぐまれている。
- (2) 昭和38年名寄高校工業科として発足。同42年建築科設置1クラス40名定員。同50年名寄工業高校として分離独立し開校。
- (3) 「実践力に富む中堅技術者を育成する」という教育目標に従い、特に設計製図（各学年における自由設計）実習面に力を入れている。これらより、道北圏での本校に対する期待度は大きい。
- (4) 大企業指向から中小企業指向へと変化して来ている。学校の歴史が新しいためかOB会（名建会と名称）における交流が全道各地で盛んに行なわれている。
- (5) 道内中小企業に大多数就職。進学率は10～15%前後で、日本大学、日本工業大学、北海道工業大学、短期大学及び専修学校等に進学。最近の傾向では特に専修学校への進学が増加の傾向にある。
- (6) クラブ活動は運動部が中心。バスケット・陸上・スキー・野球等が良く、文化系のクラブでは郷土研究部が良い成果をあげている。地域との結びつきは地元建築士会（現場見学・学術講演会等）を通じ市民の関心は強い。

北海道美唄工業高等学校（全日制）

- (1) 石狩平野の中央に位置し、前には石狩川後には石狩炭田を持ち古くは屯田兵開拓の歴史を持ち、現在は北海道総合開発の内陸工業団地の中心となっている創立40年の歴史は、真の開拓精神を養い恩に報いる力を協し自ら研鑽する誠実な人をつくり、近代工業技術に即応できる勤勉な技術者を養成することを目標にしている。
- (2) 昭和16年北海道庁立美唄工業学校として発足、26年建築学科が設置される。現在2学級80名計240名の定員となっている。
- (3) 校下は札幌周辺から北空知まで広く点在し遠くは礼文島及び利尻島からも毎年入学をしてお

り空知の工業高校として支えられている。実験実習、設計製図を中核とした教育課程を編成しいずれの分野へも進みうるよう配慮している。

- (4)(5) 最近では道外に就職する者が減少をたどり90%近くが道内（特に札幌市周辺）の希望である。そのため地元企業への就職が目立ち始めている。一方進学率も高まりをみせ、現在35%程が主として道内大学への進学である。
- (6) クラブ活動は盛んであり、バレー・サッカー・レスリング部が全国大会に数多く参加し、特にレスリング部からオリンピック選手が出ている。

北海道室蘭工業高等学校（全日制）

- (1) 北海道室蘭市。東室蘭駅下車西口より徒歩で約10分、栗山の麓宮の森町。普通教室及び管理室などRC造3階建2棟、各科実習室は現在1棟に集めるプランで改築中、RC造4階建（56年度完成予定）
- (2) 昭和16年道庁立室蘭工業学校として発足、機械科・金属工業科が設置、以後土木科・電気科・工業化学科・電子科と逐次増設、昭和39年最後の科である建築科が1学級として新設された。現在7科9学級、ほか定時制機械科1学級の規模。
- (3) 「自主協同」を校訓に将来建築士を目指す者として広く一般に教育課程を編成しているが、構造や設計製図には特に力を入れている。

(4) 地元を中心に広く関西までの建設会社に建築技術者として活躍、近年独立して店を持つものも現われて来ている。同窓会の建築部会として年1回程総会を持つ。

- (5) 就職希望は殆ど建設会社、求人は大手大企業から地元の小企業まで色々であるが近年の不況で中小企業になりその数も減少した。進学は道内及び東北関東の私立が主で専門学校がふえて来ている。本校の中で1番多く、クラスでは30～35%。
- (6) クラブ活動は運動部が盛ん、ただ近年成績はふるわず活動も下降線。地元の要請で新設された科であるので地元建設業界・建築士会とも前向きである。

北海道留萌工業高等学校（全日制）

- (1) 留萌市。国道275号線を233号線に入って約30分。深川から車で約1時間の日本海に面し

た閑静な港町の入口近く、すぐ山手の小高い丘に電気科2、土木1、建築1、計4間口の2階

建鉄筋コンクリート、一部平家の校舎が広大な敷地の片隅に位置している。

- (2) 昭和38年、留萌高等学校に電気科、土木科を設置、39年、建築科を設置、41年北海道留萌工業高等学校として独立開校、現在に至る。
- (3) 健康かつ明朗な生徒の育成をはかり、最近はさらに、建築に対して興味、関心を高めさせるよう努めている。授業面では製図、実習に力を入れ、座学との融和に力を入れている。
- (4) 本校の歴史が浅いため、あらゆる面で弱体で

は有るが、卒業生の着実な成長により少しづつではあるが力をつけ、各方面で活躍し、建築科の同窓会も発足4年目を迎えた。

- (5) 最初の傾向として道内の希望者が圧倒的に多く、札幌、旭川、留萌近郷に就職、進学は、約15%、その他は公務員10%程度。
- (6) 野球練習場、サッカー、テニス、さらには柔剣道場と恵まれた環境の中でクラブ活動も活発である。

旭川実業高等学校（全日制）

- (1) 旭川市。旭川駅よりバス30分。摩栖神社前下車。旭川市の北端市街を俯瞰する春光台に125,000㎡の広大な緑地帯に位置し、鉄筋コンクリート3階、第1・第2体育館、屋外グラウンド2面、屋内野球練習場等、他校に類例を見ない諸設備を完備している。
- (2) 昭和35年に創立し工業課程、商業課程、普通課程を設置し、全国唯一の私立の総合高等学校である。36年建築科設置、2間口90名定員である。
- (3) 本校の建築科は、道内私立高校の中では唯一の設置校です。そのため例年建築科を志願する

生徒が多く、3倍以上の競争率となっている。実験実習、製図等に重点をおいている。

- (4) 大企業就職よりも中企業、独立した事務所を営む者が多い。有名人なし。
- (5) 市内企業45%、道内企業33%、道外企業12%、進学10%前後で、道内の大学に入学している。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで、女子バレー部の全国第3位を始めとして、野球部・レスリング部など良い。又科として毎年国立大雪青年の家の研修及び市内企業の協力を得て現場見学を行なっている。

青森県

県立青森工業高等学校（全日制）

- (1) 青森市。国鉄青森駅西口下車12分、国道、バス停篠田より5分、北側は沖館川に面し周辺は住宅地、RC3階建4棟、2階建2棟、その他。
- (2) 大正2年。乙種学校家具科として発足、同6年青森市立工芸学校、同15年建築科設置、昭和13年県立移管。同23年青森工業高等学校となり、38年より2クラス80名定員となる。昭和57年に創立70周年を迎える。
- (3) 中学からの受験競争率は1.5倍程度、建築科

設置の県立校は2校のみなので、県内各地域からの応募者が多く、郡部の生徒は比較的目的意識が高い。3年生の実習は選択制で、構造設計、計画測量関係、パースの3コースから選択なので好評である。

- (4) 中小企業の請負及び設計事務所の経営する者が多く、官公庁、国鉄、公社等に勤める者がこれにつぐ。有名人なし。
- (5) 中小企業就職65%、設計事務所、自営20%、

進学15%程度で、八戸工大、東北工大、金沢工大、足利工大、日大、日本工大等で、専修学校へ入る者もある。

(6) 運動部は校地が狭小でグラウンドがとれないが、

ラグビー、バドミントン、サッカー、ヨット、山岳などが良い。又演劇部の活躍も顕著である。地域とのつながりは業界、士会を中心として盛んである。

県立弘前工業高等学校（全日制）

(1) 青森県弘前市。国鉄弘前駅より秀峰岩木山の方向に歩いて35分。最北端の名城弘前城と約3千本の桜をもつ弘前公園と南西に接し、岩木山の全貌を仰ぎみる閑静な場所にあり、RC造の校舎（一部S造）は、昭和37年に着工し44年完成、エレベーターが設備されている県内最大規模の学校である。

(2) 明治40年青森県工業講習所として発足、同43年2月28日青森県工業学校の認可、建築・木工・漆工の3科が設置され、現在は建築（2学級）、インテリア（1学級）、機械（2学級）、土木（2学級）、電気（1学級）、電子（1学級）、情報技術（1学級）の7科で定員1,200名である。

(3) 生徒は、津軽地方の者が多く、受検者の競争

率は約1.5倍で、得点も県下工業高校の中でもレベルが高い方である。特に設計製図に力を入れ、きびしい指導をしている。

(4) 歴史が古いので、設計事務所、建設業の自営者が多く、また、それらの従業員および地方官庁職員も卒業生でしめられている。

(5) 中小建設業への就職が多い。一方進学では、私立工業大学、専門学校が多く10～20%で、建築関係を選んでいる。

(6) 運動部の活動が盛んで、特にバレー、新体操、庭球は全国大会で優勝している。近くの大鰐スキー場には「山の家」があり、校内スキー教室、合宿に利用している。

八戸工業大学第一高等学校（全日制）

(1) 青森県八戸市。八戸線ムツ湊駅下車10分。市営バス山手回り工大一高前下車1分。全校生、1,500名、うち男子生徒1,485名と県内随一の規模を誇る。

(2) 昭和31年八戸高等電波学校として発足。昭和34年八戸電波高等学校を設立。昭和36年校名を八戸電波工業高等学校に改称。昭和43年建築科設置。昭和50年校名を八戸工業大学第一高等学校に改称現在に至る。

(3) 競争率は3倍と県内でも高く、学業、スポーツの振興を促し人間形成につとめる。設計、製図と実習に力を入れており文化祭においては評価が高い。

(4) 中小企業や設計事務所に就職し活躍し評判が良い。メキシコオリンピック自転車競技に本校卒業生、小笠原義明、小笠原嘉、岡堀勉の三君が出場。同窓会星雲の会盛ん。

(5) 大企業5%、中小企業80%、自営10%、設計事務所5%。県内、県外の比率は6対4で県内多い。進学は八戸工業大学が圧倒的に多い。他に国士館大、東海大、日大、日工大である。主に建築関係が多い。

(6) 部活動は運動部が盛んで、ボクシング、自転車、軟式庭球、レスリング、弓道、洋弓、バスケットボール、バレーボールが強い。県高校総体において4度闘魂旗を獲得、名門八工大一高

の名をほしいままにしている。地域住民と共に

クリーン白銀を行っており評判が良い。

光星学院 野辺地工業高等学校 (全日制)

- (1) 青森県。国鉄野辺地駅下車、徒歩30分。県立野辺地高等学校よりさらに、烏帽子岳へ向って進んだ。あたりを山と緑に囲まれた所にある。鉄筋コンクリート3階の本館、新館、それに、実習棟3棟、自動車実習棟、体育館、武道館からなる。
- (2) 昭和48年野辺地工業高校として発足。同年建築科設置1クラス40名定員。
- (3) 県内で数少ない建築科であるので、競争率は1.5ないし2倍前後である。他の学科に比較して高い方である。大部分は、青森市内、野辺地区、下北地区より通学している。学科内では、主に実習、製図関係に重点をおいている。
- (4) 県内、県外工務店、設計事務所、公務員でそれぞれ活躍している。又、昨年度より、関東地区在住の卒業生就職先が集まり後援会が発足した。
- (5) 大企業就職4~5%、中小企業65%、設計事務所、自営30%となっている。進学する者は3~4%で、日大、東洋大、東京理科大、日本工業大などである。
- (6) クラブ活動は主に運動部で、特に、野球部、体操部、ハンドボール部が活躍している。地域との結びつきは特でない。

岩手県

県立大船渡工業高等学校 (全日制)

- (1) 岩手県大船渡市。国鉄東北本線一関駅より大船渡線に乗換え、終点盛駅下車。バス、タクシーで10分。機械2、電気・電子・工化・建築各1学級の720名定員の中規模校。HR棟RC造3階建。実習棟・体育館S造平家建とRC造2階建。
- (2) 昭和37年機械・電気科、昭和38年電子・工業化学科、昭和39年建築科設置。中学校で調整して受験させるので競争率は1.2倍位と低いが、工高としてのレベルは高い。しかし低下してきている。設計(構造・製図)関係の教科に力点を置いている。
- (4) 卒業生は未だ若いので高い地位での活躍は目立っていない。
- (5) 就職希望者の内の県外志望者が半数以上であるが、最近では地元指向も強くなっている。大企業より中企業への就職が多くなっている。進学は15~20%前後で、日大、日本工大、東北工大、八戸工大などが多く、最近では各種学校へも多くなっている。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで、テニス・柔道などが良い。山田町の海中海岸青年の家で1学年全員が入学時の研修を行う。地域との結びつきは特でない。

県立久慈工業高等学校（全日制）

- (1) 岩手県。国鉄久慈線・陸中野田駅下車徒歩15分(約2km)。国道45号線を北上左側。宇部川を眼下に見おろす高台にある。54年度では鉄筋コンクリート3階建の管理棟、HR棟、実習棟の各棟が完成、55年4月移転独立（県内最新の工業高校である。
- (2) 昭和18年岩手県立久慈高等女学校として発足。昭和39年工業科増設のために設置。昭和55年移転独立。1クラス40名定員。
- (3) 県北唯一の学科である。競争率は1.2倍前後、中学校の進路指導が良く行われて工高としてレベルは高く純朴である。反面出稼ぎ家庭の子弟が多い。
- (4) 大、中小、各企業、地元の役場、県内の設計事務所に就職している。又最近はUターン組が地元の企業に再就職する傾向が見られる。
- (5) 大企業就職5～6%、中小企業90%程度。地元就職を希望する者が増加しているが、受け入れ企業が少ない。親の出稼ぎの関係上、大工を希望する者もいる。
- (6) 特に運動部は盛んで、54年野球部が甲子園に出場、三船十段出身地の関係上柔道が強く国体選手を輩出している。

この地は、教育振興に理解のある地域であり、校地整備等の努力がなされ、特段の結びつきが強い。

県立盛岡工業高等学校（全日制）

- (1) 岩手県。盛岡市郊外の紫波郡都南村羽場に新築移転(昭45)。東北本線盛岡駅より8kmの距離にあり、駅よりバスは飯岡線で約40分、徒歩5分。全日制8科・定時制2科定員1,400名。校地99,587㎡、建築面積19,781㎡の大規模校。
- (2) 明治30年岩手県実業高校として発足し最も古い学校の一つ。80年余の歴史をもち建築科は当初より設置されている。現在1クラス定員40名。
- (3) クラブ活動ではラグビーでは全国的に名が知られており、スポーツ各部の活躍が盛んである。建築科は工高としてのレベルの中では最高であるが、年々若干の学力低下がみられる。選択制は古くから実施しており現在は設計製図・構造設計・実習・英語を実施している。
- (4) 地元では建設業・設計事務所の経営や市会議員等に活躍する者もあり、大手建設業の中でも取締役・部長・支店長・出張所長等の地位の人もあり、設計で活躍が目ざましい人もいる。有名人は特になし。同窓会では建築科出身者が意気盛んで、特に建築科の同窓は古くから二日会(月の2日に会合したことによる)なる会を開き懇親と研修を深めている。
- (5) 進学は20～25%で、日大・工学院大・日本工大・東北工大・八戸工大等。就職は地元希望者が多くなり殆んど中小企業の建設業・設計事務所・官公庁が多い。県外就職は10～20%で、大企業の営繕・中小企業の建設業が多い。
- (6) 特にスポーツクラブの活動が盛んである。地域との結びつきは特になし。地理的な面もありバイク通学学生が多く問題を残している。

- (1) 東北本線北上駅下車徒歩15分。近隣には教育施設が多く環境に恵まれている。また、北上川、和賀川が近くを流れている。春は桜、つつじの花が見られる。
- (2) 昭和22年洋裁を中心とした専門学院を開設。昭和26年に学校法人黒沢尻女子学園に変更。昭和36年専修大学の付属となって専修大学北上高等学校となる。普通科、商業科、工業科(建築、土木、自動車)がある。建築科の定員は40名。
- (3) 建築科設置の高校が少ないため、岩手県はもちろん県外の生徒も多い。競争率は2倍前後である。実習、設計関係に力を入れる。
- (4) 地元就職が多く、中小企業が多い。設計事務所を営む者もいる。有名人なし。
- (5) 大企業就職2%、中小企業58%、設計事務所10%、自営15%、年により変動ある。進学は15%で、日大、東北工大、東北学院大、八戸工大、北海道工大、専大、専門学校。主に建築関係。
- (6) クラブ活動は盛んで、陸上部、卓球部は岩手県でトップレベルであり、岩手県大会で数回優勝。野球、レスリング、羽球の各クラブも県大会、東北大会で活躍している。

秋 田 県

県立大曲工業高等学校（全日制）

- (1) 秋田県、大曲市。奥羽本線、大曲駅下車20分。駅より南方向の奥羽本線に接する閑静な場所である。48年度で全校舎が完成、鉄筋コンクリート4階建の教室棟、管理棟、各科工場棟からなり、校地面積57,364㎡の広々とした敷地の中に、建築総面積14,611㎡の近代設備を備えた校舎である。
- (2) 昭和37年県立大曲工業高等学校として創立した歴史の浅い学校である。建築科設置され、1クラス41名の定員である。
- (3) 校訓として、正(掟を守り、他人に迷惑をかけない)、忍(風雪に耐え、たくましく生きる)、創(積極的に物事をなす)を掲げ指導している。
- 科としては実社会ですぐ役立つ実技を中心に、製図、実習に力を入れている。大部分市内とその近郷の子弟である。
- (4) 大企業就職よりも中小企業、地元では独立して、事務所を営む者も多くなってきた。校友会も地元を中心に活動している。
- (5) 大部分中小企業で、80%、公務系10%、自営10%、年度により変動がある。進学は10%前後で、日大、東北工大、日本工大等、の建築系へ入学している。
- (6) クラブ活動は盛んで、運動部では陸上、水泳、卓球、文化部ではプラスバンド部が地区で良い方である。

県立秋田工業高等学校（全日制）

- (1) 秋田市。秋田駅下車徒歩25分。バスでは市内大回り線で新中島にて下車し徒歩5分。遠くに太平山の凜たる雄姿を仰ぎ近くに清冽な旭川に
- 面し、奥羽線が境界線となっている。鉄筋コンクリート4階建2棟他に実習棟3階建1棟59年にはこれが3棟になる。7科で1,280名内女子

48名、敷地 67,858 m²。

- (2) 明治36年3科で発足。大正3年建築科廃止、大正15年建築科再設置、1級40名。
- (3) 中学校の志望調査の段階では2.4倍程の競争率で全県一であり、実業高校ではトップレベルにある。目標としては心身共に健全にして豊かな教養を持ち工業界の進展に寄与する中堅技術者の養成を期している。設計製図に力を入れる。
- (4) 殆んど施工会社であり、中堅技術者として活躍している。設計事務所にも入社している。科以外で、金子洋文(劇作家)夏井昇吉(柔道・世界チャンピオン)遠藤幸雄(体操・世界チャン

ピオン)加藤幸夫(プロテニス)

- (5) 中企業の施工方面に多く県外2割、県内3割、公務員2割の志望であるが採用者は1.5割になる。進学は3割強である。殆んど建築関係である日大・東洋大・東海大・東北工大・日本工大・八戸工大・中央工学校、時には国立大に入学する。
- (6) クラブ活動は盛んであり、ラグビー全国優勝13回、国体も13回、他全国大会優勝にボクシング・レスリング・陸上がある。文化部に建築研究クラブが活躍中。

県立秋田工業高等学校(定時制)

- (1) 秋田市。国鉄秋田駅より、市内大回り環状線に乗車し、新中島バス停にて下車し、徒歩で旭川にかかる中島橋を渡り5分。鉄筋コンクリート4階建現在工場棟建設中。
- (2) 昭和26年7月2日より授業開始。機械科・電気科・修業年限4ヶ年生徒定員若干名をもって発足する。昭和32年4月1日・建設科増設。
- (3) 生徒数は年々減少し、現在在校生数は150名

となる。

- (4) 中小企業に在学中より就職し、卒業後引き続き会社におるものと、他に就職するものがある。
- (5) 中小企業80%、自営10%、その他年により変動あるが、進学は1~2%前後。
- (6) クラブ活動は、特に軟式野球部の活躍がめざましく、2年連続全国大会に出場している。毎年1・2学年宿泊研修あり。

県立能代工業高等学校(全日制)

- (1) 秋田県能代市。男鹿半島の北側に位置し、五能線能代駅下車20分、能代公園や広大な砂防林に囲まれた静かな環境に、70年の歴史を誇る7科27学級、生徒数1100名の学校である。
- (2) 明治39年能代港町立工業補修学校として発足以来、秋田県工業講習所、県立能代工業学校を経て学制改革により、県立能代工業高等学校となる。建築科は昭和2年の工業学校設置と同時に52年の歴史があり、現在一学級定員41名である。
- (3) 通学範囲は県北部一帯と青森県の一部で、「和

衷勤労」の校是のもと勤勉にして信念に満ちた人物の育成をめざす。建築科は希望者も多く、良く全校をリードしている。構造設計を中心とする基礎学力の充実に力を入れている。

- (4) 県内では県北部一帯への人材の供給源となっている。また関東を中心として県外で活躍するものも多い。建築科卒業生1,500名を数え、建設会社・設計事務所を営むものも多く、強力なネットワークを誇る。
- (5) 県内30%、県外35%、進学25%、公務員・自営など10%程度で、近年とくに進学率が上昇が

目立っている。就職は総合建設業がほとんどで90%に達する。進学では日大・東北工大などの建築学科である。

(6) バスケットボール部は東北の雄として、全国

優勝13回におよび、50年、51年には二年連続三冠王となるなど輝やかな実績を誇る。他に重量挙げなども優勝経験をもち運動部の活躍は目覚ましいものがある。

県立由利工業高等学校（全日制）

- (1) 秋田県本荘市。国鉄羽越線羽後本荘駅下車、さらにバスで20分本校学校前下車、近くに子吉川と国道7号線があり南に鳥海山を望み、西には日本海が控えている所にあります。
- (2) 本校は昭和37年に、急速に進展する産業界の要請と地元子弟の強い高校進学希望に応えるため、地元および県当局の熱望と協力によって設立され県立由利工業高等学校として発足した。当初設置学科としては機械科3学級、電気科2学級、工業化学科1学級であったが、昭和47年1月10日建築科設置決定が決まり、現在では機械科2学級、電気科2学級、工業化学科1学級、建築科1学級となって1クラス定員41名であります。
- (3) 約10万㎡の広大な校地には、工業高等学校にふさわしい近代的な校舎、実習工場、および各

種運動施設等が整備されている。また教育方針として「自律精神を基盤とし、全人教育を目指し、かつ時代に即応する工業技術者の養成を期する」であり、建築科でも教育方針に従って正しい職業観、使命観を把握させると同時に実験実習を通して理論に即した技術を習得させている。

- (4) 一般に中小企業の建設会社へ就職しています。比較的新しい科でもあるため有名人などではありません。
- (5) 進学については、日本工業大学、東北工業大学、日大工学部など建築関係の方へ進んでいます。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで、特にサッカー、バスケットボール、テニスなどめざましい活躍をしています。その他地域社会のため学校開放も行なっています。

県立横手工業高等学校（全日制）

- (1) 秋田県。「かまくら」で有名な横手市。奥羽本線横手駅下車5分。鉄筋コンクリートR棟（4階建）・実習棟（3階建）。53年屋外運動場も完成し、施設・設備は充実している。
- (2) 昭和18年横手町立工業学校として発足。昭和48年建築科設置、1クラス41名定員。
- (3) 校訓「誠実」「創造」「持久」。教育目標「人間形成に力点を置いて、心豊かな中堅の工業技術者を育成する。」県南部の農家の子弟が多く、地域産業の中堅技術者として管理・設計・施工に力を入れている。

- (4) まだ4回しか卒業生を送っていないが、第1回卒業生の3分の1が2級建築士合格、官公庁・建設会社・設計事務所などで着実に活躍している。有名人なし。同窓会盛ん。
- (5) 県外就職約30%、県内就職約40%、進学約30%。大企業約5%（積水ハウス等）、中小企業約55%、官公庁約10%（県職員等）、進学約30%（東北工大、工学院大、日大、金沢工大等、専門学校も多い。）主に建築関係。
- (6) 陸上・柔道・バドミントンなどが良い。セミナーハウス建設中。

山形県

山形電波工業高等学校（全日制）

- (1) 山形県天童市。国鉄奥羽本線漆山駅下車徒歩30分。国道13号線（山形バイパス）と立谷川に面し、鉄筋コンクリート造（3階建、4階建）および体育館が国道より見ることができる。
- (2) 昭和29年山形高等無線電信学校として発足。昭和42年建築科設置1クラス50名定員。
- (3) 私学の特性を生かした学園づくりに努めている。入学する生徒の大半が近隣の建築関係の子弟が多く、為に就職も自営がけっこう多い。設計（木造等）、実習（造形・測量）に力を入れている。
- (4) 卒業生の多くは、企業の中堅として第一戦で活躍している。卒業生の交流の場として「建交会」がある。
- (5) 最近の傾向として、県外への就職よりも県内への就職の方が多く、その内訳は、建設関係50～60%、設計事務所10%前後、自営20%前後、進学（大学・短大・専門学校）10%前後で主に関東近辺である。
- (6) クラブ活動は文化部、運動部共に盛んで、特に、文化部における書道部、運動部における卓球・テニス・陸上・空手・野球の各部にめざましい活躍がみられる。

県立山形工業高等学校（全日制）

- (1) 山形市。山形駅より3km余、北山形駅より東1.5km、徒歩20分、山形駅より山交バス千歳公園下車1分。41年本校舎RC4階建完成。43年、建築科専用校舎4階建竣工。
- (2) 大正9年工業学校として発足。戦後21年建築科設置して、市立山形工業学校を合併収容し建築科の授業を開始。
- (3) 建築科の入試競争率は極めて高い、県内広範囲から集る。特に構造設計、製図に力を入れる、県内卒業設計コンクールにおいて入選。
- (4) 4～5年前迄は大企業就職が多かった。近年公務員、設計関係多い。石川島播磨重工業(株)長、大学教授、地方の企業社長、設計事務所所長多数。
- (5) 大企業就職20%位、中小企業50%、進学20%、山大、日大、理科大、各種、自営その他10%、近年特に設計事務所就職者多い。
- (6) クラブ活動は運動部盛んで、卓球、サッカー、柔道が強い。山岳部インターハイ優賞、文化部は特に絵画部、県展入選者多数、建築科内で生徒の研究班を編成し(建友会活動)、県内古建築の実測、和算の研究、骨材の研究等々、好評を得る。

県立山形工業高等学校（定時制）

- (1) 山形市。山形駅より東北3km、北山形駅より東1.5km徒歩20分、山形駅より山交バス千歳公園下車1分。鉄筋コンクリート造4階建。
- (2) 大正9年発足。戦後23年定時制課程が設置。昭和36年建築科設置。(定員1クラス30名)
- (3) 大部分の生徒は、昼建設関係職種で働いてい

る。建築構造、施工、実習、製図関係に力を入れる。

- (4) 建築施工関係がほとんどで、小企業の独立者もいる。卒業15周年記念式典を盛大に行う、ふくろう会。
- (5) 小企業（施工関係）50%、建築関係自営者、（大工、建具、木工など）40%、進学（含各種校）10%。

- (6) 全国定時制体育大会に次の運動部が出場し、柔道とバレーボールが優勝した。柔道、剣道、バレーボール、野球、陸上。ETA（雇用者と教師の会）研修会、職場訪問および見学など、事業所との連絡を密にする。

県立鶴岡工業高等学校（全日制）

- (1) 山形県鶴岡市。国鉄鶴岡駅より徒歩で約25分。市の中心にある鶴ヶ岡城跡（鶴岡公園）を廻る濠に正門が面している。49年迄に木造校舎を解消して鉄筋コンクリート4階建の校舎となる。一学年7クラスで生徒数は840名。
- (2) 明治28年鶴岡町立染織学校として発足。大正9年山形県鶴岡工業学校となり木材工芸科（後に建築科と改称）を設置。現在1クラス40名定員。
- (3) 入学志願者は毎年1.5倍程度であり、中学校の進路指導によるものか建築科生徒のレベルは高い。基礎的な専門教育に重点を置き、いづれ分野でも活躍出来るように教育している。庄内一円の2市3郡より通学し建築関係者の子弟

が多い。

- (4) 官庁・大企業・中小企業への就職者、建設業・設計事務所経営者など全般的に分布している。近年地元への就職希望者が多い。有名人なし。
- (5) 中小企業50%、設計事務所・自営20%、他の30%は進学であるが年により変動あり。日大・東京電機大・東海大・東北工大・日本工大などの私立工大多し。工学院大二部などのほか専修学校進学者もあり、殆んど建築関係である。
- (6) 運動部がさかんでサッカー・バレー・水泳・弓道・テニスなどがよい。文化部としてはブラスバンドも活躍している。地域との結びつきよ

県立鶴岡工業高等学校（定時制）

- (1) 鶴岡駅下車。旧鶴岡城畔西側にあり、全日制と併置。
- (2) 昭和23年夜間定時制課程として発足。電気、機械、建築の3科設置。同27年に電気通信科設置、同38年電気通信科を電子科に科名変更。同52年電子科廃止。同54年電気科募集停止に伴い機械科を機械電気科と科名変更する。
- (3) 当地方に建築科のある定時制高校がないので、酒田市方面、新庄市方面からの入学者もあり年々入学卒が減少している中で定員の60%以上を維持している。大部分大工の子弟が多く、家業

を継ぐ者と施工業務に従事する者が多いので特に実習と設計（構造・施工・製図）に力をいれている。

- (4) 中小企業、特に独立して施工業務に従事する者が多い。
- (5) 中小企業に就職10%自家業75%進学15%（名城大学、中央工学校、工学院大学二部、専修学校等）
- (6) クラブ活動は、軟式野球部と柔道部が活躍、軟式野球部は53年度、柔道部は54年度全国大会に出場。学年行事として毎年1年海浜訓練、2

年スキー教室、3年登山、4年修学旅行を実施

している。

県立米沢工業高等学校（全日制）

- (1) 山形県米沢市。国鉄奥羽線米沢駅下車。西へ徒歩20分。上杉神社の前にある静かな環境。本校舎は鉄筋3階建の白亜の建築である。
- (2) 明治30年に市立工業学校として発足し、染色科と機織科をおいた。その後年々拡張発展を重ね、現在は、色染・繊維工学・建築・機械・工業化学・電気・土木の7学科24クラスの県下一の規模を持つ学校になった。創立82年の伝統を持ち卒業生は産業界の重心的技術者として各地で活躍している。
- (3) 入学時の競争率は1.5倍程度で工高としてはレベルの高い方といえるが、近年質的低落現象は否定できない。しかし建築科は依前高資質な生徒が多く、授業面ならびに進路面での落ち込みはあまりみられない。設計関係に力を入れている。
- (4) 大企業よりも中小企業で活躍している者が多く、独立した事務所を営む者も相当多い。特に有名人はいないが質実剛健を売りものにして業界の評価も高い。
- (5) 大企業は僅かで、中小企業就職者が圧倒的に多い。設計事務所希望が3割以上を占める。進学は10%～15%程度で、東北工大・日本工大・工学院大・関東学院大等に進む。近年各種学校への進学希望が目立っている。
- (6) クラブ活動も活発だが、校地グラウンド狭小のため苦慮している。入学早々、磐梯青年の家で宿泊訓練をし、修学旅行・工場見学等を有機的に実施し、建築技術者としての素地作りに懸命である。

県立米沢工業高等学校（定時制）

- (1) 山形県。米沢市、丸の内、一丁目、上杉公園の前にある。
- (2) 米沢工業高等学校に併設校として定時制が創設されたのが、昭和23年7月、染織科19名、建築科31名、機械科28名、計78名で発足する。昭和36年に電気科が増設されたが、現在は染織科が廃科となり、三科、生徒総数214名である。当建築科81名（1年～4年）昨年盛大に30周年記念を行った。
- (3) 近年定数に充たないため全員合格、そのため学習、生徒指導等に関して問題が多く大変である。大工さんの子供が多い。一般構造、実習、製図に重点を置く。
- (4) 中小企業独立している人が多く、後輩を雇用し共に地元で活躍している状況で80%位。特に有名人なし、校友会盛ん（建築OB会と称し、年1回研修会を兼ね総会を行い連携を持つ）
- (5) 中小企業50%、自営40%、進学10%、就職先はほとんど地元が多い。進学は短大、専門学校である。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで陸上、柔道など毎年数名全国大会出場している。

宮 城 県

県立白石工業高等学校建築科（全日制）

- (1) 宮城県南・白石市。国鉄東北本線・白石駅下車。東方に向って徒歩約15分、蔵王連峰を北西に眺める小高い丘陵地帯にあり、国鉄の車窓からも眺望できる。学校規模は5学科21学級でRC造3階建の校舎の奥に各学科の実習場が連立している。
- (2) 昭和37年開校、機械科3、電気科2、建築科1学級で発足、現在、機械科2、電気科2、建築科1、工業化学科1、設備工業科1学級、1学級定員40名。
- (3) 校訓「誠実」のもと、己の使命を自覚した堅実な建築技術者の育成をめざして、生徒と職員が懸命な努力をしている。
- (4) 歴史の浅い学校で開校当時の卒業生でもやっと30歳台になったばかりであるが、二級建築士はもちろん一級建築士の免許取得者も数十名。一級建築士設計事務所の開設者も数名を数える。
- (5) 卒業年次により進路状況に多少の差はあるが、大体、就職者70～80%、進学15～25%、家業その他5～10%で、最近、大企業より中小企業、県外よりも県内志向が目立つ。
- (6) 運動部は昭和42年度、南奥羽地区代表としてラグビー部が全国大会に出場した。文化部では読売科学賞に最近、約10年間連続して受賞している。

県立白石工業高等学校設備工業科（全日制）

- (1) } 建築科と同じである。
- (2) }
- (3) 昭和48年に設置してからまだ日も浅いので、これといった特色は出していないが誠実で勤労意欲に溢れた設備工業技術者の育成を目指している。
- (4) 今春、第4回卒業生を送り出したところで、卒業生の合計は160名に過ぎないが、第1回生、第2回生は、それぞれ消防設備士、2級管工事士等の資格を取得している。
- (5) 大企業就職は今回漸くはじまり約5%程度、大部分は中小企業の設備施工関係の会社に就職している。進学は毎年平均して5～10%程度で、地元の私立大学の建築、土木学科、県外では八戸工大、足利工大等である。
- (6) 運動部は昭和42年度、南奥羽地区代表としてラグビー部が全国大会に出場した。文化部では読売科学賞に最近、約10年間連続して受賞している。

県立仙台工業高等学校（全日制）

- (1) 仙台市。市営バスで宮城野小学校・仙台工業高前下車2分。原町若竹自衛隊の南に位置し、本館は鉄筋4階建、校舎は鉄筋3階建。建築・土木・機械・電気の4科があり各学年6クラス。仙塩工業地帯に近い。
- (2) 明治29年仙台市上杉山通尋常小学校内に仙台市徒弟実業学校として発足、大正14年木工科を改称し建築科となる。現在1クラス40名定員。

- (3) 受験競争率は県内上位にあり常に2倍前後で6割の者は市内の子弟である。工業に従事しようとする生徒に対し初級技術者として必要な専門知識と基礎的技能を習得させ、あわせて個性ゆたかな教養を身につけさせる。設計(構造・製図)関係に力を入れる。男女共学。進学希望者多い。
- (4) 創立83年の伝統の中で役職についている者、独立し事務所を営む者多い。有名人なし。
- (5) 県外15%、県内50%、自営5%、進学30%前後で、東北工大・東北学院大、北海道工大・八戸工大・日本工大・日大程度、時には国立校に浪人で入学している。
- (6) クラブ活動は、運動部では卓球・硬式野球が良く、特に卓球は全国大会9回出場を誇る。文化部では演劇部・音楽部が伝統ある公演、コンサートを毎年開いている。地域との結びつきでは仙台建築クラブがある。

県立仙台第二工業高校(定時制)

- (1) 仙台市、仙台駅から市バスで20分、陸前原町駅から南15分、車では御町団地の北側、市の東部4号線バイパスを利用便、東に自動車・鉄鋼・印刷等の工業団地、北に自衛隊、南に仙台御町団地、生徒の職場にも近い、RC造の4階建の本校は、仙台工業高等学校と併地されている。実習教室棟を本年度から再開発中。
- (2) 明治43年仙台工業校に大工徒弟に夜間講習会が開かれた過程より仙台工業補習学校として発足、昭和40年独立仙台第二工業高等学校と改称、建築・土木・機械の三科各1クラス各定員40名を置く。昭和44年、編入制専修コース確立する。
- (3) 仙台経済圏に働く生徒は、宮城県全域から又岩手、青森からも入学希望あり生徒数は314名を数える。建築は168名、建設関係にあるので施工関係に重点とす。
- (4) 学業中に働く企業に定着が目立つ、10年の歴史あるETAに支えられ世に出る企業の長や、独立した事務所を開くもの多い。同窓会に仙二工会ありて総会二回。
- (5) 大企業就職5%、中小企業65%、自営25%、進学5%、年により変動あるも卒業後学費を貯め、昼間大学進学者あり、仙台に夜間工業大なしの理由による。
- (6) 定通研主催の弁論・生活体験発表、定体連の野球・バスケット・バレー・陸上・柔道・剣道等県代表として東京大会に出るもの多い。弁論は全日制共催にも入賞し、クラブ活動盛、為に2つの体育館・校内で10時迄室内灯の下、練習の音絶えない。定時制のつどい参加多数、地域学校間の結びつき大、地域企業の信用大。

県立古川工業高等学校(全日制)

- (1) 宮城県。東北自動車道古川インターより3km。新幹線古川駅より1.5km。宮城県北の農・商業の中心地古川市に位置し、工業高校としては県内最大規模校。
- (2) 昭和9年古川商業専修学校として発足。同19年工業学校建築科に転換今日に至る。
- (3) 県北一円より入学、競争率1.4倍前後。普通高をふくめても、上位を維持し、人気が高い。建設関係者の子弟が半分。建築志向性の明確な生徒が多い。卒業設計に力を注ぎ、創造性を高める教育を目ざしている。
- (4) 著名人はいないが、大企業の部課長も輩出し

始めたほか自営者はOBの20%。県北の設計・施工業界をほぼOBが制圧している。OB会、「古工建友会」は設立9年の歴史をもち、年4回の総会（全国4支部）と年1回ずつの会報・名簿を発行し①母校への援助②OBの連帯を目的とし活発に活躍している。近年中に建友会館の建設をもくろんでいる。

(5) 大企業就職20%、自営と設計事務所10%くら

い。しかし卒業後は年を追って独立するものがふえる傾向にある。大学は敬遠し、実務につくものが多い。

(6) 運動部は盛んで、バレー・卓球・スキーなど、常に全国大会に進出する。学年の枠を外した合同合宿などを実施。材料試験等、地域の業界への指導性を発揮している。建築研究部(クラブ)の古建築模型製作や地域建築調査は定評がある。

福島県

県立会津工業高等学校（全日制）

(1) 福島県会津若松市。磐越西線会津若松駅下車バス10分。鶴ヶ城の北に位置し、45,000㎡の敷地、延面積23,500㎡に、8学科30クラスの全国有数の大規模工業高校。繊維、工芸、窯業の特殊な科を持つ。

(2) 明治37年「福島県立工業学校」として発足。昭和23年4月建築科設置。現在1学年40名1クラス。

(3) かつては地域きってのエリート校であったが、近年レベルダウンが著しい。建築科は校内で1・2位を争うレベルで、郡部出身者が半数以上あり、下宿者が2～3割。意欲あふれる建築技術者の養成を目指している。

(4) 大手建設会社への就職は、最近殆んどなく、中小企業への就職が多い。また近年はとくに地

元指向が強く、県外からのUターンも多い。地元建友会総会年1回。

(5) 関東地区中小企業、地元建設会社が多く、国鉄、公務員、電力会社、設計事務所、自営が各1～2名。進学先は日大・福井大・工学院・東海大・東北工大・金沢工大・足利工大・日本工大などの建築学科。文系へは1～2名。推薦入学が大半。

(6) クラブ活動は、運動系が特に盛んで、体操・バドミントンは全国大会でも上位入賞を果たし県内では常勝。他のクラブも半数は県内5指に入る活躍。3年に一度の「会工祭」は、地域の名物であり、毎回1～2万人の見学者を集めている。

県立郡山北工業高等学校（全日制）

(1) 福島県郡山市。東北本線郡山駅下車バス10分。敷地有効面積93,000㎡。校舎面積現在17,921㎡。完成時には国内有数の工業高校となる。

(2) 昭和19年4月1日郡山商業学校を郡山工業学校として発足。戦後25年建築科設置1クラス定員40名。昭和52年郡山西工業高等学校と合併し、校名を郡山北工業高等学校と改称する。

(3) 中学校でしばって受験するので競争率は1.4倍前後で、工高としては高い方であるが、年々低下している。大部分県中地区の子弟であり、構造・製図に力を入れている。

(4) 大企業就職者が圧倒的に多く有名人はいないが、現在現場主任として活躍。地元残留者は世代交替中である。

- (5) 大企業就職5～10%、中小企業40～50%、設計事務所・自営10%、公務員10%、年により変動あり、最近では長男が多く地元就職が多くなり対策に悩んでいる。進学は20～30%前後で、日

大・東北工大・日本工大など建築関係が多い。

- (6) 部活動は運動部が盛んで、野球・排球・庭球など良い。地域との結びつきなし。

県立勿来工業高等学校（全日制）

- (1) 福島県いわき市。国鉄常磐線植田駅下車20分。茨城県境に近く、南に勿来関跡、東に太平洋をひかえ気候温和、風光明媚な地にある。地元には呉羽化学・十条製紙・常磐共同火力発電所があり、また当地を東西に流れる鮫川には、高柴ダム・四時川ダムを建設し、常磐総合開発事業の一大拠点となし、大発展が期待される理想的要件を具備した産業・観光地域である。
- (2) 昭和36年創立、5科27学級、明年創立20周年を迎える。
- (3) 生徒の入学時の学力は年々低下しているが、本校内では最高である。設計関係に力点を置いているが、実習を通して施工関係への意欲の向上もはかっている。

- (4) 中小企業の中堅として活躍している。又工務店・設計事務所を営むものが増えている。同窓会として建友会があり、年2回総会をもつ。

- (5) 大企業は殆んどなく、中小建設業50%、設計事務所・自営20%、進学は30%前後で、日大工学部・東洋大等の推薦入学、2部として理科大・工学院大等、又その他専門学校で、主に建築関係が多い。

- (6) 運動部の活躍は目ざましく、約10種目にわたって県内で優秀な成績をおさめている。中でもサッカー、ラグビー、空手、野球、軟庭、陸上等は上位にいる。

県立福島工業高等学校（全日制）

- (1) 福島県福島市。国鉄福島駅より飯坂線電車森合駅下車5分。福島盆地の中央にある信夫山（しのぶ山）の西側に位置する。旧信夫農学校の跡地で、まだ明治の校舎が残る5科24学級の中規模校である。
- (2) 昭和23年定時制総合高校として開校・全日制工業科は翌24年建築・機械2科でスタート・1クラス40名定員（男女共学）。
- (3) 当地方では県工と呼ばれ、評判は良く、建築科は建設業関係の子弟が半数以上を占め、レベルは高い方。施工方面に少しウェートを置いている。

- (4) 中小企業が多く、自営（事務所も含む）や公務員も多い。母校同窓会と別に建築出身者の建友会も盛んで、建築士受験講習会などで実績を上げている。

- (5) 県内就職希望が多く、大企業・公務員7～10%、設計事務所、自営20～25%、進学は30～40%、東北工大、日本工大などが多く、浪人して国立大に入る者もある。

- (6) 運動部は盛んであるが、今のところ特に強い部はない。校内駅伝競走やスキー講習会が楽しく行なわれている。

県立福島工業高等学校（定時制）

- (1) 福島県福島市。国鉄福島駅より飯坂線電車森合駅下車5分。福島盆地の中央にある信夫山（しのぶ山）の西側に位置する。旧信夫農学校の跡地で、まだ明治の校舎が残る2科（機械・建築）8学級の小規模校である。
- (2) 昭和23年定時制総合高校として開校。現在建築科1クラス40名定員。
- (3) 当地方では、県工と呼ばれ、大工見習および福島総合職業訓練校の生徒達が毎年20数名入学してくる。科の方針としては、2級建築士に合格できるように、基礎学力の修得につとめている。
- (4) ほとんどが工務店の経営および大工職人となる。
- (5) 工務店に大工見習いとして勤務するかたわら通学しているので卒業後も大工として工務店に残っている。進学者はほとんどいない。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで、今年の8月全国定時制通信制体育大会の卓球、柔道、軟式野球に県代表として参加した。

日本大学東北高等学校（全日制）

- (1) 県を中心。商工都市郡山市。東北本線安積永盛駅下車10分。バス郡山駅前発日大行20分。日大工学部と併設し、豊かな自然と広大な敷地で、設備も充実している。
- (2) 昭和26年工業（建設、機械、電気、工業化学）、普通の2科で発足。37年建設科を廃し、土木科、建築科とする。1クラス40名定員。総合高校を目指し、53年4月校名から工業をとり、日本大学東北高等学校と改称した。
- (3) 学区制に関係ないと、日大各学部への推薦入学を望み、県下一円からはもとより他県からも入学してくる。2年前から入学専願制度を採用したがレベルは低下している。卒業後、すぐに役立つ教育を目標に設計関係を重視している。
- (4) 以前は、大企業就職者もあったが、最近是小企業、自家就業が多くなっている。設計事務所を開いている者も多い。有名人なし。
- (5) 中小企業40～50%、自家就業35～40%、設計事務所7～10%、専門外5～7%。職種は設計、現場員、職人など建築全般に涉り、県内就職者が多い。進学は5～10%で、日大、国士館大、八戸工大、専修学校など。建設関係が大部分である。
- (6) クラブ活動は、教育目標の一環として力を入れているので全般に良いが、特に弓道、体操は国体へ、野球、バレーボール、柔道、陸上などが良い。体育向上のため父兄の支援団体があり、優良選手には学資金の一部贈与を実施している。体育施設は工学部と共にあるので地域大会の開催も行なわれる。

福島高等学校（全日制）

- (1) 本校は福島県の県都。福島市の中央信夫山公園のふもとに位置し、グラウンド並びに、鉄筋コンクリート4階建校舎、鉄骨2階建実習棟、体育館その他付属建物からなっている。49年から53年にかけて全校舎が改築された近代的建物の学校である。

- (2) 昭和17年福島電気工業学校として発足、(電気科のみ) 26年建設科(建築土木併用科)を設置し学校法人電気学園福島工業高等学校と改称する。29年建築・土木科を設置し、建設科を廃止する。54年4月学校法人電気学園福島高等学校に改称する。現在電気6、電子、建築、土木、営業各3学級、普通科9学級、計27学級数である。
- (3) 建築科の教育目標、建築関係における中堅技術者となるための必要な知識、技術を習得させ、また共同して責任ある行動、態度、勤労に対する正しい観点を持つ生徒を育成する。教科については「工業基礎、設計製図、実習」に力を入れ指導している。
- (4) 卒業生数は、建設科時代を含め1400名、苦難の道を歩んだ卒業生が、今は、中堅技術者として、または自営建設会社、設計事務所を開設して活躍している。
- (5) 就職は、大企業5～10%、中小企業70%、設計事務所、自家20%、進学10%、日大、東北工業大学、日本工業大学、東海大学、関東学院大学、足利工業大学、その他専門学校に進学しており、おもに工学部建築科に進む者が多い。
- (6) 部活動。運動部14部、文化部10部で文化部内には各学科の専門をいかすための技術部が設けられて建築関係では、古い建物の探訪、模型製作等の活動を行なっている。

茨 城 県

県立大宮工業高等学校 (全日制)

- (1) 茨城県那珂郡大宮町・国鉄水郡線常陸大宮駅下車。茨城交通バス工高行で13分。静かな田園の中の高台にあり、周りは松林に囲まれ、静かな環境の地にある。鉄筋コンクリート地上3階建、学級数12クラスの小規模校であるが、学科課程に特色がある。建築、土木、設備工業、工業化学の4学科を設置。
- (2) 昭和49年4月創立、新設校として発足、地域の工業の発展に、工業技術者の育成を目的とする。
- (3) 競争率は約2倍弱で工業高校の学科課程の中では比較的質が高い。クラスの三分の一ぐらいは建築関係を職業とする家庭の子弟であり卒業後も自営業が比較的多い。科の特色としては、
- 企業についてすぐ実践的に働ける人間を養成することを目的に、主に現場員の養成を重点に指導をはかっている。実習、製図を軸に、特に木造建築に力を入れている。
- (4) 就職先は、中小企業が80～90%、専門企業が60%ぐらいで40%は他産業に就職をしている現状です。ほとんどが施工会社に就職、1割が設計事務所に就職している。
- (5) 上記のように就職先はほとんど施工会社で、約1割が進学。日本工業大学、日大、中央工学校等の各種専門校に進学を希望している。
- (6) クラブ活動では、本校は特にサッカー、弓道部がよい。

県立土浦工業高等学校 (全日制)

- (1) 茨城県土浦市。常磐線土浦駅よりバス10分。国道125号線沿いで向かいに県南合同庁舎がある。南に霞ヶ浦、北に筑波山を臨む地に在り、また地域に筑波研究学園都市が建設され、都市的開発が急速に進行している。
- (2) 昭和34年創立、43年に建築科設置2クラス80名定員で他に機械、電気、土木科がある。
- (3) 生徒は、県南部全域にわたる広い地域より通

学し、その約半数は農家の子弟で、ほとんど男子で占められている。「実技実学」「自学自習」を校是とし、産業入として社会に貢献できる人材の育成を旨としている。

- (4) 中企業・自営で活躍している者が多い。有名人なし。
- (5) 就職50%、進学35%、自営15%、就職先は大企業5~10%、中小企業80~90%、設計事務所

5%、進学は四年制大学40%、専修学校60%で、主な進学先は電機大・理科大・日本工大・工学院大、専修学校は中央工学校・東京理工専門学校などである。

- (6) 部活動はハンドボール・バスケット・ラグビー・弓道など良く、校内合宿施設として40名収容の「いちよう会館」(アプローチのいちよう並木が美しく、ここから命名)がある。

県立水戸工業高校(全日制)

- (1) 水戸市。千波湖の東南方約2.5kmに位置し、水戸駅より関東鉄道バスで30分、一里塚下車・徒歩約10分。敷地面積87,324㎡。鉄筋コンクリート4階の本館のほか、鉄筋コンクリート3階の実習棟、鉄骨平家の実習棟4棟が主な校舎である。工業化学・機械・電気・金属工業・土木・建築の6学科、生徒数976名。
- (2) 明治42年茨城県立工業学校として水戸市吉田ヶ丘に創設。昭和23年建設科建築分科として発足。昭和37年建築科として独立、1クラス40名定員。
- (3) 工高としてのレベルは高い方で、最近女生徒の数が増し現在80名である。6学科中建築科の

生徒の質は最も高い方である。建築技術関係の各分野における中堅技術者の養成を旨としている。

- (4) 大企業就職よりも県内中小企業が多く、独立した設計事務所を営む者も多い。有名人なし。
- (5) 卒業後の進路は施工会社が最も多く約46%、設計事務所18%、官公庁・民間の営繕部門8%、進学が約25%、進学先は日大・電機大・足利工大・工学院大・日本工業大などで推薦入学が多い。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで、陸上競技部は昨年インターハイで全国優勝をなしとげた。そのほかバケケット・柔剣道・野球など好成績をおさめている。

栃木県

県立真岡工業高等学校(全日制)

- (1) 水戸線下館駅より、真岡線に乗り換え、真岡駅下車。北に2km。又は東北本線宇都宮下車。駅前より、東野交通バスで約20km。真岡工業高校前下車2分。16,000坪の敷地、樹木に囲まれたRC構造4階建の校舎がある。この校舎は、54年9月完成。現在体育館建設中。57年度中に建築、土木棟が完成する予定。
- (2) 昭和38年、県立真岡農業高校に、機械科2学級併設される。41年、分離独立真岡工業高校と

なる。42年土木科、44年に建築科が各1学級設置される。

- (3) 全般的に、純ぼくな生徒が多い。勤労の喜びを体得させ、どこの職場にも適応できる人材の養成につとめている。
- (4) 創立後まだ日が浅く、独立している者、有名人なし。
- (5) 就職90%、大部分の生徒が県内及び東京、神奈川方面の中小企業に、一部の者が、設計事務

所、電電公社、官庁等に就職している。進学10%程度で、日大、日本工業大、足利工業大、工学院大の建築学部に入學している。

(6) クラブ活動は、バドミントン部が、関東大会

に10年間連続して出場、関東高等学校体育連盟より賞を受ける。栃木県建築士会が主催で、卒業学年を対象として、年1回建築懇談会をおこない、職業人としての意識の高揚をはかっている。

県立宇都宮工業高等学校（全日制）

(1) 宇都宮市。国鉄宇都宮駅下車、駅前より関東バス（六道經由鶴田駅行）または東武バス（西川田行）か（総合グランド行）に乗り18分（六道郵便局前）下車徒歩2分。県立宇都宮女子校の南300m。東武宇都宮駅下車徒歩17分。昭和32年より10年間にわたり、木造校舎を鉄筋コンクリート造（本館4階、管理棟3階、2階建、3棟）に改築し、8科36学級で公立高校では全国有数の大規模校。

(2) 大正12年、栃木県立宇都宮高等学校として発足。土木科、建築科、木工科を置く。その後電気科、機械科、電子科、精密機械科、設備工業科を設置し、昭和38年より建築科2クラス定員80名。

(3) 中学校の第1回進路希望調査では、競争率は

2倍を越す時もあるが、最終的には調整されて1.2倍位。工高としてのレベルは高い方であるが、低下の傾向にある。生徒は県内各地より通学している。設計（構造、製図）関係に力を入れる。

(4) 中企業や地元の建設業に就職を希望する者多し。全国的にみると特に有名人なし。

(5) 中小企業就職70%、設計事務所、自営1%。進学率は25～30%で、日大・日本工大・足利工大・関東学院大などで、宇大工学部に推薦で1名入学する。

(6) クラブ活動は運動部が盛んで、バスケット・柔道・陸上・水泳・サッカーなどがよい。JRCは、老人ホーム、その他の福祉施設で奉仕活動を行っている。

県立宇都宮工業高等学校（定時制）

(1) 全日制に併置され、電気科、機械科、建設科の3科、12学級、在籍200名で併置校としては、県下では最大の規模である。

(2) 昭和16年、第二本科建築科を設置、昭和20年、建築科を廃止。昭和37年、定時制建設科設置1クラス定員40名。

(3) 大部分建築業の子弟であるため、基礎的な科目に力を入れている。将来2級建築士の資格を取得出来るようにする。全学年一泊二日の宿泊訓練を行なっている。

(4) 独立した建築業を営む者が多い。有名人なし。

(5) 中小企業20%、自営70%、その他10%、進学は5%前後で、中央工学校に1名入学している。

(6) クラブ活動は運動部が盛んで、柔道（全国大会第1位）野球（全国大会第3位）陸上・剣道・テニスなど全国大会出場。地域との結びつきなし。

(7) 3年生編入制度を特設し、2年間で専門科目のみを履習し卒業資格を与えている。

足利学園高等学校（全日制）

- (1) 栃木県。国鉄足利・東武足利市駅下車5分。足利市中央部を流れる渡良瀬川の河畔にあり、4階建の鉄筋校舎が完成し、50mプール、TVスタジオ等の施設が充実している。
- (2) 大正4年上岡長四郎により足相裁縫女学校を創立。昭和46年建築科設立。定員50名。
- (3) 実習は特にマンツーマンの授業を実施し、常に新しい教育を取り入れ、54年度は地震対策の講座を開設している。
- (4) 大企業就職よりも設計事務所、工務店を営む者が多い。有名人なし。校友会あり。(建睦会と名称、年1回総会を持つ。)
- (5) 自営50%、設計事務所10%、その他40%、進学は5%位で日本工業大学、その他建築関係が多い。
- (6) 部活動は盛んで硬式野球が甲子園2回出場を始め、軟式野球・ソフトボール・体操等が良い。日光運動公園内に、日光セミナーハウスがあり、親睦を深め団体生活習得の目的でクラス単位で一泊研修や部活動の合宿に活用されている。

足利工業大学附属高等学校（全日制）

- (1) 栃木県。国鉄足利駅下車スクールバスで15分。東武線泉駅下車徒歩10分。渡良瀬川の南に面する。鉄筋コンクリート4階教室棟、鉄骨コンクリート2階管理棟、鉄骨平家実習棟など。
- (2) 大正14年足利仏教和合会が足利実践女学校を創立。昭和36年普通科・商業科の男子部設置。昭和37年男子部工業科（機械・電気・建築）設置。昭和40年工業科に自動車科増設。昭和43年男子部が分離独立し足利工業大学附属高等学校となる。足利工業大学は本学園が昭和42年に開学し現在5学科（機械・電気・建築・土木・経営）が設置されている。
- (3) 本校卒業生は足利工業大学へ優先入学できる。科の特色は別がない。
- (4) 有名人なし。
- (5) 就職40%前後、自営30%前後、進学30%前後。進学先は足利工業大学、中央工学校など。(この項の内容は建築科のみ)
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで、レスリング、(インターハイ2年連続優勝)・バレーボール・庭球などが良い。地域社会とのむすびつきは特がない。

群馬県

県立高崎工業高等学校（全日制）

- (1) 群馬県高崎市。高崎駅下車徒歩25分、車で5分。群馬三山を望む市街東部。7科学年10クラス、計30クラスの大規模校。昨年度校舎増改築工事、環境整備事業が終り、各科棟、体育館、図書館、柔剣道場、部室、給食設備、記念館、記念庭園、夜間照明、食堂も完備し、第一、第二グラウンドも整備された環境である。
- (2) 昭和15年、群馬県最初の重工業関係学科を配した近代的工業校として発足。建築科は商業校の廃校に伴い、昭和19年に設置された。1クラス40名定員。
- (3) 校舎は各科毎の各実習室の上階に各科のHR

を配した、効率的な配置。中学校の適切な進路指導で全入に近いが、県西、北部より優秀な生徒が集中する。建築のどの分野に進んでも困らぬよう、バランスの取れたカリキュラムをとる。設計製図に力を入れ、一部構造、設計兩科目の実習を選択させる。

- (4) 大企業に進んだ者は広く県内外に分布し、又事務所、請負業を営む卒業生も多い。特に県西部の業界の中心となって活躍している。

(5) 県外大企業へ就職、最近では県内建設会社へ30～40%、事務所、官庁へ20%内外、進学は35～40%、4年制大、短大、専門学校など。建築関係が殆んどである。

(6) 文化部、運動部とも盛んで、軟式野球、剣道、レスリングが良く、特に体操は県内不動の1位。かつて全国大会5連勝。建築士会、訓練校にも協力している。

県立高崎工業高等学校（定時制）

- (1) 学校所在地。全日制と同じ。
- (2) 昭和18年、第二本科、第三本科として設置され、学制改革で定時制となる。
- (3) 建築技術を身につけた健全な社会人となることを目標に、基礎的な科目に重点を置く。特に製図、実習に力を入れる。昭和36年より夜間照明完備。完全給食実施。
- (4) 地域との結びつき多く、地域の中堅となって

業界の指導的地位にある。

(5) 最近では在学中就職し、実力をつけてそのまま卒業後も各企業で活躍している。二級建築士受験を目標に入学する年長者も多い。

(6) 運動部が盛んである。特に卓球、柔剣道、ボクシング、軟式野球が良い。軟式野球は毎年県代表。

県立桐生工業高等学校（全日制）

- (1) 群馬県。国鉄両毛線、桐生駅下車、徒歩20分。群馬大学工学部正門前にあり、織物の町として栄えた本町通りの北端にあり、まわりは山々に囲まれた緑と水の多い好環境にある。53年度で旧校舎は総て鉄筋コンクリート3～4階建の改築整備がされた。
- (2) 昭和9年色染、機械科の2科で発足し、その後38年に建設科設置（土木、建築）され45年より建築科として独立、1クラス40名定員。現在6科8学級の設置校。
- (3) 受験生の30%は建設関係の子弟で県外は栃木の足利、足尾からも受験しており競争率は平均1.5倍程度だが比較的程度は高いが最近では幾分低下の傾向がみられる。専門教科の中では設計

製図、構造系に力を入れている。

(4) 最近では特に県内の中小企業が多くなっている。設置年度が浅く独立した者は少ない、有名人なし、校友会関係は特に持たないが、先輩が度々来校し、いろいろの面で後輩にアドバイスをしてくれている。

(5) 大企業求人は殆んどなく、中小企業60～70%、設計事務所、自営20%、進学率は10～15%前後で主に私立大学の建築関係と公立の短期大学希望者が多い。

(6) クラブ活動は運動部が盛んで、陸上、バスケット、テニス、卓球等がよく活躍しており、全国大会にもよく出場している。地域社会とのむすびつきは特にはない。

県立長野原高等学校（全日制）

- (1) 群馬県。国鉄吾妻線長野原下車。そこから国鉄バス「役場前」下車。徒歩5分。草津温泉の登り口にあり、車窓より進行左手に見える。現在RC造校舎3棟で、やや小規模ではあるが、西吾妻の要に位置している。
- (2) 昭和27年県立吾妻高校の分校として発足。昭和43年独立発足した。当初普通科だけであったが、昭和44年建築科が併設され、普通科2、建築科1である。
- (3) 建築科については、地元生徒は勿論だが、通学圏は広く、中には2時間近くかけて通学する生徒もあり、学力の差は入学時よりかなり目立つ。発足当時の資格教育に力を入れたが、10年目を迎えた今日、他校に“おいつけ、おいこせ”と各種のコンペなどに参加し、その他各方面に力を入れている。
- (4) 地元中小企業に就職するものが多く、“すなおで、真面目”と評判がよい。
- (5) 大企業5%以内。中小企業70%。自営、設計事務所15%。その他、進学など。となっている。進学は工学院大、足工大、都立大、日大、金沢工大などである。
- (6) クラブ活動はまあまあであるが、特に地域性を反映してか、スキー部などの全国大会での活躍など、目を見張るものがある。地域との結びつきは強い。

県立前橋工業高等学校（全日制）

- (1) 前橋市岩神町。前橋駅より右廻り北部循環バスにて20分、前橋工業高校前下車。赤城・榛名・妙義の上毛三山を望む利根川のほとり、風光明媚の地に建つ。敷地面積約57,000㎡、RC造4階建校舎5棟、体育館、合宿所等を有する。
- (2) 大正12年前橋工業学校として発足。昭和2年木工科が設置され、同6年建築科と改称。全日制、定時制各1級40名定員。学校規模全日制8科30級編成。
- (3) 「高きを仰ぎ最善を尽す」の校訓のもと、業界における中堅の技術者として必要な知識と技術を修得し、その改善進歩をはかる能力を養い、建設業界において活躍する人材を養成する。設計・構造関係を特に重点的に指導している。
- (4) 県内最古の建築科であるため、卒業生全日制1,940名、定時制1,186名の多くを数え、県内一円の官公庁の重要ポストをはじめ、企業の経営スタッフとして活躍している。また設計事務所、建設業を営む者も多い。
- (5) 近年県内企業への就職希望者が多く、地元企業から喜ばれている。進学希望者は30~40%である。県内就職者の大半は地元夜間大学建築科へ進学している。
- (6) 全国工業高校設計競技・工高生デザインコンクール等、対外競技に積極的に参加し、毎年優秀な成績をあげている。また県内5校建築展を毎年開催し、地域社会との関連を深めている。運動も盛んで、特に野球部の活躍はめざましい。

県立前橋工業高等学校（定時制）

- (1) 全日制と同じ（併置校）。
- (2) 昭和15年第二本科建築科設置1クラスで発足、昭和23年学制改革により、定時制課程として40名定員で現在に至っている。
- (3) 定時制課程では、建築科の設置校が県下に2校で比較的競争率は厳しく工業高校としてのレベルは高い方であったが、近年生徒数の減少が目立ってきている。建築設計製図関係に力を入れ、群馬県工業高校建築展（建設設計製図コンクール）他、全国工業高校建築設計製図コンクール等積極的に参加し入賞の栄冠を得ている。
- (4) 家業（建設業）を継ぐ者が大多数をしめている。独立して建設業を営む者、中小企業に就職する者半々位。
- (5) 自営（建設業）80%、中小企業（建設業以外）15%、進学（各種専門学校も含む）5%、総じて建設関係が多い。
- (6) クラブ活動は、運動部が盛んで、陸上、バスケット、ラグビー等で、県下定時制。通信制大会に優勝している。又ETA（事業所、学校、保護者）という組織があり、職場や保護者との交流を図り生徒の教育指導にあたっている。

県立藤岡工業高等学校（全日制）

- (1) 群馬県藤岡市。国鉄八高線群馬藤岡駅下車15分。国鉄高崎線新町駅下車でバス10分。産業道路に面し、西側に保健所、前面に東電、合同庁舎がある。校舎は鉄筋コンクリート造3階建、実習棟は鉄骨造平家建である。
- (2) 昭和38年開校で、建築科は41年に設置。1クラス40名定員。
- (3) 機械、電気、建築の3科の工高で、生徒は都市郡、農村および山村からの出身者でしめ、純朴なものが多い。建築科では設計、実習に力を入れ、技術・知識に併せて人間性の向上をめざしている。
- (4) 歴史が浅いため、卒業者はまだ若く、社会的地位の高いものや有名人は出ていないが、中堅として地道な活躍をし、地域の企業から好評を得ている。
- (5) 県内および近県の建設業に就職する者約50%、自営、設計関係約25%。進学は各種学校を含め約25%で、日大、足利工大、日本工大に毎年、理科大、工学院大、前橋工業短大等に入学している。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んだが、近年やや下降している。重量挙げは常に好成績を残す。1年生に毎年秋榛名山高原学校で、宿泊を伴う団体生活を体験させている。

埼 玉 県

県立春日部工業高等学校（全日制）

- (1) 埼玉県春日部市。東武伊勢崎線北春日部駅下車2分。東は古利根川、南は国道16号線、西は東武伊勢崎線に囲まれ、交通の便がよい。
- (2) 昭和39年創立。建築科は定員80名で1学年2クラス。
- (3) 生徒数の定員が600名と比較的少なく、学習

指導、生徒指導の徹底を期している。大部分の生徒が県東部より通学しており、建築科には建築業関係の子弟が比較的多い。実習では、木造、ブロック造、鉄骨造などの実物製作に力を入れている。

- (4) 創立15年目であり、卒業生はまだ若く、職場では中堅の技術者として第一線で活躍中である。
- (5) 民間企業就職者40～45%、公務員10%、自営10～15%、進学者は専修学校、各種学校を含め

て30～40%で年によって多少変動がある。就職先は県内の建設会社や市役所、町役場などが比較的多い。進学先は、千葉大学、日本工業大学、日本大学、東京理科大学、東洋大学、国士館大学、中央工学校などで、最近では推薦入学が増えている。

- (6) 運動部、文化部ともいろいろな部があり活動は盛んである。時々地域住民のために開放講座が開かれている。

県立大宮工業高等学校（全日制）

- (1) 埼玉県。国鉄東北線東大宮駅または高崎線宮原駅下車徒歩15～20分。国鉄大宮車両基地の隣接地に新校地を求め全面移転。校地面積57,000㎡。管理・HR棟、特別教室棟各4階建。実習棟(機械・電気・建築)H型総合棟5階一部平家建。体育館兼格技室2階建。給食棟ほか。55年4月全日制建築科移転。57年全施設・設備移転完了の予定。完成すれば施設・設備は県下最高となる見込である。
- (2) 大正14年大宮町立工業学校として開校。27年建築科併設。現在機械・電気各3学級、建築2学級計8学級、生徒数960名。建築科は県下唯一の全定併置校である。
- (3) 本校への進学希望は例年2～3倍であるが、中学校で調整され実情は余り厳しくない。県は55年度より推薦入学制度導入の予定。実習・製

図に重点を置き木造小住宅の建築や選択課題による「卒業設計製図」は全教員分担による徹底指導をしている。

- (4) 建築科卒業生1,500余名。公務員、建設会社などで中堅または幹部技術者として活躍中。建設会社・設計事務所経営など幅広く社会に貢献している。
- (5) 大企業就職10%、中小企業40～50%、会社、設計事務所、自営20%前後、近年進学希望の傾向が強く30%内外。日大、工学院大、理大、東洋大等で大部分が理工系(建築)である。また、建築専修学校、各種学校への進学が増加傾向にある。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで野球、柔道、ソフト部など好成績を収めている。文化部では建築部は社寺建築模型を制作、出品受賞している。

県立大宮工業高等学校（定時制）

- (1) 大宮自衛隊キャンプ、東へ300m、昭和57年度より大宮市本郷町1915番地へ校舎移転、敷地面積56,938.45㎡。
- (2) 大正14年5月1日、大宮町立工業学校と称し大宮町大字大宮939番地所在の鉄道省、東京鉄道局大宮工場技工見習教習所を借り受けて授業

を開始する。

昭和23年4月1日大宮工業高等学校と改称。

昭和27年4月1日建築科1クラス40名定員として創設。

- (3) 立地的に言って交通の便もよく工業商業都市の関係上全国から生徒が入学してきたが、最近

状況が変ってきた。大宮市近辺で全日制不合格者が大へんふえてきた。

- (4) 大企業よりも中小企業、戦前の卒業生は独立した会社を営む者もいる。
有名人なし、校友会は大宮工業会というものあり。

(5) 中小企業が主。工学院大学、東海大学、理科大学。

(6) 近時、生徒減少傾向にあるため、クラブ活動はあまり盛んでない。

県立川越工業高等学校（全日制）

- (1) 埼玉県。国鉄、東武東上線共に川越駅下車10分。西部新宿線は本川越駅下車。川越駅前通り繁華街に沿って100メートルの処に丸広百貨店がある。その東寄りの川越街道に面した、学校正門が見える。鉄筋コンクリート造4階建校舎が3棟併列して建つ間を縫うようにして体育館、食堂、格技場が配置されている。
- (2) 明治40年に埼玉県立染織学校として発足。大正5年に埼玉県立工業学校に改称。昭和17年建築科設置、1クラス40名定員。
- (3) 学区域も広く受験者の競争率は例年3倍を越えている。生徒はまじめでおとなしく、工業系の学校に見られがちな《荒っぽさ》が見られない。建築設計製図に力を入れている。

(4) 建築卒業生の会（建友会）があって縦横の繋がりを大切にして、各地区支部を組織し活発な活動をしている。中企業の経営者、設計事務所を営む者が多い。有名人なし。

(5) 就職は県内建設会社、設計事務所、官公庁などが主流を占め約50%、県外建設不動産、設計事務所、官公庁約20%、自営業10%である。大学進学は20%でほとんどが私立大学工学部（建築系）への推薦入学である。

(6) 運動クラブは野球部、柔道部、自転車競技部が県大会の上位を常に占めて盛んである。文化クラブでは吹奏楽部のマーチングバンドが地域社会に奉仕活動している。

県立熊谷工業高等学校（全日制）

- (1) 埼玉県熊谷市。5科838名。男子校、熊谷駅前より秩父バス小島廻り三尻観音山行、熊工前下車、又は秩父線石原駅下車徒歩20分。秩父連山、赤城山など眺望良。
- (2) 大正9年商業学校として発足。昭和19年戦時中工業転換、昭和21年商工となり建築科創立、昭和41年工業分離独立。
- (3) 最近では建築科志望多く5科の中では入試の成績は高い。学校は、スポーツが盛んで新入生歓迎マラソン、駅伝、各種球技等荒川堤をめぐる良環境で体力を鍛え、耐久力は全国水準を抜いている。建築科としては、生産実習を重視、卒

業設計に模型制作も加え建築教育の特に基礎を重視している。

(4) 卒業生の多くは県北の建設業界や設計事務所などで活躍、中型的存在。熊商工高時代の商業科に推理作家の森村誠一氏が学ぶ、建築科の変り種は、ボート、レーサー、司会業もいるが異色は少ない。

(5) 進学希望者が年々多くなっているが推薦入学者が多く、専修学校に進む者が多くなっている。

(6) ラグビー部は全国大会12回出場、建築研究部の伝統も長く20余年に達し、県創意発明工夫展で今年は教育長賞を受く。主に古建築の模型製

作が多く宇治平等院鳳凰堂、金閣、姫路城などあり昨年は石山寺、多宝塔と、良く伝統を守り

一年間たゆみなく活動している。

私立越生高等学校（全日制）

- (1) 埼玉県。東武東上線坂戸駅、国鉄八高線越生駅乗り換え、東武越生線武州唐沢駅下車3分。鉄筋4階建2棟、体育館、食堂付武道館、実習場、また57年度は鉄筋4階建の実習室、造型室、特別教室の完成予定。
- (2) 昭和35年6月越生工業高等学校定時制（建築科、木材工芸科）開校、41年4月越生高等学校全日制として工業科（建築科2クラス・インテリア1クラス）普通科開校、51年建築科3クラス定員120名となる。
- (3) 技術革新、産業立国の精神にたち、また本校創立の精神でもある産学一体の技術者の養成、社会が期待する実践力ある人材の育成を目的とする。設計製図（校内競技設計実施）、施工実習に力を入れている。最近東京都からの通学者が増加している。
- (4) 大企業就職よりも中小企業、地元で施工業者として独立する者が多い。特に有名人なし。
- (5) 建築科においては、自営25%、中小企業40%、大企業10%、進学25%で、そのうち各種学校が60%、他が大学進学である。東洋大、工学院、日工大、金沢工大、中央工学校、東京理工、工学専。
- (6) 運動部は、柔道、バレー、バスケット、山岳の成績が良い。ユニークなクラブでは、躰道部が全国大会で活躍している。

千葉県

県立市川工業高等学校（全日制）

- (1) 千葉県。江戸川を境とし東京都に隣接する市川市の略々中央に位置する。国電本八幡駅下車10分。駅南口より線路ぞいに東京方面に向い国電線路ぞいに設けられた鉄筋コンクリート地上4階建、延面積18,394㎡の校舎を持つ。
- (2) 昭和18年、千葉県市川市立工業学校として設立、昭和23年に私立京成工業学校を合併し、千葉県に移管され千葉県立市川工業高等学校と改称、機械科、電気科、建築科、木材工芸科の4科を持ち工高としては県下最大の規模を持つようになる。
- (3) 中学校からの受験生は毎年各学科とも定員を上回り、平均して素質の良い生徒が入学して来る。千葉県内で公立校で建築科を設置している学校は本校だけ（定員80名）なので、遠く銚子市、館山市など県下のすべての地区から、主として建設業を営む者の子弟の入学が多い。従って教育方針も、建築物の設計・施工・管理・行政など各分野において活躍できる建築技術者である建築士の育成を目標としている。
- (4) 県内の各企業及び隣接する東京都内の設計事務所、建設会社への就職が中心であるが、県内の各市町村の建築課への就職も多い。卒業生に有名人はなし。
- (5) 卒業生の15%程度は進学（殆んど推薦による日大・電気大・日工大他）就職先は大企業10~15%、公団・公社10%、官公庁10%、中小企業50~60%である。
- (6) クラブ活動は学校全体としては活発とは言えないが、建築科の生徒を主な部員とする材料研

究同好会、設計同好会は非常に活発で、一年間の

研究成果を学園祭に発表し毎年好評を得ている。

県立葛南工業高等学校（定時制）

- (1) 千葉県。国鉄総武線、本八幡駅下車7分。総武線市川駅から本八幡駅に向って右側、本八幡側に位置する。車窓から見える。鉄筋コンクリート造4階建。
- (2) 昭和18年4月、市川市立工業学校（夜間甲種工業学校）として開校。機械科設置。昭和23年4月、県立移管。学制改革により。千葉県立市川工業高等学校と改称。（全日制併設）建築科新設。昭和37年4月、電気科新設。これより機械科、電気科、建築科の3科となる。昭和48年4月、千葉県立葛南工業高等学校と改称。定時制独立校となる。市川工業高等学校定時制第1学

- 年の募集停止。葛南工業高等学校第1学年募集。機械科2クラス、電気科1クラス、建築科1クラス、定員160名。全校生徒定員640名。
- (3) 定時制独立校である。設計・構造・製図に力を入れている。
 - (4) 大企業就職より工務店経営、中小企業経営が多い。有名人なし。
 - (5) 大企業5%、中小企業15%、自営業80%、進学2%位、工学院大・関東学院大。
 - (6) クラブ活動では、サッカー、剣道、美術、写真、バスケット等が県大会で入賞する。

千葉工商高等学校（全日制）

- (1) 千葉県。国電総武線、西千葉駅下車15分。国立千葉大学の北側に位置する。50年6月に新校舎落成。54年3月に本館落成。引き続き校内整備を行ない55年1月に中庭完成。
- (2) 大正14年関東中学校として創立。昭和32年千葉工商高等学校に名称変更なる。34年建築科設置1クラス。
- (3) 千葉敬愛学園の内の1校として、敬天愛人を教育理念とする。現在、普通科、商業科、機械科、電気科、建築科の5科を設け、2,000名近い生徒数が在籍する科の受験競争率は3倍前後であり、公立校との併願者が多い。教科では特

- に設計・製図に力を入れている。
- (4) 半分は中小企業であるが、自営業の子弟が多くこの道を進む者が多い。有名人なし。
 - (5) 大企業就職1%、中小企業50%、自営業30%、その他20%、年により変動あり。進学10~20%で、日大、日本工大、工学院大等。
 - (6) クラブ活動は運動部が盛んであり、特に空手部は全日本糸東流選手権大会では、4回の優勝がある。又射撃部も近年力をつけている。文化部では吹奏楽部、美術部、弁論部の活動が目ざましい。

東京都

都立葛西工業高等学校（全日制）

- (1) 東京都。国鉄新小岩駅よりバス20分。一之江三丁目下車徒歩7分。東西線葛西駅下車バス5分。葛西工高前下車徒歩2分。都内でも千葉県との県境である江戸川河口の浦安が近い。
- (2) 昭和38年の新設都立工業高校10校の1校として開校発足し。建築科2、電子科2、機械科4クラス設置。
- (3) 東京下町の典型的な職業工高であり、生徒は気の好い下町っ子で見掛けよりも資質が良い。実習に特色があり、教科内容が多角的に組まれ実施している、造型、材料、測量等の他に計画系の原論、設備、構造等の完備した実習は特筆される。
- (4) 創立16年目なので卒業生少く特色はない。
- (5) 建設業に進む者は約50%、主に自営か中小企業で、設計事務所は1～2名ぐらい、その他、サービス業等に30%、進学（各種学校を含む）20%。
- (6) クラブ活動はハンドボール、サッカー、バレーが良く盛んである。地域との結びつきなし。

都立田無工業高等学校（全日制）

- (1) 東京都下田無市、西武線西武柳沢駅15分又は中央線三鷹駅バス15分女子学院前5分。青梅・五日市両街道に挟まれたちょうど真中、緑濃き閑静な学校地域にある。
- (2) 昭和38年4月、第一次ベビーブーム大增設の申し子として新設10校工高と共に誕生。機械4、建築・建設各2の8クラス計24クラス校で発足、今日に至る。爾來17年、もはや「新設校でない」のだが、普通校以外はピタリ増設が止まっている関係で、工業高校仲間ではいつも新参者である。
- (3) 基礎学力の充実・学習意欲の向上、この永遠の課題に奮闘中。清掃の徹底には全校一丸となって取り組み、安建築の割には校舎はきれいと言判。
- (4) 機械科は各種製造業の現業部門で、建築・建設は建設業の現場管理・設計・監理部門の第一線で活躍中。1回生がようやく34歳に達したところ、未だ有名人なし。
- (5) 学校推薦により就職30～40%（大企業20%、職種は設計関係40%、施工関係40%）、自営25%～30%、進学35%前後（大学55%、専門学校45%）、主として東京工芸大・日本工業大の建築学科。
- (6) 地元田無市にある唯一の都立校であるが、普通校増設に寄せる熱い期待とはうらはらに、工業高なるが故に地元の関心は薄い。建築クラブでは同市図書館とタイアップして民家調査に成果をあげた。又、昭和40年以来日大の工高建築設計競技に応募、よき指導のもと毎年入賞を果たし、今や歳前・前橋・桐生と並ぶ名門校に。

都立小石川工業高等学校（全日制）

- (1) 東京都。国鉄、私鉄新宿駅下車20分。地下鉄新宿御苑前駅下車7分。東京厚生年金会館の裏で東京医科大学通りに位置する。周囲は住宅地で新宿としては比較的閑静な環境にある。校舎は普通教室棟、実験実習棟ともに鉄筋コンクリート造4階建である。
- (2) 大正7年東京市立第四工業補習校として発足。ながく文京区小石川の地にあったが、昭和24年に現在地に移転。建築科設置1クラス40名定員。
- (3) 誠実で正しい判断力と建設的な気力に満ちた、個性豊かで健康な工業技術者を養成することを教育方針としている。入学志願者は2～3倍程度で出身中学は都内全域にわたっている。設計、製図関係に力を入れる。
- (4) 施工会社、設計事務所、官公庁と広い分野にて活躍。最近では建築事務所の経営、および自営に携わる者が多少増加の傾向を示している。建築科同窓会として、桐建会がある。
- (5) 大企業就職5～10%、中小企業70%、設計事務所関係10%、自営10%程度。進学は10%前後で、理科大2部、日大、工学院大、芝浦工大、日工大等の建築関係が多い。
- (6) クラブ数は、文化部系20数部、運動部系10数部あり。軟式野球が成績良好。夏季施設では1年生全員参加、全校球技大会、多摩湖畔ロードレースなど実施。

都立小石川工業高等学校（定時制）

- (1) 東京都。国電新宿駅・地下鉄新宿御苑前下車10分。東京厚生年金会館裏通り、旧陸軍市ヶ谷刑務所跡地である。市谷富久町の高台にあり、南方に新宿御苑を、西方極楽浄土には超高層建築群が眺まれ、東面の校舎裏にはフジテレビ局がある。定時制が徳秋水ゆかりの此の地に移ったのは昭和40年3月31日からである。
- (2) 大正7年5月東京市立第四工業補習学校として、小石川高等小学校に併設、開校。建築科は大正12年10月16日、当時の東京市第四実業学校本科2年、高等専修科6ヵ月として創設。以降、市立小石川工業学校乙種から甲種を経て昭和23年4月、東京都立小石川工業高等学校と改称し再発足した。その時の科名は建設課程で土木専攻を含んでいた。28年2月に建築課程となり現在1学級、定員30名。
- (3) 定時制の他の科、他校と較べ高年齢かつ有職者率も高い。在学中の職業も80%程度が建築であり、入学動機も親か自分が建築関係に従事していることによる。
- (4) 在学中の仕事を続ける者が60%で自営業。他は中小企業、地方公務員で活躍。
- (5) 近年は技術と技能にはほぼ半々。53年3月には進学希望者6名全員が進学した。大学は日大、理科大、工学院大、東海大などの建築科である。
- (6) クラブ活動は野球部が盛ん。建築に関し美術部（パース）も活発である。

都立墨田工業高等学校（全日制）

- (1) 東京都。地下鉄新宿線菊川下車5分。都バス（錦糸町一新橋）墨田工高前、三ツ目通りに面し、深川消防本署（隣）、深川一中と向い合っている。大富橋脇にあ。54年度より改築設計中、現在はR. C 4階建（本館）2棟3階建（R. C）3棟3階建（R. C）4棟4階建（R. C造）、敷地の関係で建物はタコの足のよう複雑である。改築後は多少よくなると思う。
- (2) 明治33年東京府職工学校をして発足、大正9年、東京府立実科工業となる。昭和23年、東京都立墨田工業高等学校と改称する。明治38年建築部を置く、昭和23年建築科定員40名。
- (3) 競争率2～2.5倍ぐらい、大部分は第6学区（江東、墨田、江戸川、葛飾、足立）が多い、下町の子弟多し、以前は大工さんの子弟がかなりいたが、最近では減少してきている。生徒は意匠関係を好む者が多いが、全般的に力を入れている。
- (4) 以前は大企業にかなり就職したが、最近では中堅業者に就職する者が多い。設計事務所へいく者も多かったが最近では少ない。建築卒業生のつながりは強い。設計事務所、設計事務所、施工業者とも独立する者も多し、アーバンライフ、栄建築研究所、その他。
- (5) 進学率は5～10%ぐらい。日本工大、千葉大、東海大、工学院大、その他。就職では大林組、熊谷組、丸石工業などが多かったが、最近では減ってきた。
- (6) クラブ活動は活発である。野球部、バレー部、バスケット部、バドミントン部等バスケット部は全国一にもなったかつては名門である。今はおもかげなし。

都立墨田工業高等学校（定時制）

- (1) 東京都・都営地下鉄新宿線菊川駅下車5分、国鉄錦糸町駅よりバスで築地行きに乗りに菊川2丁目丁車徒歩5分、深川は小名木川に接し材木の町木場のはずれ本所三ツ目通りに面する約1万平方メートルの建物、管理棟は昭和2年に建てられた鉄筋コンクリート造で東京大空襲を経験したものでかなり老朽化して現在改築の話が出ている。
- (2) 明治33年創立の東京府職工学校に明治34年附属工業夜学校として開校、大正9年東京府立実科工業と改称、昭和7年第乙本科（甲種工業学校）を新設、昭和23年新学制実施で定時制夜間課程となり、昭和25年東京都立墨田工業高等学校定時制課程となる。
- (3) 人間として調和のとれた有能な中堅技術者の育成が教育目標となっている、近年生徒数の減少とレベルの低下の中に学力差があり難しい局面に立たされている。木工実習と設計（図面を書くことと読むこと）に重点を置いている。
- (4) 中小企業に多く、独立して建設会社、設計事務所を経営する者が多い、古く明治44年作家の吉川英治氏が短期間ではあるが夜間補習学校に籍を置いていたという記録がある。
- (5) 最近では中小企業と家業を継ぐ者が殆んどで、大学2部、専修学校へ進む者が毎年2～3名いる。
- (6) クラブ活動も生徒数減少と共に低調となり現在は、陸上、バドミントン、柔道など少人数でも活動できる部が活躍、定野連の都事務局を置きながら軟式野球はもう一步というところ学校行事として臨海教室、スキー教室を実施している。地域とのつながりはない。

都立蔵前工業高等学校（全日制）

- (1) 東京都。国鉄浅草橋・地下鉄浅草橋・蔵前駅下車10分。蔵前国技館の前が裏門となる。旧制東京高工俗称（蔵前）（現東工大）の跡地である。隅田川に面し、54年度には鉄筋・鉄骨コンクリート地上8階・地下2階の新築校舎建設中で完成すれば都内最高の校舎となる。（57年完成）
- (2) 大正13年浅草工業専修学校として発足。戦後23年建築科設置1クラス40名定員。
- (3) 中学校でしばって受験するので競争率は2倍前後で、工高としてのレベルは高い方であるが、年々低下している。年により波があり、大部分下町区の子弟である。設計（構造・製図・パース）関係に力を入れる。
- (4) 大企業就職よりも中企業、独立した事務所を営む者多い。有名人なし。校友会盛ん。（建友会と名称、年2回程総会を持つ）
- (5) 大企業就職5～10%、中小企業70%、設計事務所・自営20%、年により変動あり。進学は5～10%前後で、日大・理科大・工学院大・千葉大2部程度、時には国立校に一浪で入学している。主に建築関係が多い。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで、バスケット・陸上・柔道など良い。夏季施設として、館山臨海訓練所あり毎年1年全員参加、地域との結びつきなし。

都立蔵前工業高等学校（定時制）

草創は大正13年東京市立浅草工業専修学校で旧制中卒6ヶ月の夜間の鉄筋コンクリート科であった。場所は今の浅草観音の裏の方にあった。後、高小卒2年の夜間建築科と中卒1年の鉄骨構造科ができ、蔵前の名前のついたのは、昭和10年からで、現在地に移ったのは12年、更に17年に昼間部が設置され、その間建築科は一時廃止された事もあり、昼夜共再開されたのは21年である。その後新制度工高に移行したのは他校と同様である。

定時制生徒及び出身者の歴史はこれを三期に分ける事ができる。第1期は戦後から30年迄で、その頃の生徒は家庭の経済的事情というよりは、むしろ実業を継ぐために昼間は父親が実務を仕込み、夜間は学校で学問を学ぶといった風で親も子も実に真摯なるものであった。当時の卒業生は殆ど一

級建築士となり、工事量年高十数億のオーナー社長も10人を越えている。第2期は30年より49年位の間で平穏な繁栄期ともいべき時期であった志望者も常に定員を越え、在学中より殆ど建築関係に勤め、卒業後は中堅技術者として働いている。第3期は50年以降で志望者は減り職業も建設業よりも収入の多い所を浮動し昨年の志望者は十数名に落ちたが今年は急に定員近く復活した。但し将来は予断できない。

本校の実習設備はかなり高度のものを備え、これを全面的に活用している点では、いささか自負しているが、目下工事中の高層新校舎は校地が狭いため、設計上実習室を上層にとらざるを得ず、建築実習の性格上これをどう運営するか苦慮している次第である。

東京工業大学工学部附属工業高等学校（全日制）

- (1) 東京都。国電田町駅前、同駅芝浦口下車徒歩1分。旧制東京高等工芸学校（現千葉大学工学部）の跡地である。東京港に近く、都心部において、これほどのグラウンドをもつ高校は少ない。目下、教室棟の建て替え・新築を検討中であるが、将来計画とも関連して、慎重に計画が練られている。
- (2) 明治19年、東京商業学校（現一橋大学の前身）附設商工徒弟講習所職工科として発足し、以後様々な経過をたどり、昭和26年より現在唯一の国立工業高校として新発足1クラス40名定員。夜間部に専攻科（短大程度）を持ち、工高建築科卒業生などを受け入れ2ヶ年間教育をしている。
- (3) 工業高校としては、質のよい生徒が入学してくる。学区制がないので、通学者は広域にわたる。視野の広い建築家、建築技術者を目標に教育している。
- (4) 大企業、公務員関係就職が多いが、中規模企業へ就職する者もいる。大企業、官庁で幹部に昇進する者もいる。有名人は、故重宗参議院議長、赤井電機社長など。
- (5) 進学者が多く、80%前後を占めている。東工大、横国大、千葉大、埼玉大、都立大などの国立大学にトップクラスの生徒が進学するが、早大、理科大、日大、工学院大など私学進学が多い。
- (6) クラブ活動は、野球、サッカー、柔道部など運動部関係が盛んであるが、建築研究クラブなども文化祭を中心によく活動している。運動部関係の夏期合宿が近年盛んである。

関東第一高等学校（全日制）

- (1) 東京都。国鉄総武線新小岩駅下車12分。荒川に近く、4階建の円型校舎2棟が特徴である。機械科、電気科、建築科の各科実習館、3階建総合体育館という規模である。
- (2) 大正14年関東商業学校として発足。帝国第一工業学校、関東商工高等学校を経て昭和48年関東第一高等学校と改称。昭和40年建築科設置2クラス100名定員。
- (3) 江戸川、葛飾及び千葉県からの通学者が多い。工務店の息が多いので実践的な実習、製図に力を入れている。
- (4) 中企業就職や自家就職者が多い。52年度「第16回石綿スレート使用住宅設計競技」で1等入選者（涌井豊君）出る。53年建築科同窓会として「まほらば会」発足。日本ハム球団に中山、田村両君ドラフト入団。
- (5) 大企業就職5%、中小企業50%、自営30%。進学は1～2名が大学、10～15%が専門学校。
- (6) クラブ活動は硬式野球部が54年東東京大会準決勝進出。卓球部例年関東大会、インターハイ等の代表となる。吹奏楽部54年度東京大会B組最優秀校に選出。地域との結びつきはロータリークラブの提唱によるインターアクトクラブの活動と、吹奏楽部の地元での演奏等。

工学院大学高等学校（全日制）

- (1) 東京都八王子市。国電または京王線の八王子駅からバスで20分程、工学院大学前で下車。大学と道路を挟んでのツートンカラーの建物である。見はるかすに多摩、丹沢の山なみで、まことに清閑の地に所在している。
- (2) 直接の前身は昭和19年にできた工学院工業学校であるが、そもそもの母胎は、明治20年創設の「工手学校」であり、当時から建築科があった。現在地には、昭和42年に移転してきた。（なお高校建築科は、50年までは建設科と呼称していた）。
- (3) 工学院大学へのつながりは、他の科同様にあるので、進学への傾向が割につよい。各学年1学級の規模であるから、まとまりやすい。
- 設計・製図・測量関係に力を入れる。
- (4) 高校（工業学校時を含む）としての出身者はまだ目立つことが少ないが、工手学校時にさかのぼると、多士済々たるものがある。校友会は全国各地に支部を持つ。
- (5) 大企業就職5%、中小企業55%、設計事務所自営20%、年により変動あり。進学は10~15%、専門学校10%前後で、工学院大・日大・明星大・東京芸芸大等。
- (6) 柔道部は関東大会で優勝もした。自然科学部は読売科学賞一位、放送部はコンテストで一位等の成績を挙げ、また視聴覚教育において文部大臣賞を受けた。

昭和第一工業高等学校（全日制）

- (1) 東京都立川市。中央線立川駅・西武新宿線東大和市駅乗換バス10分昭和工高下車。校地8969㎡に校舎延4745㎡（鉄筋棟3、鉄骨実習棟7、体育施設4）運動場2970㎡がある。武蔵野の面影が残る樹林田園風景に囲まれ環境は良好である。
- (2) 昭和第一学園は昭和4年文京区本郷に昭和第一商業学校、同14年当地に昭和第一工業学校を開設し、戦後学制改革で共に高等学校となり創立40余年の歴史を歩んだ。
- (3) 機械科6・電気科4・建築科3・土木科2・普通科2の学年17学級生徒数2,400名で入学競争率2倍余、都下三多摩を中心に近県にわたる広い通学区域をもっている。開校以来正しく・強く・明るくを校訓に産業界第1線で動く技術者を養成しており、科も建築技術の基礎を総合的に教え建築界の各分野に広く送り出している。なお最近の多様化に順応し77年度に向けコース制（意匠・設計・施工等）を目下検討中である。
- (4) 卒業生の層は、歴史の深さにより極めて厚く中堅企業の経営者、役職、幹部職に多く学校との連けいが強い。また都区内、都下、近県など広い地域で活躍している。
- (5) 進路は就職60%、進学36%、自営4%、製造・配売・建設・営繕が多く各方面の堅実な大企業に大部分、自治体に若干ゆく。進学は大学17%位で専門学校が多い。
- (6) クラブ活動は文化部14、体育部18あり、夏期合宿は山梨県須走、冬期合宿は志賀高原の特約施設で行う。運営は校友会で地域との連携は強い。

東京工業高等学校（全日制）

- (1) 東京都。井の頭線駒場東大前駅下車3分。住宅地に隣接し環境良好である。校舎は鉄筋コンクリート構造地下1階地上3階3棟と木造モルタル1棟その他実験棟をもつ。
- (2) 明治40年東京工科学校として発足。昭和6年、5年制の東京工業学校を設立。当時、甲種工業学校であった。そののち昭和23年に現在の東京工業高等学校となり更に東工学園中学校を併設。昭和42年4月同法人に日本工業大学を開設。現在に至っている。
- (3) 経営は学校法人東工学園であり中学・高校・大学と一貫した教育システムを持ち実験実習・製図を中心とした教科の展開をはかり誠実・明朗・勤勉を校訓としている。
- (4) 70余年の歴史をもつ本校では卒業生も多く大企業から中小企業また自営などと幅広く産業界に活躍している。また毎年同窓生の総会を開くなど卒業生同志の交流も盛んである。有名人として落語家の柳家小三太さんなどが活躍している。
- (5) 日本工業大学に推薦で進学できる。その他に日大、東洋大、東海大、工学院大、埼玉工大、相模工大などに進学している。また各種学校に進む生徒も少なくない。就職率も良く生徒1人に対し3～5社の募集がある。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで、レスリング・スキー・自転車などが良い。校外施設とし赤倉山荘と富戸浜寮をもち毎年1学年全員参加で団体訓練を行っている。町内の祭りなどにも協力し校庭なども解放するなど地域との結びつきもある。

安田学園高等学校（全日制）

- (1) 東京都。国電総武線兩國駅下車徒歩5分。東京都慰霊堂、安田庭園、同愛記念病院に隣接している。商業、情報処理、建築、電気、機械、情報技術、普通の各科と工業専修学校、中学校を併設し、生徒数は2000名をはるかに超える。
- (2) 大正12年3月、銀行王とうたわれた安田善次郎翁の遺志により設立され、現在も旧安田財閥系の銀行・会社の会長・社長で構成される「学校法人安田商工教育会」によって運営されている。
- (3) 設立の趣旨が、実業界に有用な中堅人物を育成するという事であるので実務的にすぐれた人材の育成を目指している。「誠実・明朗・奉仕」を校訓と定め、誠実な人格をつくりあげ社会に奉仕できる人間育成を教育の重点目標としている。
- (4) 卒業生は、大企業で重要な地位についている者も多いが、建学の趣旨から言って自ら事業を興して活躍している者の方が中心である。
- (5) 建築科の場合、建築関連業自営者の子弟が圧倒的に多く（親子二代続けて安田学園卒業生という者も珍しくない）卒業後、就職する者は30%以下と少ない。
- (6) クラブとしては、バスケット、バレー、相撲などが全国的な水準にあり、野球、柔道などがこれに続く。千葉県竹岡に臨海寮及びキャンプ地、千葉県鎌ヶ谷に総合グラウンド、越後湯沢にセミナーハウスをもつ。私学の特色として、卒業生を通して地域との結びつきは強い。

神奈川県

県立神奈川工業高等学校（全日制）

- (1) 神奈川県横浜市。東横線東白楽駅下車3分。国鉄線東神奈川駅下車10分。京浜急行線仲木戸駅下車15分。設置科は機械・建築・電気・電子・産業デザイン科。
- (2) 明治44年神奈川県立工業学校として発足。機械科・建築科からスタートした。昭和43年に建築科2学級編成（80名定員）となり現在に至る。
- (3) 年度によって受験者が多い場合と少ない場合がある。レベルは年々低下している。横浜市内が大部分で、川崎市・横須賀市など各市町から通学している。設計製図を中心に力を入れている。
- (4) 大企業・中企業・小企業・事務所・倉庫等広範囲にわたっている。有名人なし。外国の事務

所で働いている者もいる。

- (5) 大企業就職5%、中小企業就職70%、設計事務所・自営25%くらいである。その年度によってかなりの変動がある。進学は20%で、日大生産工学部・東京電機大・関東学院大・東海大・日本工業大・東京工芸大・国士館大などである。90%が建築学科である。各種専門学校は年度によって1～2名程度いる。
- (6) クラブ活動は運動系が野球・バレーボール・陸上・体操などが伸びていて建築科の生徒も多い。文化系は郷土研究・軽音楽などが多い。地域との結びつきは、体育祭や文化祭を通じて多少ある。

県立神奈川工業高等学校（定時制）

- (1) 神奈川県横浜市。国鉄東神奈川駅下車10分・東急東横線東白楽駅下車3分。交通の便がよいので、会議等の会場に利用されることが多い。敷地1万坪余、本館R・C4階、校舎R・C3階、実習棟その他。
- (2) 大正5年(1916)神奈川県立工業学校附属工業補修学校として開校、県立として最初の定時制課程の前身である夜間課程建築科の発足である。昭和23年(1948)新制工業高校定時制課程に移行。
- (3) 志願者数は年々減少の傾向にあり、やる気が

あれば年令に関係なく受け入れている。生徒は大部分県内出身者で、工務店の子弟が多い。二級建築士合格程度を目標にして教育している。

- (4) 中小企業に就職あるいは設計事務所、工務店経営等、京浜工業地区一帯で活躍している。
- (5) 就職は、在学中にほとんど決まり、卒業時に変わる者は少ない。進学者は10%前後で主に2部の建築関係である。
- (6) クラブ活動は、2、3のクラブを除き低調である。

横浜市立鶴見工業高等学校（全日制）

- (1) 横浜市。国鉄鶴見線で、鶴見より二つ目鶴見小野下車、徒歩2分。鶴見川を越えて、工場地域に入った位置にある。
- (2) 昭和11年、乙種工業学校として発足。昭和24

年、建設科が設置され、同38年4月より、建築科・土木科に分科され、現在に至る。

- (3) 粘り強い根性を持つ社会人を育成するよう、「頑張りの精神」なるものを強調している。授

業面では就職先の関係から、施工関係に重点がおかれてきた。

- (4) 中小の施工会社に就職する者が大半を占め、中堅技術者として活躍しているが、過去においては、行政関係に進む者も可成りいた。
- (5) 中小施工会社へ39%、自営業に5%、設計事務所6%、その他11%、進学希望者39%（53年

度）進学先は、日大、工学院大、東海大、日本工大、東京工芸大、国士館大、神奈川大、関東学院大等。

- (6) クラブ活動は野球部、サッカー部、柔道部、剣道部、バレー部、バスケット部等の運動部が活発である。

-
- (1) 横浜市鶴見区下野谷町、国電鶴見駅で鶴見線に乗替え、鶴見川の鉄橋を渡り、鶴見小野駅で下車すればすぐ目の前。京浜工業地帯の鶴見工場群地域のほぼ中心にある。現在の校舎は鉄筋コンクリート造4階建である。
 - (2) 昭和13年鶴見工業専修学校第2本科として発足。昭和21年建設科設置。昭和23年市立鶴見工業高等学校定時制となる。昭和38年に建設科を建築科と土木科に分離し今日に至る。
 - (3) 就職しながら通学する生徒が多い。過去においては、地方出身者が大半をしめていたが最近

横浜市立鶴見工業高等学校（定時制）

- は地元中学校出身者がふえつつある。大部分下町地区の子弟である。実習に力を入れている。
- (4) 大企業就職より中小企業就職が多い。独立して事務所、工務店を営むものもある。有名人なし。同窓会活動盛ん。
 - (5) 在学中から就職しているものが多数。中小企業の工務店関係、事務所関係が多い。進学は、理科大、工学院大等の2部程度。
 - (6) クラブ活動は運動部が盛んで、バレー、柔道、卓球、剣道、が活発である。

-
- (1) 神奈川県川崎市多摩区。国鉄南武線・久地駅下車徒歩約10分。多摩川に面し、梨畑と住宅地に囲まれた静かな環境にある。
 - (2) 昭和36年10月1日。県立川崎工業高等学校建築科が母体となり、川工内に創立されその後現在地に移る。初代校長は、元東日本建築教育研究会理事長・富塚信司先生であった。1クラス定員40名。定時制は、昭和38年4月に設置1クラス定員40名。
 - (3) 健康・誠実・情操・創造・勤労を目標にかかげ工業技術者を養成している。実習を中心とした

県立向の岡工業高等学校（全日制）

- 内容に重点を置き、設計・施工・管理等の業務に従事出来るよう教育をしている。
- (4) 最近では、県内・都内の中小建設業に就職する傾向が強い。
 - (5) 総合建設業70～75%、設計関係(自営も含む)15%、進学10%。関東学院大・東海大・日本工業大・東京工芸大。殆んどが建築関係に進む。
 - (6) 川崎地区においては、クラブ活動が盛んなことで知られている。相撲・野球・ラグビー・サッカー等。中でも相撲部は、全国大会に出場し相当な好成績を収めている。

県立向の岡工業高等学校（定時制）

- (1) 神奈川県川崎市。国電南武線久地駅下車10分。川崎といっても北のはずれに近く多摩丘陵の下、多摩川に面して建っている。
- (2) 昭和39年度全日制に一年遅れで第1回入学生を迎えた、比較的新しい学校である。一クラス40名定員夜間定時制。
- (3) 生徒は川崎市内に就職した地方出身者が多かったが、近年変化している。一番多い職種は大工で、続いて建築関係の職人、設計事務所など。中には一般会社、公務員などもある。昭和49年入学者頃から、地元の生徒が多くなり、53年、54年入学者はほぼ100%地元出身で、職についてない生徒も多くなった。定時制入学者が激減する中で、もともと建築科は10名前後の小さなクラスで、4名の教員（教諭3人、実習助手1人）で、全員に目が届き、個人指導的になっている。科としては、実習よりも製図や設計・構造などに力を入れている。個性を重要視し、個性を伸すべく指導に当たっている。
- (4) 卒業生は、比較的若いため、社会的地位を云々するほどになっていない。在学中の職をそのまま伸す者が多いが、中には独立して一級建築士事務所や工務店をやっているものがある。有名人なし。二級建築士合格率高い、同窓会もある。
- (5) 卒業時、転職を希望する者毎年0～2名、進学希望者1～2名。東海大2部が多い。残りは在学中に転職してしまったり継続が多い。
- (6) 学校行事、クラブが活発で中心になるのが建築が多い。生徒数が減る中で、51年より学校でPRパンフレットを作成して、地元の工務店に流したり、父母会を開いたりしている。

県立小田原城北工業高等学校（全日制）

- (1) 小田急線柿山駅下車、徒歩7分。駅のホームからの東の眺望に、酒匂川の堤の松並木に沿って建つ本校の校舎をみることができる。北は丹沢山塊、西に箱根連山霊峰富士が見え、空気の澄んだよい環境にある。当地、枯山は、二宮尊徳先生の生誕地であり、先生の生家と記念館がある。近くには、箱根をはじめ、小田原城、大雄山最乗寺、坂東五番の札所である飯泉観音などがある。
- (2) 昭和36年10月創立、現在、全日制機械科4学級、電子科2学級、建築科、電気科、デザイン科、設備工業科各1学級、定時制は、機械、電気の各2学級の規模である。
- (3) 本校では、教育目標を、基礎学力の充実、生活指導の徹底、教育環境の整備を施策とし、建築科では、建築分野のいずれの方向にも向くような者の養成につとめる。
- (4) 創立当初から、数年前までは、大企業への就職者もかなりいたが、最近では、県内中小企業へ就職する者が主である。また自立経済者も若干名は活躍している。
- (5) 大企業5～10%、事務所5～10%、中小企業70%、公団、設計事務所、自営が、それぞれ数%、進学は4年制10%位で、日本工大、東京工芸大、工学院大などに入学している。学校全体では、今までに、数名が国立大や早大に浪人して入っている。
- (6) 本校の競技の強い種目は、バレーボールやバスケットボールなどがあげられる。

県立藤沢工業高等学校（全日制）

- (1) 神奈川県藤沢市。小田急江ノ島線にて、国鉄藤沢より10分、東京・新宿より1時間余りの湘南台駅下車15分。横浜市と接する境川の、河岸段丘地に建つRC造一部5階建、延2万㎡の校舎が、4万㎡の校地に建てられている。
- (2) 県下10番目の県立工高として、工高増設期から10年、昭和48年1月に設置。
- (3) 開校時より、2・3学年にて大幅な類型選択制（14単位）を採用、工業教科が49単位の類型Ⅰ、35単位の類型Ⅲとその中間の類型Ⅱの3類型に分かれる。設置学科は、機械・土木・設備工業との4学科、各2学級で、建築・設備工業2学科に女子生徒が、約8.3%在籍している。なお、53年度より、独自の工業基礎6単位を実施し、新学習指導要領に基く内容に再検討の予定である。
- (4) 第一回卒業生が、大学4年生在学中で、就職した卒業生もやっと慣れた状態。
- (5) 就職は、県内中小企業が主で一部東京方面の企業に、約三分の一の生徒をお願いし、その定着率は現在のところ96%である。進学は、関東学院大・東京工芸大・日本大・東海大等で、約三分の一であり、残りの三分の一が、自営・浪人・各種学校等となり、約三分の一づつになる状態である。
- (6) 文化・体育の各クラブは、通常のクラブが設置され、平均的な活動状況である。

川崎市立工業高等学校（全日制）

- (1) 川崎市。国鉄または京浜急行、川崎駅下車。市営バス(23、4、7、8)か東急バス(31)で、御幸公園前下車約5分歩いて、多摩川沿いの京浜第2国道、多摩川大橋の脇に建っている。4階建、レーダーの塔が2本屋上に目立ち、RC造、1部SRC造になっているが、グラウンドは狭くむしろないといった方が良い位の大きさである。
- (2) 戦前に存在していたが、焼失、廃校となり、昭和38年に新たに設立開校となった。建築は1、2回は2クラス定員80名編成で、3回以後は1クラス定員40名に切換えられ現在に至っている。
- (3) 中学校よりの受験倍率は年度によって異なるが平均(ここ数年)1.2~1.5倍ぐらい。大部分は南部(川崎市の中心地)方面からの子弟が中心で、建築の科目では特に重点を置いた形はとっていないが現場、設計のどちらにも向くように指導している。トンボ鉛筆主催の製図コンクールは毎年入賞して居り男子校(結果的に)なので生徒指導は厳しい。
- (4) 大企業に就職している数は少く、中小企業が主で中堅として活躍している。まだ卒業生の数も少なく、有名人はいない。
- (5) 進路については、年度により違いがあるが、約60%前後建築関係、家業10%前後(建設)建築外10%前後、進学20%前後であり大学は関東学院大、日本工業大。
- (6) 部活動はスポーツ関係が主で、空手道部が活躍して居り地域との結びつきはない。

横須賀市立工業高等学校（全日制）

- (1) 神奈川県横須賀市久里浜6-8-1。国鉄横須賀線久里浜・京浜急行電鉄京浜久里浜駅下車10分。ペルリ上陸記念碑のある裏手、旧海軍工作学校跡地で、鉄筋コンクリート構造4階建校舎2棟と鉄骨構造平家建の建築科実習棟、土木科実習棟に一部2階建の機械科実習棟、鉄筋コンクリート構造2階建の工業化学科実習棟、体育館、格技室、給食室、プール。
- (2) 明治35年豊島村立豊島実業補習学校として発足。大正8年校名を横須賀実業補習学校と改める。昭和8年校名を横須賀市立実業専修学校と改め、昭和11年校名を横須賀市立実業学校と改め、商業科・家政科・金工科・木工科を置く、昭和14年校名を横須賀市立工業学校と改め、機械科及び建築科とする。昭和23年新学校制度により校名を横須賀市立工業高等学校と改め、建築科1クラス定員40名。
- (3) 教育基本法・学校教育法に従い、中堅技術者として専門的な知識技能を修得し、心身ともに健全で、円満な人格の完成につとめ、特に他との協調の精神をもつ人間味豊かな工業人を育成する。建築科では特に製図、施工実習に力をいれている。
- (4) 中小企業に就職するものが多く、独立した事務所を営む者も多い。コイルバネの開発研究並びに解析の権威者、工学博士 加藤道生氏。
- (5) 大企業就職5%位。中小企業70%、設計事務所、自営5%、進学20%前後で関東学院大、日本工大、国士館大程度。主に建築関係が多い。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで、陸上、体操、山岳部などがよい。地域との結びつきはない。

横浜市立横浜工業高等学校（定時制）

- (1) 神奈川県。国鉄関内駅下車7分。地下鉄伊勢佐木長者町駅下車4分。文化体育館裏となる。昭和46年度には近代的な7階建ての校舎となる。
- (2) 大正11年4月に横浜高工（現横浜国大）設立と同時に、その校内に横浜市立大岡工業補習学校として設置されて以来50余年の輝かしい歴史と伝統をもつ名誉ある学校です。
- (3) 「名教自然」の校是のもと自覚、自由啓発の精神をもって、社会に有用な人材を育成する。設計（構造、製図）関係に力を入れている。
- (4) 卒業生総数は8,000余人で、建築関係では独立した工務店を営む者多い。
- (5) 多くの卒業生は同じ所に引続いて勤務していますが、卒業を機会にこれを生かした職場につく者もいます。なお毎年約一割の生徒は大学等へ進学し中には昼間の4年制大学へ行く卒業生もいます。
- (6) 希望者が部に加入して活動しています。放課後の午後10時まで、約1時間しか出来ません。現在はバレーボール、剣道、卓球、野球、アマチュア無線、サッカー等があり、野球部は定時制高校の中で県下では上位の実力を誇っています。

静岡県

県立島田工業高等学校（全日制）

- (1) 静岡県島田市。国鉄東海道線島田駅下車、バス10分。昭和38年～40年間に1棟～5棟、プール、体育館、格技場までのほぼ現状が竣工した学校であり、屋上よりは、有名な大井川を遠望できる位置にある。
- (2) 昭和38年4月1日、静岡県立島田工業高等学校として、機械科3クラス、電気科3クラス、建設科2クラス、(建築コース1クラス、土木コース1クラス)の規模で出発し、現在は、建築科、土木科として独立している。
- (3) 学校の教育方針としては、明朗、健康で教養豊かな技術者、礼儀正しく協調性のある態度、自主的で努力を惜しまぬ人物の養成に重点をおいている。建築科としては学校の教育方針を前提として、建築業界のいづれの方向にもむく建築技術者の育成に目標をおいている。
- (4) 第1回の卒業生の年齢が現在32歳くらいで、各会社では中堅どころとして活躍し、なかには独立し建設会社や、建築設計事務所を経営する者も出はじめている。
- (5) 就職状況は、大企業7～10%、中小企業70%、設計事務所、自営、その他20%で年により多少の変動あり。進学状況は4年制大学15%、短大、専修学校、その他15%で、名城大、法政大、日本大、工学院大、神奈川大、理科大などで、主として建築関係へ進学している。
- (6) 野球部、レスリング、体操、バスケットなどの運動部の活動が盛んである。

県立静岡工業高等学校（全日制）

- (1) 静岡市。駿府城址の東、谷津山の麓に、健児1,200が、たくみの業を究めんとはげむ。草創の田園風景は消滅し、いまや市街地区の大規模校として校地の狭隘に悩む。その一角に、滝沢真弓先生書、「泉之碑」(ニイチェ語録)を建つ。
- (2) 大正7年創設。校地造成には、第一次大戦捕虜のドイツ兵士が協力。当時、市内に収容所があり、市民とも交歓。昭和14年建築科設置。
- (3) 全県1学区。静岡市と、その周辺の郡部・市部または遠隔地からも通学。建築科は普通教養はもとより、設計・施工両面ともに重視する方向で力をいれている。(己れの立てるところを深く掘れ。そこには必ず泉あらむ。)……「泉之碑」。
- (4) 卒業生は、東大村松貞次郎教授ほか大学関係の研究者、大企業の幹部層、中小の企業家、経営層をはじめ、ベテラン、気鋭が各方面で活躍。全国的に同窓会活動が盛ん。地域のほか企業内部にも支部を組織している。建築系は建友会と呼称する。
- (5) 建築系大企業は近年寥々、殆んどが中小建設業へ就職。進学は10～20%で、おもなところは、日大、日本工大、関東学院大、工学院大、名城大、多摩美大など。
- (6) 部活動は、サッカー・弓道・卓球・吹奏楽・器楽・郷土研究などが盛ん。

県立静岡工業高等学校（定時制）

- (1) 全日制と同じ。
- (2) 昭和23年4月静岡県立静岡工業高等学校に併設され、建築科の定員は20名で発足し、昭和46年4月専修科を別に20名加えて現在では40名となった。
- (3) 本校も御多分にもれず当初の意欲的な学生気質は減少し、全日制に進学できない能力の生徒が7割方になったが未だ3割程度の生徒には十分な意欲が見られるのが何よりの救いである。しかし中学生の90%以上が高校進学をする昨今の社会状況を考えると、別な意味で有職少年の相談相手となり、人生について考えさせる場と

しての定時制高校の在り方に意義を感じ、素直に育つ生徒の姿を見るのを楽しみにしている。又、普通高校を卒業して建築関係に就職した人々を対象に専門教科のみを学習させる専修科を設置しておりますが意欲充分でそれなりの成果をあげつつあり、建築大学のない静岡市にとっては大切な教育機関となっている。

- (4)(5) 卒業生は在学中に勤めていた中小企業の幹部や中堅として働いている者が多い。
- (6) クラブ活動はソフト・ボクシング・柔道等が得意である。

県立修善寺工業高等学校（全日制）

- (1) 静岡県。東海道新幹線三島駅下車・伊豆箱根鉄道のりかえ・終点の修善寺にて下車(30分)。徒歩12分。名湯修善寺温泉に近く、鮎つりのメッカ狩野川と富士を望む小高い丘の中腹にある。RC造4階建。
- (2) 昭和10年村立中堅農民学校として発足。戦後県立の農業高校、普通高校と変遷し、36年に工業高校に改称。43年建築科設置1クラス定員40名。全校21クラス、840名。他に電気、機械。
- (3) 通学範囲が広く、比較的建築関係の子弟が多い。中学段階の受験指導の徹底から競争率1.1倍程度。工高としてのレベルは中位であるが、最近の学力低下の傾向は否めない。基礎をしつ

かり身につけさせることを目標に、構造・設計関係に力を入れる。

- (4) 設立の頃の大企業・県外志向から地元の中堅企業への変化がみられる。歴史の浅いこともあり自営者は少いが、地域関連企業からの評価・期待は高い。
- (5) 就職は、大企業5%、中小企業60~70%、設計事務所・自営10~15%、進学は15~20%。年による変動あり。進学は推せんが主で、関東学院・日大・日本工大・名城大・中部工大・一部専門学校あり。建築系が大部分である。
- (6) クラブ活動は盛んで、特にレスリング、野球はよく知られている。

県立天竜林業高等学校（全日制）

- (1) 静岡県天竜市。国鉄東海道線掛川・継由天俣線遠江二俣下車、徒歩15分。旧陸軍中野学校二俣分校の跡地である。前面に天竜川を配し周囲

を天竜の美林が寄る閑静な盆地にある。生徒数600名余。職員50名。

- (2) 大正13年二俣実業補習学校として開校、以来

林業に関する技術者を多く育成し、昭和50年工業・建築科設置、本年で5年目併設校。

- (3) 近隣に大きな都市が控え教育熱風の子波を少々覆るが、わが道を行く。中学からの応募・入学人数は毎年バランスが保たれている。専門を始め地場産業へも広く貢献させる。山間部よりの通学生30%温順な性格。
- (4) 52年度より2期生80名弱。

- (5) 地元の製材の分野を含み中小企業へ80%、公務員1～2名、設計事務所、家業従事が20%。進学は15%程度、福井工大、金沢工大、日本工大、日本大等いずれも建築専攻。
- (6) 全校耐寒競歩、市一周46kmに挑む(地勢の80%が山間部)。1・2年生夏季に演習林へ1泊2日の体験学習。野球、陸上、庭球少数精鋭で活発、対外試合の成績も良好。

県立沼津工業高等学校(全日制)

- (1) 沼津市。東海道本線沼津駅下車、東海バス沼工前下車。香貫山麓南側に位した、閑静な環境です。鉄筋コンクリート4階建の校舎で、目下用地の拡充を進め、体育館改築の計画、念願のプール建設は着工の運びとなりました。
- (2) 昭和14年沼津工業学校として発足。戦後26年建築科設置1クラス40名定員。
- (3) 受験競争率は1.2倍前後で、戦前設立の県下3校の1校、工高としてのレベルは高い方であるが、年々低下している。大部分周辺の子弟で、下宿生も若干いる。設計(構造、製図、パース)

関係に力を入れる。校訓は不撓。

- (4) 公務員、大企業就職より中小企業、独立した事務所、工務店を営む者多し。有名人なし。
- (5) 公務員、大企業就職者5～10%、中小企業60%、設計事務所、自営10%、年により変動あり。進学は20%前後で、日大、理科大、工学院大、関西、中部地区が多く、専門学校への進学は増加の傾向にあります。
- (6) クラブ活動運動部が盛んで、漕艇、滑空など良い。地域との結びつきなし。

県立沼津工業高校(定時制)

- (1) 全日制と同じ。
- (2) 昭和23年、新学制の施行で、沼津工業学校が、工業高等学校になった際、定時制課程が誕生。当時は、電気科、機械科、工業化学科の3科3クラスの規模。昭和29年4月には、工業化学科と入れかわって建築科が設けられ、現在に至っている。
- (3) 現在、定員40名の学級に、どの学年も十数名の生徒しかいない。そのほかに、専科生が7～8名在学している。生徒の職業は、一般の生徒の場合大工等現場作業員がほとんどで、設計や構造計算に関係する仕事を行っている生徒は、

ごくわずかである。30歳をこえて、現場で中核的な働きをしている生徒も少数いる。また、専科生の中には、大学卒業生もいる。生徒の多様な要求を満すのに苦労している。

- (4) 在校中の仕事をそのまま続ける生徒がほとんど。有名人なし。年配の卒業生の中には、地方の公務店など、手広くやっている者もある。
- (5) 小企業がほとんど。大学、短大進学は、毎年1人あるかないか程度。
- (6) 夜間定時制であるため、クラブ活動の時間が制約される。特になし。

県立浜松工業高等学校（全日制）

- (1) 浜松市。国鉄浜松駅下車、遠鉄・市営バス「浜工前」まで約30分。伝統と栄光に輝く旧校地「浜松駅南」から、三方原合戦の繰り広げられた古戦場跡へ全面移転改築(昭和39年)。北に赤石連山、東に霊峰富士を遠望し、遠州灘、浜名湖と景観と緑に囲まれた素晴らしい環境に位置する。校地8万㎡。校舎延面積2.3万㎡。
- (2) 大正7年、本県工業教育の草分けとして創立。大正13年修業年限2ヶ年の建築科設置。同15年修業年限3ヶ年とする。昭和5年修業年限5ヶ年に延長。同23年学制改革により、1クラス40名、全日制は8学科(工業化学・繊維工学・工業デザイン・建築・土木・機械・電気・情報技術)で学級数は30学級である。
- (3) 各中学校での調整が行き届き、競争率は2倍弱である。校訓「質実・勤勉」。技術革新の著しい時代に適応し、社会の進歩・技術の発展に貢献できる技術者を育成する。専門的な知識や技術を修得するために設計・施工に重点を置いている。
- (4) 卒業生総数約16,000名で、県内をはじめ全国にまたがり、各地で活躍している。各企業においてすぐれた能力を十分に発揮して絶大な信用を勝ち得ている。
- (5) 在校生の進路は就職85%、進学15%が、ここ数年来の定着した動向のようである。就職は大企業が減少し、県内通勤可能な職場を求める傾向が増加した。進学は推薦入学を利用し、さらに専門技術の増進をはかる。
- (6) 楽器をはじめオートバイなど工業の町であり、建設業も県内では一番栄えている。又、クラブ活動も運動・文化共に非常に活発で、全国大会を目ざしている。

県立浜松工業高等学校（定時制）

- (1) 全日制と同じ。
- (2) 全日制と同じ。昭和23年定時制課程を設置。昭和40年定時制建設科設置(定員40名)。昭和46年建設科を建築科に科名変更。同年定時制専修コース建築科設置(高卒後入学2年修業、定員20名)。
- (3) 市内中学校で調整するので大体定員一杯受験、入学。現在約450名の生徒が学ぶ県下最大の定時制工業高校。しかし生徒の学力は年々低下している。建築科の生徒は殆んど昼間建設関係の仕事に従事しているが、近年昼間職業訓練校へ、夜間本校通学者が増加。建築技術者としての職業観を身につけ建築の基礎知識の学習。大工が比較的多いので「建築技能士クラブ」で建築大工2級技能士受験準備活動実施。毎年在学中に数名の合格者あり。
- (4) 中小建設関係業に勤務又は自営。有名人なし。「浜工高同窓会定時制部会」に所属、年1回総会。
- (5) 在学中の職場に継続勤務するもの多し。進学者は例年5%前後である。
- (6) 運動クラブ活動が盛んで、各種目とも県大会で上位入賞し全国大会へ進出している。合宿施設として、生活館などが校内に設置されており夏季休業等を利用して合宿練習をしている。

日本大学三島高等学校（全日制）

- (1) 静岡県三島市。国鉄三島駅下車15分。三島の文教地区の中心にあり。日本大学の付属高校として、普通科と併設されている。
- (2) 昭和36年に工業科(土木・建築・機械・電気)が発足し、各科50名の定員で、地域の要望に答えてきたが、昭和55年度から募集停止となる予定である。
- (3) 日本大学の目的および使命より“自由と規律”を校訓とし、専門教科の教育に励んで来たが、近年大学進学希望者が激増の一途をたどり、普通科への変更を余儀なくされている。
- (4) 静岡県東部地区の中小企業に就職(大学卒業後)する者。建築業を営む者が多く、同窓会活動が盛んである。
- (5) 卒業生の10%前後が就職で、他は殆ど進学、(大学4年制、短大、各種学校)で、進学先は、日本大学の各学部が大部分である。
- (6) クラブ活動は、運動、文化、学術とも盛んで、美術、生物、サッカーがよく活躍している。山中湖と西伊豆に寮があり、毎年1年生全員が参加して夏季研修を行っている。

山 梨 県

県立峡南高等学校（全日制）

- (1) 山梨県下部町。国鉄身延線久那土駅下車5分。県道79号線、三沢川、身延線に向って正門、山梨県南部唯一の専門高校として、鉄筋コンクリート4階建てが、48年4月に新校舎が完成。
- (2) 大正12年組合立峡南農工学校として発足、昭和30年建築科を設置、32年山梨県立峡南高等学校と校名変更。
- (3) 山梨県南部唯一の専門高校として、建築科希望者は定員(40名)に対し、2倍以上あるが、中学校の調整により、1.3倍前後の競争率、専門高校としてのレベルは高く、設置以来安定したレベルである。通学範囲は甲府から静岡県境まで広い。教育方針は、自発的学習・自律的生活態度、クラブ活動の活発化、科教育方針、勤
- 労と責任を重んじ、社会の望む人間性豊かな技術者の育成、重点科目、実験実習、構造設計(習熟度別学習)
- (4) 大企業就職よりも中企業への就職者が多い、各企業、各官省での活躍は高評。官省中心の同窓会(峡南会)を年1回開催。
- (5) 大企業就職(官省含む)5%、中企業70~80%、自営・設計関係5%前後で、年により変動あり、進学は10~20%位で、日大・日工大・工学院大・関東学院大・国士館大が主で、建築学科に入学。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで、登山部全国表彰7回、柔道、弓道、バレー部国体出場、野球部47年西関東代表甲子園出場、年間行事、スキー、水泳教室あり。

県立甲府工業高等学校（全日制）

- (1) 甲府市。市内西郊相川のほとり、甲府駅より徒歩約15分。校地約44,000㎡、建築床面積約17,000㎡。学科は建築のほか、機械、電気、電子、土木の計5科、全校生徒数930名、職員80名。

- (2) 大正6年徒弟学校規程により甲府市立甲府工業学校（指物、挽物の2科）として発足、大正10年建築科、13年土木科を加設、昭和16年県立に移管。昭和17年電気科、19年機械科、電気通信科（電子科）加設。現在建築科は1クラス、40人定員。
- (3) 近年建築科志望者は多く、県下高校入学希望調査では例年本校建築科の倍率がトップを占め、入学生徒のレベルは高い。生徒の出身は市内、郡部各半々ぐらい、建設業者の子弟も10%ぐらいである。指導方針は県下の中心校として、設計、施工いずれにも偏しないバランスのとれた建築技術者の養成を目指している。
- (4) 創設以来の卒業生計2,000人あまり、特に有

名人はいないが、県内は勿論全国各方面で活躍している。特に県下の建築業界は50%以上を本校卒業生が占めている。

- (5) 就職先は年により変動があるが、大企業10%、中小企業40%、官公庁、公社、公団等20%、設計事務所、自営10%程度。進学は20%ぐらいで国立大学は2～3年に1人入る程度、電機大、日大などに推薦入学が大部分である。
- (6) 山梨大学工学部に建築科がないため、県下建築文化のセンターとしての立場にある。クラブ活動は極めて盛んであり、特に運動関係は県下高校スポーツの中心校であり、ボクシング部、野球部などは全国的に名門校として知られている。

県立甲府工業高等学校（定時制）

- (1) 甲府工業高等学校全日制と施設設備共用。学科は建築科のほか専攻科（建築科）電気科、機械科の計4科、本科生徒数82名、専攻科42名、職員32名、給食婦3名。
- (2) 昭和22年山梨工業高校創立、電気科を設置。23年校名を山梨高等工学校に変更し、学校教育法に準拠した夜間4年制高等学校として電気、電気通信、土木科の3学科を山梨大学工学部内に設置する。25年県立に移管し、甲府工業高等学校城北分校となり、機械科を増設、土木建築科を土木科と改称する。31年山梨大学工学部内の城北分校より本校に復帰する。32年建築科を増設する。36年電気通信科、電子科に改称するも39年募集停止となる。42年土木科と建築科を合せて土木建築科と改称する。45年専攻科（建

築科）を増設、47年通産省告示446号により第三種電気主任技術者免状の取得試験免除の学校認定を受ける。48年土木建築科を建築科と改称する。

- (3) 近年定時制志望者は年々低下しているが本校では全国に先駆けて建築科に専攻科を増設して高い水準の技術を修得させ中堅技術者の育成に務めている。修業年限は2年で修了後2年の実務経験を経て2級建築士の受験資格が得られる電気、機械科においても高校卒業者を対象に3年編入を行っている。
- (4) 創立以来建築科卒業生450余名。専攻科修了生170余名で特に有名人はない。
- (5) 殆んど県内の建築業界に勤務、中小企業50%自営40%、官公庁設計事務所10%程度進学は推薦入学で1名程度。

県立北富士工業高等学校（全日制）

- (1) 山梨県。富士急行線富士吉田駅下車徒歩15分。富士山裾野に所在。校舎敷地20,811㎡、運動地

20,260㎡、計41,071㎡。

- (2) 昭和38年4月、県立北富士工業高等学校とし

- て発足。設置学科、全日制、機械科4学級、電子科2学級。
- (3) 競争率は1.0倍前後、工高としてのレベルは、高くも低くもなく、年毎の目立った低下も見られない。殊に実習、製図関係に力点を置く。
- (4) 中企業へ若干。小企業へ大多数といった状態。創設以来、歴史も浅いので、主だった業界での

活躍も今のところ見られない。有名人なし。

- (5) 中企業就職10%、小企業60%、自営業およびその他15%、進学15%、進学先は、主として、日大、関東学院大、中央工学校等。
- (6) クラブ活動は、運動部が盛んで、サッカー、ラグビー、自転車等が良い。

長野県

上田千曲高等学校（全日制）

- (1) 長野県。信越線上田駅下車バス5分・徒歩30分。千曲川に面し、53年度全面改築工事が完成し、県内職業高校のなかで施設・設備は最高である。校舎敷地4万㎡・屋外運動場2万㎡。環境に恵まれている。
- (2) 大正6年町立上田女子実業補習学校として発足。昭和19年建築科1クラス40名定員として設立される。昭和24年長野県上田千曲高等学校となる。
- (3) 近年入学生の層が幅広くなってきたが、建築関係業種の子弟が多くレベルも上昇傾向にある。したがって「質実剛健」をモットーに建築科目の全般について幅広く学習しいずれの分野においても活躍できる技術者の養成をねらいとしている。
- (4) 地元企業での活躍が目立ち、独立した会社・

設計事務所を営む者も多く業界の中核となりつつある。同窓会関東支部建築部会・地元建桐会など結束もかたい。

- (5) かつては関東方面の大企業を中心とした就職が殆んどでありそれぞれの企業において主要な地位にあり活躍しているが、近年関東方面への就職は5～10%、地元70%、設計事務所、自営20%。勿論年により変動はあるが地元指向の傾向が強い。進学は建築関係で20%前後、殆んど単科大学への入学である。又、ごく最近の傾向として各種専門学校への進学も目立ってきた。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んであるが特に全国的なレベルのものはない。文化部建築班は上田地区の古建築物の模型に取組み良い作品を残している。

県立飯田長姫高等学校（全日制）

- (1) 長野県飯田市。国鉄飯田線飯田駅下車徒歩15分。飯田城趾にある。眺望絶佳だが、敷地狭隘のため、今年度より徒歩で30分程郊外の地に新校舎建設工事に着手した。4階の校舎等8棟延べ面積1万5千㎡の校舎群が57年度に完成の予定である。（現在は80年の星霜に耐えた老朽校舎で悪戦苦闘中）

- (2) 大正10年町立の商業学校として創立。（校舎は中学校移転による払い下げ）昭和14年県立移管。同19年土木科・建築科を併設して現在に至る。建築科1クラス40名定員。
- (3) 生徒の質は比較的高く上下の差は少ないが、入学後の努力不足気味。実習・製図を中心とする多角的・実践的な学習展開により、基礎学力

の充実と基本技術の習得に力点を置いている。

- (4) 卒業生は1,500人位で『長姫建築会』の組織のもとに名簿・会報を発行して同窓生相互の連帯を深めている。
- (5) 地元就職指向が強いが、受入能力不足で止む

を得ず県外へ出る状態である。進学は20%位で全員が私学である。(日大・日工大・工学院大・名城大等)

- (6) 昭和29年甲子園選抜野球大会で優勝時の主力選手は建築科生徒であった。その後低迷状態。

県立池田工業高等学校（全日制）

- (1) 長野県。(安曇野)国鉄中央線(篠ノ井線)明科駅下車タクシーにて15分。松本駅下車大糸線にて松川駅下車徒歩で30分。北アルプスを一望できる安曇野の東部に位置し、アルプスよりそそぐ高瀬川に面し、環境は良好である。
- (2) 大正10年に町立池田実業補習学校が設置され、本校設立の母体となる。戦後、北安曇農業高校となり、38年、池田工業高校に移行し建築科が設置される。
- (3) 36年度ごろの経済成長とともに急激に応募者が増加し、工高としてレベルアップし競争率も高く好感もてる学園となったが、時代とともに逆転し現在に至る。科の教育方針として人間教

育に主眼をおき「基礎学力の向上と基本的生活習慣の確立」に重点をおき指導する。

- (4) 進路、最近進路状況大きく変る。大学・各種学校40%、就職50%、自営10%、就職の内容は中小企業が多く、設計事務所・公務員希望も多い。進学は、日大・日工大・工学院・名城大等である。
- (5) クラブ活動を重視し全員加入としている。特に運動部が盛んで、野球・陸上(マラソン)ボクシング・剣道等が活気的である。又、山にめぐまれ、一学年全員で夏は登山教室・冬はスキー教室を実施する。

県立長野工業高等学校（全日制）

- (1) 長野市安茂里(昔はアズの名所)。国鉄長野駅よりバス10分、徒歩25分。犀川の河川敷に約6万㎡の広大な敷地があり、近代的な鉄筋コンクリート4階建の校舎がある。
- (2) 大正7年開校。大正9年建築科設置。昭和41年現在地へ全面校舎改築移転。昭和53年創立60周年を祝う。1クラス45名定員。
- (3) 普通教科にも重点をおき、幅広い人間形成を期する。受験の競争率は本校五科の中でも最高。女子生徒も毎年入学している。
- (4) 高度成長期の頃は大部分、大手の建設会社(東京周辺)に就職したが最近では地元の企業にほと

んど就職している。又、国鉄等公務員希望も多い。

- (5) 地元の民間会社が大部分で県外は2～3人位である。進学者は毎年1～2割。働きながら専門学校への進学者が増えている。
- (6) 県内工業高校の中で最古の伝統を誇り、同窓会員約1万7千余名が全国で活躍している。特に地元の建築関係企業、官庁等には卒業生が多数、活躍している。クラブ活動は、運動班として16班があり毎日練習して汗を流している。又、科学班では建築班等が地道な活動をしている。建築班等の発表の場として学校開放(文化祭)が9月にあり、多数の見学者でにぎあう。

県立長野工業高等学校（定時制）

- (1) 長野市。国鉄長野駅下車。駅前より犀北団地行きバス乗車(10分)。工業高校入口下車、徒歩7分。昭和41年度に校舎全面改築完了。現在地に移転する。校舎は鉄筋コンクリート造4階建て施設は完備しており、環境は良い。
- (2) 大正6年長野県立工業学校として発足。大正7年開校。同9年夜間建築科付設され現在に至る。
- (3) 現在建築科・機械科・電気科の3コース。それぞれの学科に関連する職業について通学する者多く、かなり広範囲にわたっている。
- (4) 建築科の卒業生は1,045名を数え、その大半は諸官庁を始め建設業界の各分野で活躍しており、自営者も多い。(同窓会は年1回の総会を持つ)
- (5) 卒業後現業継続者が最も多く53%、自営その他34%、新規就職者13%、年により多少の変動あり。近年の傾向として地元の中小企業で活躍する者多し。
- (6) 生徒会活動は校友会と称し、専門委員会・特別委員会・学芸・運動に区分され、生徒が自主的に運営している。特に運動部が盛んで、昭和52年度にバレーが北信越大会優勝、軟式野球県大会優勝、両者とも全国大会出場。バスケット県大会優勝。53年度卓球北信越大会に優勝している。年1回学年毎に1泊2日の社会見学旅行を、3学年時には関西方面に修学旅行を実施している。

新潟県

県立新発田商工高等学校（全日制）

- (1) 新潟県新発田市。国鉄羽越本線・白新線新発田駅下車徒歩15分。県道新発田・水原線沿え。県の北部。近世は溝口氏十万石の城下町。近くに二王子山、飯豊山展望できる。郊外に月岡温泉や紅葉の名所・内の倉・加治川両ダムがあり。
- (2) 大正6年新発田商業学校として設立。昭和19年戦時非常措置方策により工業学校に移換し、新潟県立新発田工業学校と改称、戦後23年新潟県立新発田商工高等学校と改称し、建築科1学級置く。
- (3) 県下、中・下越・地区の生徒が通学。競争率は2倍前後地方として、また校内においてレベルは高い方である。年により多少変動がある。
- 設計(構造・製図・パース)・実習関係に力を入れる。
- (4) 大・中企業、国家・地方公務員・設計事務所等に就職。有名人別になし。同窓会各職場での芝建士会の交友盛ん。同窓会は年2回。
- (5) 大企業就職5~10%、公務員30%、中小企業40%、年度により多少変動あり、進学25%前後、早大、理大、日大、東洋大、法政大、千葉工大、金沢工大、建築学科が多い。
- (6) クラブ活動は特に盛ん、陸上、卓球、剣道、空手道等は県下でも有名で知られている、多種のクラブの中で全生徒入部活躍。

県立高田工業高等学校（全日制）

- (1) 新潟県。信越線高田駅下車25分。高田城跡に位置する。53年度に鉄筋コンクリート4階建に改築。
- (2) 大正5年高田市立商工学校として発足。昭和18年建築科を設置2クラス80名定員。
- (3) 中学校でしばって受験するので競争は1.1倍程度、工高としてのレベルは普通上中越地区の子弟が多い。設計関係に力を入れている。
- (4) 大企業から中小企業まで。独立した者、公務員も多い。有名人なし。校友会盛ん。（各地区毎に建友会、工建会などの名称あり）
- (5) 大企業就職は5%、中小企業65%、公務員30%、進学は10%前後で、日大、電気大、長岡科学技術大、金沢工大、福井工大、日本工大など、主に建築関係が多い。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで、バレー・バスケットなどが良い。地域との結びつきなし。

県立新潟工業高等学校（全日制）

- (1) 新潟市。国鉄越後線小針駅下車30分。新潟交通バス、寺尾朝日通下車10分。本館RC造4階、校舎延床面積21,412㎡、敷地60,118.43㎡、施設・設備共充実された恵まれた環境にある。
- (2) 昭和14年創立、昭和24年建築科・土木科各々1学級設置される。昭和40年定時制建築科1学級併設。昭和45年、現在地に総工費11億数千万円で新校舎建設はじまる。昭和47年新潟市浜浦町より現在地に移転。
- (3) 新潟市及びその他の市町村から優秀な人材が集っている。今までのところ大きなレベル低下はない。基礎学力養生を重視し、生涯教育の一環として学校教育をとらえ、応用能力の開発と、将来も積極的に学習できる人材育成に力を入れている。
- (4) 県内企業は勿論、県外の企業でも管理職とし、また、中核として大いに活躍している他、県内外において、施工会社・設計事務所を営んでいるものも多い。建築以外での有名人としては、デュークエイセスの真木野義孝。
- (5) 大企業30%、中小企業40%、公務員10%、自営5%、進学15~20%、日大・日本工業大・東北工業大・専門学校が多い。最近では、一浪して防衛大・山形大医学部・新潟大文学部、早稲田大政経学部等に進学した変り種もいる。
- (6) 運動クラブは盛んで、ラグビー、サッカー、は毎年全国大会に出場、その他バスケット、柔道・野球も成績がよい。県下スポーツ優秀校として表彰をうけている。

富 山 県

県立高岡工芸高等学校（全日制）

- (1) 富山県。高岡駅より氷見線越中中川駅下車徒歩3分。西側に県工業試験場、東側に県立高岡高等学校があり近くには高岡古城公園もある。旧制富山県工芸学校の跡地である。鉄筋コンクリート4階建の本館と、後ろに3階建の実習棟が並ぶ。

- (2) 明治27年富山県工芸学校として開校。戦後26年建築科を設置、1クラス25名定員。現在は36名定員である。
- (3) より高いものを追求してやまない尚美の伝統に根ざし、実践的工業人の育成を期する。受験競争率は1.3倍前後。県下の建築科設置学校は、2校のみで工高としてのレベルは高い方である。県域の約半分の子弟が集まる。標準的な教育課程を編成しているが、特に設計（設計製図）関係に力を入れる。
- (4) 大企業へも就職しているが、県内中企業が圧倒的であり、独立した事務所を営む者もいる。

有名人は建築以外では、美術工芸界で活躍している中堅作家が多い。

- (5) 90%程度が県内建設関係企業へ就職しており、設計事務所・公務員関係が10%ほどで、年により変動がある。進学は15%前後で工学院大、名城大、金沢工大などで、専門学校へ進む生徒もいる。主に建築関係が多い。
- (6) クラブ活動は運動部で体操、陸上、卓球などが良く、文化部では数学研究（計算尺競技）演劇が良い。本校の教育実績を毎年開催する尚美展（学校祭）を通して地域社会に紹介している。

県立富山工業高等学校（全日制）

- (1) 富山県。国鉄北陸本線富山駅下車、市内電車大学前行きに乗車、大学前にて下車、または、高岡方面行きバスに乗車、普通の場合は球場前、急行の場合は大学前にて下車（いずれも所要約20分）。神通川に面し立山連峰を一望できる。54年度には鉄筋コンクリート造4階建の校舎建設中で完成は57年頃の予定。
- (2) 大正5年市立富山工業学校として建築、家具、塗工の3科で発足。昭和23年に県立富山工業高等学校に改称現在に至る。（機械2、設計計測1、金属工業、電気2、建築1、インテリア1）。
- (3) 本県には建築科は本校と高岡工芸高校の2校しか設置されていないのでレベルは高い方である。卒業生は地元に着する者が多く、建築技

術者として活躍できるよう、設計、施工部門に特に力を入れている。

- (4) 本校建築科の歴史は古く県内官庁、設計事務所、建設業の各部門で広く活躍し県内での知名人が多い。衆議院議員、安田修三先生も本校出身。
- (5) 大企業就職5～10%、中小企業60～70%、設計事務所、官庁5～10%、進学は20～25%前後、日本工業大、名城大、金沢工業大、福井工業大、日大程度。
- (6) クラブ活動は一年生全入で特に強いクラブはないが、サッカー、バレー、山岳、写真などが良く、特に吹奏楽部は全国大会に出場することが多い。

石川 県

県立小松工業高等学校（全日制）

- (1) 石川県。小松駅下車、真東へ2.5km。霊峰白山が最もすばらしく見える、田んぼの真中だが、近年市街化しつつある。校舎は3階建2棟、平家の実習棟、現在4階建の実習棟を建築中で、

全て完成すれば県内最高の実習棟になる。

- (2) 昭和14年石川県立小松工業学校として開校。昭和41年建築科設置1クラス40名定員。
- (3) 中堅の建築技術者養成を目標にしている。レ

ベルは少しずつ低下しているようだが、毎年中学のトップクラスの生徒も入学している。構造関係に特に力を入れ、選択でも構造計算のコースがある。

- (4) 加賀地方（小松・加賀）の建築業界は、ほとんど本校の卒業生で業界にも大きな力を持つようになっている。有名人なし。
- (5) 昭和49年ごろまでは、県外の大企業に50%程

度就職していたが、最近では進学が30~40%と多くなり、就職もほとんど県内の業者となっている。進学校は金沢工大、福井工大が主で、その他有名私大工学部に数多く進学している。

- (6) クラブ活動は運動部ではハンドボール（毎年インターハイ出場）、文化部ではブラスバンド（数多く県優勝）が活躍。地域の業界との結びつきは強い。

金沢市立工業高等学校（全日制）

- (1) 金沢市。金沢駅下車。徒歩5分、北鉄六枚町バス停より大野・金石方面行バスに乗車し、金沢市立工業高校前にて下車、徒歩4分、鉄筋コンクリート4階建本館、実習棟2棟並びに体育館2棟、図書館および同窓会館などがある。
- (2) 昭和3年金沢市立工業学校として発足。機械・電気・土木・建築の4科であったが、工高発足と同時に家庭科が新設された。その後電子科ができ、実庭科は廃止されたが、精密機械が新設され、現在機械・電気科各2クラス定員80名。精密機械・電子・土木・建築各1クラス定員40名。総数960名である。
- (3) 学校は3つの教育方針を掲げている。1) 高い教養と秀れた技能を。2) 責任ある言動と協調の精神を。3) 勤労の喜びと健全な心身を。

以上の教育目標にもとづき、勤労学習、体験学習を重視している。現在レベルは年毎に低下の傾向にはあるが、学校内では他の学科よりは良い方であるが、倍率も1.3~1.5倍前後である。

- (4) 以前はかなりの人数が毎年大企業に就職していたが、現在殆んどいない。また設計事務所や建設会社を経営する者も少なくない。有名人なし。建築科だけの同窓会はない。
- (5) 大企業就職5%前後、中小企業80%前後、設計事務所自営15%、年により変動はある。進学は20~30%前後で金沢工大が最も多い。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで、バドミントン部全国優勝5回、また文化部では、ブラスバンド部の活動が活発である。

金沢市立工業高等学校（定時制）

- (1) 金沢市。金沢駅より徒歩5分、北鉄六枚町バス停にて金石行に乗り、金沢市立工業高校前下車4分。昭和39年泉野町より移転、鉄筋コンクリート4階建、実習棟2棟、施設、設備共に充実している。
- (2) 大正13年金沢市立工科学校として発足。昭和23年金沢市立工業高等学校本科第2部（定時制）として、全日制に併設。1クラス定員40名。

- (3) 志願者は年々低下。現在定員近いが高卒以上の編入者が多い。実習・製図に重点をおいているが、在学中2級建築士受験者が毎年10名程度あり、そのための指導もしている。
- (4) ほとんど中小企業、独立者が多く有名人はいない。校友会あり。（すみなわ会と称し年1回総会を持つ）
- (5) 中小企業80%、自営自家業20%、進学は年に

より1、2名程度で、ほとんどいない。

(6) クラブ活動はそれほど活発ではないが、地元

企業の協力を得ている。

県立羽咋工業高等学校（全日制）

- (1) 石川県羽咋市。能登半島の中心で西海岸に位置する。国鉄羽咋駅より北へ徒歩で約20分。国道249号線をのぼりきった丘にある。松の緑にかこまれた広大な敷地の中に鉄筋コンクリート3階の白亜の学舎である。眼下の千里浜に日本海の白波が打ち寄せ、遠くに水平線、白山連峰を望む。近くに一の宮、気多大社等旧跡も多い。広々とした緑の芝生をしきつめた校庭、3万㎡をこす広大な運動場等学舎としては最高の条件にある。
- (2) 昭和37年石川県立羽咋工業高等学校として開校され現在に至る。1クラス40名定員。
- (3) かつて能登地方で唯一つの建築科として、全

- 能登から「建築」を志さず優秀な生徒が集い、工高としてのレベルは高かったが、近年やや低下の傾向にある。構造・製図関係に力を入れる。
- (4)(5) 創立以来、県外の建築の一流大企業に殆んど生徒が就職するという状態から、ここ2、3年、県内の建築の中小企業に就職するというようになってきた。一人子が多くなり、親の地元での就職をという希望故か？進学はクラスの10%~20%。殆んど私立大建築科。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んである。ラグビー（全国大会出場）弓道（国体優勝）剣道（全国大会出場）、バレー、柔道、バスケット、陸上等。

県立珠洲実業高等学校（全日制）

- (1) 石川県。国鉄能登線、能登鶴飼駅下車2分。国定公園能登の代表的景勝見付島を前面に立地する。45年度、鉄筋コンクリート地上4階建校舎改築工事着手、49年度完成。現在建築科1学級、商業科5学級で一学年が構成されている。
- (2) 昭和38年石川県立珠洲実業高等学校（商業科・家政科）として発足。昭和45年、建築科の前身として土木科1学級を設置。昭和46年地域住民の要望により建築科に変更。
- (3) 珠洲市域に対し、普通高校1・実業高校1という現状により、中以下の生徒が多数入学している。従ってレベルは、必ずしも高くなく年々低下の傾向にある。建築を中心とし、建設関

- 係に対応出来る多様性のある教育を目標としている。
- (4) 中小企業就職者が大半を占め、歴史が浅いためか自営・有名人なし。
- (5) 大企業就職0~5%、中小企業75%、地元企業が少ないせいか県外就職が多い。進学は10~20%前後で、福井工大・金工大・大同工大・その他、又は専門学校が多く、ほとんどのものが推薦制で入学している。主に建築土木系である。
- (6) 運動部・文化部ともに活発な活動を行っているが、なかでも吹奏楽部は、かなりの成果を上げている。

福 井 県

県立武生工業高等学校（全日制）

- (1) 福井県。国鉄武生・福鉄バス常久下車。バス停前が学校。正門まで1分。校地面積44,318㎡に鉄筋コンクリート3階建本館など11,198㎡の校舎が建ちならび、土木・建築・電気・工業化学の4学科、約680名の生徒が在籍する。
- (2) 昭和34年学校創立、土木建築課程設置。昭和37年土木科と建築科に別けられ建築科1クラス定員40名となる。
- (3) 普通高校高校の増設により、年々レベルが低下するも中学校における中程度の生徒が入学する。20%は旧武生市内の子弟であるが福井市内の子弟も入学している。構造設計・製図・実習関係に力を入れる。
- (4) 創立より日が浅く独立して事業を営む者は少ない。47年頃迄は大企業への就職が多かったが現在は中小企業への就職者が多い。
- (5) 大企業就職5～10%、中小企業40～50%、自家5～10%、公務員公社公団5～10%、進学25～35%で、福井工大・金沢工大などで、時には1浪で国立大へ入学している。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで、野球・軟庭・弓道などが良い。

福井工業大学附属福井高等学校（全日制）

- (1) 福井市。国鉄福井駅下車市内バス約10分。学園町の一角に金井学園あり、福井工業大学に併設。自然環境に恵まれた緑豊かな総合学園である。昭和55年度には新校舎（鉄筋コンクリート5階建）も出来、県内一の設備施設のとのった総合高等学校となる。（昭和55年8月完成）
- (2) 昭和25年北陸電気専門学校を創設、昭和34年福井実業高等学校と校名改称時に建築科設置80名定員。昭和40年福井高等学校と校名改称、時に福井工業大学開学。昭和53年福井工業大学附属福井高等学校と校名改称。昭和54年創立30周年式典挙行現在に至る。
- (3) 本校受験する競争率は1.5倍位である。年により波があり、大部分は県内全域より入学している。製図及び設計に重点をおき、地域社会で求められている設計事務所や現場監督者として活躍できるよう教育をしている。
- (4) 中小企業就職者が多い。県庁、市役所等にも若干先輩がいる。
- (5) 中小企業60%、進学20%、設計事務所、自営20%、年度により多少変動あり。進学の内5%は専門学校、15%は大学で、福井工業大学への特典により入学するもの多い。時には国立に一浪で入学している。
- (6) クラブは盛んで、野球部（甲子園春夏連続出場）陸上、柔道、体操、バドミントン、バレーボール、馬術、吹奏楽が成績良い。一年次永平寺参禅等があり学内でも夢殿にて座禅をする。

岐 阜 県

県立大垣工業高等学校（全日制）

- (1) 岐阜県。東海道本線大垣駅下車。近鉄バス10分。工業口下車、南へ徒歩5分。設置学科：機械・電気・電子・情報技術・建築・土木・工業化学・繊維工業。学級・生徒数：33クラス・1320名、校舎：鉄骨及び鉄筋コンクリート構造。
- (2) 大正15年岐阜県第二工業学校として発足。機械・電気・建築の3科を置く。昭和23年大垣市立工業高等学校と合併、校名を岐阜県立大垣工業高等学校とする。設置学科は創設時の3科に加えて逐次増設、改編が行なわれ、昭和46年情報技術科を設置し、現在にいたる。この間、昭和50年に創立50周年を迎える。
- (3) 岐阜県下の工業高校にあつては最も長い歴史と伝統をもっており、学校としても建築科に対しても社会の評価は高く、優秀な生徒が入学してくる。本校の建築科では設計製図を中心に、構造設計にも力点を置いている。
- (4) 企業の大小にかかわらず、全国各地でたくさんの卒業生が活躍。大企業の支店長、部長から設計事務所や施工会社の社長まで多彩である。
- (5) 年により変動はあるが、最近の傾向は、大企業10～15%、中企業50～60%、小企業10～20%、自営5%前後である。進学は10～15%で、名城大学、愛知工業大学、中部工業大学などの建築学科へ入学する。
- (6) 部活動は盛んで、特に運動部の活躍が目立つ。最近では全国高校総体において、サッカーがベスト8入りし、弓道部は団体第3位、個人4位の成績をおさめている。他に、陸上、テニス、バドミントンなどの活躍も目立っている。

県立大垣工業高等学校（定時制）

- (1) 岐阜県。国鉄大垣駅下車、近鉄バス市内線10分工業口下車南へ徒歩5分。旧制岐阜県第二工業学校（岐二工）運動場南を新幹線が通る。昭和47年定時制食堂完成。昭和50年全校舎鉄筋コンクリートとなる。創立50周年。
- (2) 昭和15年岐阜県第二工業学校第二本科（夜間部）として発足。昭和23年学制改革により新制高等学校となり、校名を岐阜県立大垣工業高等学校と改称定員20名。
- (3) 県下唯一の建築科で工業高校としてのレベルは高い方である。志願者はかつては2倍近くあったが、年々少くなった。大部分の生徒は建設業関係に勤務している。設計製図・構造・実習に力を入れる。
- (4) 中小建設業に就職し技術者。設計事務所、請負業を営む者多し。同窓会盛ん。年一回総会を持ち（大阪・名古屋・関東）支部総会を持つ。
- (5) 中小建設業70%、自営20%、年により変動あり。進学10%前後で、専門学校・名城大学2部理工学部・岐阜経済大学2部。
- (6) クラブ活動は運動部が盛んで、卓球・剣道・自転車部など定通高校全国大会出場、自転車部は昭和52年・53年と全国大会で連続優勝している。

県立可児工業高等学校（全日制）

- (1) 岐阜県。国鉄太多線広見駅下車、名鉄新広見駅下車、北東へ徒歩にて約15分、北には日本ライン下り乗船場がある。敷地面積46,484㎡、建築面積18,817㎡。鉄筋コンクリート造や鉄骨造の校舎が、ゆとりをもって配置され、第2運動場も設置されている。
- (2) 昭和38年に開校し、昭和49年に建築科1クラス定員40名が設置された。
- (3) 果樹園に囲まれ、静かな環境で、自信と誇りを持って、社会に貢献できる工業人の育成に努めている。建築科では特に実習、設計製図に力を入れている。
- (4) 中京地区や地元の中小企業に就職し、中堅と

- して活躍している。同窓会報を年一回発行し、文化祭には総会を行ない、バザーを出している。
- (5) 大企業就職4～6%、中小企業70%、自営6～10%、主に建築関係の会社に就職する。進学は15%前後で、名城大、中部工大、大同工大、日本工大等の建築関係が多いが、専門学校に進む生徒も多くなった。
 - (6) 部活動では、ホッケー、バレー、卓球、書道、写真などが盛んで良い成績を上げている。毎年一年生全員が国立青年の家に合宿研修を行なっている。地区別父兄懇談会を実施し、地域社会との結びつきを深めている。

県立岐阜西工業高等学校（全日制）

- (1) 岐阜県庁の真南600m。県下工業高校のモデルスクールを目標として、田圃の真中に建てられた。最近は大分学校周辺に家も建てこんできたが、屋上に立てば、東南に濃尾平野、西に鈴鹿山系と伊吹山、北に国とり物語りで有名な金華山、遠く中央アルプスが望まれる雄大な風景が展望できる。
- (2) 工業高校増設のラッシュの昭和37年度設置。機械・電気・化学工学・土木・建築・設備工業の10学級。建築科は1クラス40名定員。
- (3) “不撓不屈”をモットーに品性の陶冶と基礎学力の修得を重視している。特に働くことをいとわぬ人間にするために一貫実習を行っている。

- る。(現在延100㎡の鉄骨造2階建の倉庫を実習の一環として建築中である。)
- (4) 創立して未だ日が浅いので卒業生の社会的地位も低いが、ぼつぼつ設計事務所を営むものも出て来た。
 - (5) 近年の地元指向の風潮か、近辺の中小企業に就職するものが非常に多くなってきた。大企業就職5%、中小企業60%、設計事務所・自営15%、進学20%前後である。
 - (6) 部活動は運動系が盛んで、とくにホッケーは全国的に有名、レスリングも毎年全国大会に出場。野球も県下の実力校で甲子園まであと一步のところにある。

県立高山工業高等学校（全日制）

- (1) 岐阜県高山市。国鉄高山駅より南方徒歩15分。小京都、飛騨高山の南西、高山本線沿線に位置

- し、巨大なポプラ並木が、校庭を囲んでいる。55年度には、現在建設中の校舎も完成し、4階

建鉄筋コンクリート造の校舎3棟すべてが揃い、校庭も拡張される予定である。

- (2) 昭和19年県立高山航空工業学校創立。昭和23年建築科設置。32年斐太実業高校となり、48年農・工分離により、県立高山工業高校となる。
- (3) 地域工業教育の中心校であるとの自覚誇りを持ち、明朗な校風の樹立と定着につとめ、知・情・意の調和のとれた人間形成をはかり、強健な身体の育成につとめる。また、技術革新に対応できる教養と技術、並びに正しい職業観を見につけた工業人の育成をはかる。ゆたかに・さとく・たくましくを指導目標にしている。

- (4) 大企業よりも中企業や独立した事務所を営む者が多い。卒業生の交流も盛ん。
- (5) 中・小企業を中心とした、工務店関係への就職が大半を占め、少数が自営及び進学である。進学は名古屋を中心とした、中部圏内の大学へ進んでいる。
- (6) 部活動は運動部が盛んで、地の利を生かしたスキー部や、今年から創られた硬式野球部それにサッカー・山岳・陸上など、どの部も活動が盛んである。また、吹奏楽などは、公共行事の演奏依頼などで、地域との結びつきもある。

県立中津川工業高等学校（全日制）

- (1) 岐阜県。中央線で名古屋より1時間余、美濃坂本駅下車。北方の丘の木立ちの上に鉄筋4階建の本館が頭を出している。徒歩約15分、バスあり。
- (2) 昭和19年、県立中津工業学校土木科、建築科の2科で発足、23年学制改革により、中津高等学校として統合され、昭和38年、新たに機・電2科を増設して現在地に移転、独立。建築科は1クラス、定員40名。全校480名。
- (3) 校門を入れば、「若い力」と題する白亜の生徒の像が右手を天の一角に向かって挙げています。「質実剛健」をモットーとして、勉学にクラブ

- にいそしみ、また校内営繕を兼ねた施工実習、(3年)にも重点をおいている。
- (4) 卒業生の大半は中京地区へ進出する。地元の数市の土木、建築課長クラスの大半を卒業生が占める時が目前に来ている。第一回吉田五十八賞を受けた深谷浩一氏（泉佐野市で事務所経営）は昭和29年卒業生である。
 - (5) 大半が中京地区および地元建設業就職。官公署10%、一般会社10%、設計事務所5%。進学は名城大など私大へ10%、専門学校へ10%。
 - (6) クラブ活動全員加入を推進し、柔道、サッカー、軟式野球などは県下有数の強さ。

県立岐南工業高等学校（全日制）

- (1) 昭和55年度より「岐阜市本荘八ヶ坪」三菱レーヨン跡地に全面移転。国鉄岐阜駅より西約3kmの所に位置する。工業モデル校として再出発。校地面積約5万㎡の敷地に鉄筋コンクリート造4階建の本館棟1棟、3階建の実習棟2棟、平家の工場棟1棟、その他からなる。
- (2) 昭和18年岐阜市立工業学校として発足。昭和

- 23年学制改革により岐阜市立工業高等学校。昭和31年県立移管により岐阜県立岐南工業高等学校と改称、現在にいたる。建築科1クラス40名定員。
- (3) 岐阜市およびその周辺の生徒が大半である。生徒の資質は業界の景気に左右されやすく波がある。将来の建築士にそなえて、特に構造設計

・設計製図に重点をおいている。本校のモットー“誠実明朗な岐南工生”。

- (4) 大企業より中小企業へ、大都市より地元志向への傾向が強くなる。独立して設計事務所を営むものもかなりある。有名人なし。
- (5) 設計10%、施工52%、営繕・その他2%、行

政2%、自営8%、進学25%が過去5年間の平均就職である。主なる進学先は早大・日大・日工大・名城大・愛知工大・中部工大、時に一浪して国立校に入学している。主に建築関係が多い。

- (6) 部活動はバレー・レスリング・自転車が実績をあげている。

市立関商工高等学校（全日制）

- (1) 岐阜県関市。国鉄越美南線・美濃関駅または名鉄・新関駅下車。駅から約5km。関市南部丘陵地帯に位置し、環境は学園地区で他に短大、養護学校などがある。鉄筋コンクリート4階建（一部3階建）の校舎は53年度に全工事を完了している。
- (2) 昭和18年関工業学校（私立）として発足。昭和30年関市に移管され、昭和38年建築科設置1クラス定員40名。
- (3) 生徒は関市を中心として近郊農村の子弟である。学校では設計製図を中心として、実習実験による体験学習を通じて、思考し創造する能力の開発と、作る喜びとを体験させ、設計や施工の

分野で活躍し得る人物の養成に力を入れている。

- (4) 設置されてから日が浅いので有名人はなく、卒業生の大半は建築関係会社に勤務している。
- (5) 県内中小企業就職が多く、大企業就職は少ない。進学は年によって変動があり、10~20%前後で、日工大・名城大・金沢工大などで、建築工学科である。
- (6) クラブ活動は全員が体育系か文化系のどれかのクラブに所属することになっており、全校的に活発である。体育系ではラグビー・卓球・剣道などがよく、特にラグビーは東海地方の最強であり、全国大会に8回、国体に7回出場している。

愛知県

県立愛知工業高等学校（全日制）

- (1) 名古屋市。市バス愛工前下車。南に名古屋城をながめ、北は庄内川に面する位置にあり、昭和47年に一応の施設が完備し、工業高校では県下屈指の規模の学校である。
- (2) 明治34年10月愛知県立工業学校として発足、染織科、図案科を設置、明治37年機織科、色染科、図案科となる。明治44年機械科増設、大正15年電気科増設、昭和19年に建築科が増設されて昭和21年第1回卒業生をだして現在建築科1クラス40名定員。昭和20年色染科を工業化学科に改称。昭和23年愛知県立愛知工業高等学校と

なり現在に至る。

- (3) 建築・土木科の括り募集により本人の希望・適性等により建築科、土木科を選科し、それぞれの学科に進む、毎年中学校から15~20%程度の推薦入学者がある。
- (4) 以前は大企業への就職者が多かったが、最近では中小企業が多く、殆んど請負関係業者である。建築科卒業生の校友会は愛建会と称し年1回の総会、見学親睦会など催している。
- (5) 大企業就職者5~10%、中小企業50~60%、家事従事10%、進学は15~20%前後で、名工大、

名城大、愛工大、中部工大、大同大、豊田工専などである。

- (6) クラブ活動は運動部が盛んで、弓道、バスケ

ットボール、バレーボールなどが良い成績をおさめている。

県立第二愛知工業高等学校（定時制）

- (1) 名古屋市。市バス名古屋駅バスセンターより中切町行き乗車、愛工前下車、徒歩約3分。市バス栄より安井町西行き乗車、福德町下車、徒歩約5分。近くに庄内川が流れている。
- (2) 母胎である愛知県工業学校は明治34年10月に開校、定時制課程は、昭和14年3月に愛知県夜間工業学校として設立、昭和23年4月愛知県立愛知工業高等学校、昭和47年4月独立校となり、愛知県立第二愛知工業高等学校となる。
- (3) 心身ともに健康で、ねばり強く“善さ”を追求する、豊かな人間の育成を教育目標としている。建築科としては年々志願者数も減り、又、学力も低下している。そのため、わかりやすい

授業、作業を伴う授業を心がけている。又、卒業後の2級建築士試験合格を目標の一つとしている。

- (4) 比較的小規模の工務店の現場監督、設計事務所勤務あるいは、独立し、大工として活躍している。
- (5) 定時制のためほとんどの生徒が昼は働いている。進学については、毎年1～2名程が大学、(2部)へ推薦入学している。
- (6) クラブ活動は運動部が活躍。54年度陸上、卓球が全国大会へ、バレー、柔道が東海大会に出場した。1、2年生宿泊合宿訓練実施。

県立一宮工業高等学校（全日制）

- (1) 愛知県一宮市。国鉄または名鉄一宮駅より東へバス12分、一宮工高前下車。周辺にはまだ田畑が広がり、国道155号線沿にあって、県営一宮総合運動場の東に位置する。設置学科は4、約950名の男子ばかりが在学する。
- (2) 昭和38年4月開校。機械科3、電気科3、土木科1とともに建築科1クラス設置。定員40名。昭和49年度より建築・土木科を一括募集、第2学年より各々の科に分かれ所属する。
- (3) 礼儀を重んじ、熱意をもって学習に、スポーツに励むこと。力をつけ、必要なライセンスを取得すること。設計製図、施工実習を中心にした体験学習。
- (4) 卒業生は55年3月に第15回生が出る。地元建

設会社、官公庁、設計事務所で、それぞれ中堅技術者として活躍。業界の評価はきわめて良い。有名人特になし。

- (5) 進路の状況は、建設会社55%、官公庁・設計事務所15%、設備および住宅会社10%、自営10%、進学10%前後。大学進学は推薦その他で、名工大II部・名城大I・II部・愛工大・中部工大など。
- (6) クラブ活動は運動部が、地区総合で上位を堅持。特に卓球、バレーなど。同窓会(たくみ会)は低調だが三重県に山小屋を管理。地区との結びつきは、地元就職者の活躍と建築士会行事など。

県立佐織工業高等学校（全日制）

- (1) 愛知県。名鉄尾西線渕高駅下車10分。鉄筋コンクリート造4階建。18学級。
- (2) 昭和51年創立。翌52年建築科設置。1クラス40名定員。
- (3) ア。6つのしつけの実践。すなわち、制帽をかぶらせる。挨拶をする習慣をつけさせる。校内服を着用させる。頭髪を清爽にさせる。10分間清掃をさせる。芝生を一人一人に育てさせる。
イ。校内学力・技術技能検定の実施。その種

目は、構造、構造設計、製図、アーク溶接である。

- (4) 昭和55年3月。第1回生卒業予定。
- (5) 施工会社30%、自営30%、設計事務所10%、その他30%の予定。進学希望者はほとんどなし。
- (6) 部活動は運動部が盛んで、陸上・バレーなど特に活躍している。地元業者への就職予定者が多く、将来地域の建築業界の中核となるものと思われる。

県立豊橋工業高等学校（全日制）

- (1) 愛知県。国鉄豊橋・渥美線新豊橋・南栄駅下車西へ徒歩5分。敷地約50,400㎡、建物約10400㎡、学級数30で工業高校では県下最大である。
- (2) 昭和19年豊橋市立工業学校として発足。昭和21年建築科設置、27年県立移管、37年より建築科2学級募集となり、さらに50年から土木科と一括して入学させ、第一学年末で選科（建築80名、土木40名に分ける）している。
- (3) 愛知県東南地区（三河）に建築科設置の工業高校が本校のみという状態が長く（昭和47年まで）続き、地域の建築産業に対する貢献度大きく、産業界の第一線に技術者を送り、成長している。学校では設計製図・実習等に力を入れている。

- (4) 高度成長時代までは成績上位の者が大企業就職を希望。ここ数年来それも少くなり殆んど中小企業を希職し就職。独立した事務所・建設業を営む者も多い。校友会活動（建友会）は盛んで総会・研修会・見学会等豊富な行事を持ち縦の連絡を密にして東三河地区の建築産業発展の大きな一翼をになっている。
- (5) 大企業就職0～2%、中小企業80%、設計事務所・公務員・自営20%、年により変動あり。進学は30%前後で、名城大・中部工大・大同工大・日工大・金沢工大・福井工大、時には国立豊橋技科大に入学している。
- (6) 運動部が盛んで、特に陸上・弓道などが良い。

県立半田工業高等学校（全日制）

- (1) 愛知県知多半島の衣浦湾に面した半田市内に在り、国鉄武豊線半田駅、名鉄電車河和線住吉町下車西方約20分の丘陵地に位置する。校地約54,000㎡の地に鉄筋3階建の本館が運動場より一段高く建てられ、さらに一階分の段差で教室

棟群が並んで敷地は三段階に造成されている。

- (2) 昭和38年4月電気科(3)機械科(3)計6学級で開校されその後昭和49年に建築(1)土木(1)の2学科が増設され現在は8学級の規模である。
- (3) 最近半島内の各地に県立高校（普通科）が相

次ぎ新設され、工業高校への志願者は質の低下と数も減少し、競争率も建築・土木一括募集定員80名で1.3～1.5倍程度である。学力差は大きく、製図、造形、施工関係に重点をおく。

- (4) 卒業生は歴史も浅く少ないが、地元の中小企業が多く、他に名古屋、大府、刈谷地区への就職先もある。

(5) 中小企業70%、設計事務所・自営10～15%、その他5%、進学10%、進学先は、名城大、中部工業大、愛工大、専門学校などであり、いずれも建築関係がほとんどである。

- (6) 運動クラブが盛んで、野球、サッカー、剣道、テニスの成績がよく、知多地区、半田祭などでは特に活躍している。

名古屋市立工芸高等学校（全日制）

- (1) 名古屋市。市バス赤塚、名鉄瀬戸線尼ヶ坂下車徒歩5分。古くは尾張藩家老竹腰山城守新屋敷跡であり、明治に入って県立師範学校が置かれた地である。昭和36年から新校舎改築にかかり、昭和42年創立50周年の時完成。
- (2) 大正6年名古屋市立工芸学校（尋小卒修業年限3ヶ年制）として発足。大正11年図案科内に建築分科設置。昭和5年建築科として独立。昭和9年建築科第二本科（夜間課程）を併設。昭和23年現校名に改称される。定員全日制80名定時制40名。
- (3) 教育目標として、①信条「創意・責任・勤勉」の涵養を通して、自主的、民主的な人物の育成を図る。②心身ともに健全な工業人の育成を図る。をかかげる。伝統的に芸術色の濃い学校だけに建築科も伝統的に設計（製図）関係に力を

入れる。

- (4) 古い伝統をもつだけに大企業・中小企業・設計事務所等幅広く地元を中心に活躍している人が多い。又自営者もかなりの数にのぼる。活発な同窓会活動をしている「築会」があり、総会、研修会等が毎年開かれている。
- (5) 地元企業への就職が過半を占めるが、大企業への就職も若干ある。設計事務所への就職者は1～2割程度。他官公庁、自営、大学進学希望者は20%前後で、名城大、愛工大、中部工大等地元大学が多い。
- (6) 修学旅行にかえて、野外合宿訓練を1、2年生全員に実施。H・R運営に大きなプラスになっている。又建築科としては毎年古建築鑑賞、建築現場見学等を実施学習効果をあげている。

名古屋市立工芸高等学校（定時制）

- (1) 愛知県名古屋市。名鉄電車瀬戸線、尼ヶ坂駅下車すぐ。旧制愛知一師の跡地である。都心に近い位置で、しかも広い校地をもつ恵まれた環境にある。
- (2) 昭和9年名古屋市立工芸学校第二本科として、定時制夜間課程は発足する。
- (3) 昭和45年頃迄は競争率（入試）2倍位の難関であったが現在は、どこの定時制でもそうであ

るように、広き門である。大工・左官のような建築関係の職人が多い。

- (4) 愛知県下で最も伝統のある学校の一つとして、卒業生は建築界で大いに活躍している。
- (5) 職をすでに持った生徒達であるので就職等は特別世話をしていない。大学への進学者が毎年数名ある。
- (6) その他、本校は建築科の他に機械科がある。

クラブ活動等は定時制のため非常に低調である。

県立碧南工業高等学校（全日制）

- (1) 愛知県の衣浦湾に面した碧南市の北部。名鉄本線知立駅乗換え。名鉄三河線北新川下車10分。高浜川が校地の東を巡り衣浦湾にそそぐ、クリーム色の四階建の校舎が高浜川に影を映している。この地方は三州瓦の生産で全国的に有名。
- (2) 昭和48年4月に戦前から歴史のある碧南高等学校より機械科を分離し、建築・環境工学・翌年に電子工学を加えた工業独立校。昭和55年度には27学級となる。
- (3) 新設校ではあるが施設、設備は充実しており、各産業界の期待も大きい。建築科では材料実験装置（100 t）、構造実験装置（30 t）情報処理実習のコンピューター3台、施工実習のサポーターセット（50本分）および型枠セットが特色。
- (4) 卒業生は4回巣立ったところで、就職では碧南市を中心として西三河の建築施工会社、建築設計事務所、建築関連産業に進出して、逐年求人範囲、数を増やしている。
- (5) 発足以来4回の卒業生を送り出した。4ヶ年の累積で施工会社が80名、設計事務所が18名、官庁6名その他は自営。進学者は28名で名城大8、大同工大8、中部工大6。その他大東文化大、愛知大、名古屋芸大等がある。
- (6) クラブ活動は海が近いのでヨットが毎年インターハイに出ている。野球、バスケット、バレー、柔道など運動系が活躍している。美術部は年3～4回高校展等に参加。

名古屋工業高等学校（全日制）

- (1) 本校へは名古屋市昭和区高辻のバス停下車。徒歩3分。この校地は大正12年以来50余年を経過し知名度が高い。又校舎は現在鉄筋コンクリート造5階建、実習棟を増築中で来年早々竣工の暁には堂々たる口の字型校舎が完成する。外に近鉄線富吉駅近郊に永和台分校あり、広大な敷地に新設の大体育館及び分教場が建ち、平素一部の授業と春秋体育祭、夏期合宿訓練等を適切に行っている。
- (2) 最初名古屋工科学院として発足。大正13年建築科第1回生卒業以来現在まで連続として多数の有能な技術者を輩出し、地域社会の発展に貢献した。東海地方稀有の私立工業高校建築科である。
- (3) 創立以来の校訓は健全な身体、着実な修学、正しい礼儀を目的とし誠実勤勉で人に信頼される人格の陶冶に力を注ぐと共に建築の初級技術者として必須の専門教科の基礎事項を懇切丁寧に教え、将来の2級建築士試験の着実な合格を期している。
- (4) 当地の官公庁及び建設や設備の会社、建材店、建築関連企業等広汎な分野で活躍している。同窓会は建聖会と称し、会員数3,500名で東海第一を誇る。
- (5) 50余年の歴史と輝く伝統により毎年求人、数多くあり、卒業後の就職には極めて有利である。企業就職約70%、自家業従事15%、地元の大学・工専進学15%位である。
- (6) クラブ活動は極めて活発であるが、特に名工ラグビー部は全国的に名声を馳せている。その他、柔道、レスリング等も強い。美術部も盛んで各種の展覧会にしばしば入選している。

東日本建築教育研究会のあゆみ

昭和26年11月6日、「若葉荘」(東京)において「関東地区建築教育研究会」として発足した本会も、設立関係者、会員校および会員の努力と工業教育の急速な進歩によって今日みられるような確固たる大きな組織になった。しかし、組織が大きくなり会員も増えると、会の目的とか、設立趣旨などが見失われがちになりやすい。そこで、先輩方の記憶と資料などによって前回の20周年記念誌発行に当って表にまとめたが、今回は30周年記念誌を発行するに当って、それをとうしゅうして、20周年以後30周年までを表にまとめてみた。

設立当時には、他科にみられない種々の制限が工高校長協会などからあったようだが、建築科の教員達の熱意がいろいろの障害を打破し、教科書執筆、教材、標準テスト、学習の手引き、種々の講習会、研究会等々、つねに他科をリードしてきたが、現在は、建築科出身の校長が僅少とか、種々の問題が複雑にからみあってきているので、本研究会の活動もこれからいろんな難局にぶつかると思うので、会員諸兄の努力と協力によって、本会がますます発展するよう「熱意」をもって本会

の運営に協力していただきたいと思う。

以下、30周年記念誌を発行するに当って、本研究会の発展のために努力された本会理事長、会長と事務局の任期などを記録のため下記に記したいと思う。

年月	理事長	事務局
26.11		蔵前工高 浅野 26.11~30.3
}	伏見三郎	森安 30.4~30.10
36.6		墨田工高 宇都宮 30.10~36.6
}	中江 斉	静岡工高 関 36.6~40.6
40.6		(小石川工高) 岡登 36.6~43.3
}	冨塚信司	田無工高 森安 43.4~49.6
46.9		
}	長谷川光次	
48.6		
}	池田寿男	葛西工高 松本 49.6~現在
51.6		
}	遊佐五郎	
52.1		
}	(副会長森安四郎代行)	
52.6		高橋豊次
}		
53.6		堀重雄
}		

	東日本建築教育研究会の活動	会員の関連活動、教材、その他
昭和26年	11・6-7 本会設立総会(東京・若葉荘にて) 「関東地区建築教育研究会」と称す 理事長 都立蔵前工高 校長伏見三郎 事務局 " 浅野先生	指導要領発表後、文部省で「建築計画・設備」の教科書発行を計画 「建築計画」のみ研究会発足とともに教科書委員決定した。 東工大・谷口(吉郎)先生 伏見・中江・浅野・岸田・山田先生 主として浅野・岸田・山田先生が執筆した。
昭和27年	2・教科書対策委員会(市立川崎工高にて) 5・16-17 総会・研究協議会(県立沼津工高にて)「教科書、視覚教育の問題について」産振設備基準についての意見聴取(参加約30名、宿泊 熱海荘)	3・日活国際会館(日比谷)完成 10・23 十勝地震(M 8.3) 11・新丸ビル完成 12・国立近代美術館開館

	東日本建築教育研究会の活動	会員の関連活動、教材、その他
昭和28年	2・産振設備基準修正調査 2・14-15 関東・関西・東海地区建築課程研究協議会(県立沼津工高にて、参加約50名) 「産振設備基準」 5・教科書対策委員会(都立蔵前工高にて) 6・25-26 総会・研究協議会(県立高崎工高にて) 「視覚教育・教科書編集の問題について」(参加約40名)(宿泊、水上奥利根温泉) 7・教科書対策委員会(実教にて)会誌発行 9・13-14 研究会・都内見学会(若葉荘、参会者約60名) 「東日本建築教育研究会」に改称	文部省より教科書出版補助費出ること決定 6・26 { 近畿連盟と合同の教科書 7・27 { 委員会をひらき、執筆分担を決定(実教出版にて)
昭和29年	2・6 見学会：東京都体育館(斎藤謙次先生説明) 講演会：「リミットデザインについて」(若葉荘にて)小野薫先生 6・11-12 総会・研究協議会：(県立長野工高にて)(宿泊、わたり温泉) 6・会誌発行 10・15 見学会：鉄道会館(八重洲口駅舎)、東京都庁舎 講演会：「桂離宮について」藤岡通夫先生(東工大付工高にて)「構造」後藤一雄先生	構造力学(実数)発行 8・京都小御所焼失
昭和30年	5・19-20 総会・研究協議会・見学会：(県立宇都宮工高にて)(宿泊、鬼怒川温泉) 10・会誌発行 10・1 伏見理事長、墨田工高校長となる。事務局、都立墨田工高、宇都宮先生 10・18 見学会：NHKテレビホール見学 講演会(蔵前工高にて)：「海外の建築」狩野春一先生 11・演習書編集委員会	建築計画(文部省)発行 構造力学演習書(昭晃堂)発行 10・比叡山延暦寺講堂焼失
昭和31年	6・7-8 総会・研究協議会 「実習に関する研究発表」(県立高田工高にて)(参加約60名)(宿泊、妙高ホテル) 7・第1回標準テスト(建築材料、構造力学)実施 7・演習書編集委員会 8・" 9・" 11・17 見学会(科長会終了後)：羽田空港ビル 会誌発行	建築法規学習書(昭晃堂)発行 11・10 高等学校工業科「学習指導の手びき」建築課程編、発行
昭和32年	6・9-10 総会(東京・若葉荘にて) 見学会：リーダーズ・ダイジェスト社、法政大学、東京駅 9・研究発表会「計画実験」(県立弘前工高にて) 文部省研究指定校としての研究発表を兼ねて行なわれた。この会にて「学習指導の手引き」建築科編 発表・第2回標準テスト	構造計算(実教)発行 5・読売会館完成 11・小河内ダム完成 株式暴落、鍋底景気に落ち込む。
昭和33年	6・総会(県立甲府工高にて) 11・研究授業「構造力学」宇都宮先生(墨田工高にて)	3・大手町ビル完成 9・26 狩野川台風(死者736名、行方不明193名) 12・東京タワー完成

	東日本建築教育研究会の活動	会員の関連活動、教材、その他
昭和34年	<p>6・ 総会(県立川越工高にて)、(宿泊、飯能)</p> <p>11・ 研究授業「造形」中村先生「構造」山田先生 (東工大付工高にて)</p> <p>講演会:「海外の建築について」加藤六美先生</p> <p>12・ 産振設備基準改訂協議会(近畿と合同)</p>	<p>建築材料(実教)発行</p> <p>9・26-27 伊勢湾台風 (死者4,787名、行方不明 225名)</p>
昭和35年	<p>6・5-6 総会(県立神奈川工高にて宿泊、箱根湯本)</p> <p>9・ 研究会(都立小石川工高にて、都研究指定校、視 聴覚教育研究発表を兼ねて)</p> <p>講演会:「ライトの研究」山本学治先生</p>	<p>建築工事積算演習書(昭晃 堂)</p> <p>建築法規演習書(昭晃堂)</p> <p>建築製図上・下(実教)発行</p> <p>5・23 千り地震津波(三陸沿岸地 方大被害)</p> <p>12・ 厚生年金会館(新宿)完成</p>
昭和36年	<p>3・31 伏見理事長、教職勇退</p> <p>6・5-6 総会(県立静岡工高にて、宿泊、三保)</p> <p>理事長 中江先生(静岡工高校長 参加40校、70名)</p> <p>事務局 静岡工高(関先生) 東京事務局 小石川工 高(岡登先生)</p> <p>12・1-2 講習会「計画実験」(東工大にて、勝田研究室、 参加校44校、人員70名)</p> <p>見学:日比谷三井ビルの設備 日本生命ビルの特殊潜函工法とハイテンショ ンボルト工法</p>	<p>3・ 日光東照宮薬師堂焼失</p> <p>9・15~ 第2室戸台風</p>
昭和37年	<p>6・1-2 総会(県立郡山工高にて、宿泊、岩代熱海)</p> <p>11・ 講習会「構造実験」建設省建築研究所にて 出席者 約70名</p>	<p>建築構造1、2(実教)発行</p>
昭和38年	<p>5・30 } 総会・研究協議会・研究発表(県立水戸工高にて)</p> <p>6・1 } (宿泊、大洗)(参加59校、81名)</p> <p>見学会:東海村原子力研究所</p> <p>8・17 近畿工高連盟と連絡会開催(県立静岡工高にて)</p> <p>11・ 講習会「音響実験」東大生産研究所、NHK技術 研究所(東大、石井先生)参加約70名</p>	<p>1・ 北陸地方豪雪(約1ヵ月降 雪持続)</p>
昭和39年	<p>5・23-24 総会・研究協議会(県立市川工高にて)(宿泊、 木更津)(参加64校、102人)</p> <p>11・20-21 講習会:「設備実験」(虎の門共済会館にて、早 大 井上先生)(参加58校、67人)</p> <p>見学:代々木オリンピック競技場 虎ノ門病院</p>	<p>3・31 「容積地区に関する条例」都 条例公布施行</p> <p>6・16 新潟地震(M 7.5) 「学 習指導要領の手引き」(建 築科編)発行</p>
昭和40年	<p>6・5-6 総会・研究協議会(県立新潟工高にて)(宿泊、と やの観光ホテル)(参加70校、109人)</p> <p>11・30 講習会:「防水工事」「TILT-UP 工法」</p> <p>12・1 千葉大、波多野先生、日本住宅公団関係技師 見学:田島応用化工 作草部団地(西千葉) (参加36校、62名)</p>	<p>3・ 三井霞が関ビル起工式</p>

	東日本建築教育研究会の活動	会員の関連活動、教材、その他
昭和41年	<p>6・11-12 総会・研究協議会・研究発表(県立古川工高にて)(宿泊、鳴子温泉)(参加60校、95人) 理事長 富塚先生(県立向の岡工高校長)</p> <p>11・25-26 講習会:「超高層建築」(鹿島建設技術研究所にて)三井不動産、山下寿郎事務所、鹿島建設技術研究所(出席約80名) 見学:鹿島建設技術研究所内 三井霞が関ビル(参加59校、95人)</p>	<p>9・24-25 台風、24、25号</p>
昭和42年	<p>6・2-3 総会・研究協議会(県立前橋工高にて)(宿泊、伊香保温泉)(参加者 117名)「建築教育の問題と改善の方向について」</p> <p>11・24-25 講習会:「基礎構造・土質実験について」(建設省建築研究所にて)岸田英明先生外、第3、第4研究部員 見学:建築研究所 パレスサイドビル 「総合事務所建築の計画、施工について」 日建 林昌二先生、外、設計部員</p>	<p>建築設備(実教)発行 建築史() 建築計画() 建築設備演習(昭晃堂)発行 建築構造演習() 2・25 高等学校工業科「学習指導の手びき」建築科編発行 3・ 万博会場建設起工 7・9-10 台風7号</p>
昭和43年	<p>6・7-8 総合・研究協議会(県立宇都宮工高にて)那須温泉「建築科の多様化について」中江先生</p> <p>11・21-22 講習会「万博の施設について」(蔵前工業会館にて)万博協会建設部次長 林光夫先生 見学:国際貿易センター 日本鋼管 国立博物館(東洋館)(参加 100名)</p>	<p>新・構造力学演習(昭晃堂)発行 4・3 三井霞が関ビル竣工 5・16 十勝沖地震(M 7.9) 3・1 高等学校工業科「学習指導の手びき」建築科資料編上発行</p>
昭和44年	<p>6・6-7 総会・研究協議会(埼玉県秩父、秩父鉄道有隣クラブにて)(参加 150名)</p> <p>11・21-22 講習会:(工業教育会館にて) 「改正建築基準法について」水越義幸先生(建設省) 「学習指導要領総則編の改訂について」 関口先生(文部省) 見学:東芝科学館 京王プラザ(建設現場) 旭ガラス 日本鋼管</p>	<p>建築測量(実教)発行 6・10 高等学校工業科「学習指導の手びき」建築科資料編中・下(文部省)発行</p>
昭和45年	<p>6・5-6 総会・研究協議会(県立山形工高にて)(宿泊、よねや旅館)「学習指導要領の改訂」建築科編について 各分科会(製図・実習・計画・構造)</p> <p>11・27-28 講習会:(工業教育会館にて) 「電子計算機の利用について」小倉正士先生 見学:東海ビル(建設現場) 京浜急行ホテル(建設現場) 東芝科学館 電子計算機の実演(日立芝電商事)</p>	<p>造形(実教)発行 建築会社就職全科(昭晃堂)発行</p>
昭和46年	<p>7・28 東日本建築教育研究会創立20周年記念式典(社会文化会館にて)</p> <p>7・29-30 総会・研究協議会 理事長制を廃止、会長制度をとる会則変更 会長 長谷川光次</p>	

	東日本建築教育研究会の活動	会員の関連活動、教材、その他
昭和47年	6・2-3 総会・研究協議会・秋田県 「新学習指導要領による教育課程の編成」 8・2-3-4 施工部主催 「施工実習の指導法」 於 横須賀市立工 11・17-18 講習会 最近の鋼構造について(工業教育会館) 成田空港(東京国際空港)・検見川団地見学	建築実習(1、2)(実教出版)発行
昭和48年	6・1-2 総会・研究協議会・茨城県土浦市 会長 池田寿男 「教育課程の編成と実施上の問題点」 見学：鹿島臨海工業団地 11・16-17 講習会：「製図指導上の問題点」 KK 竹中工務店、仁木設計事務所 見学会：新宿副都市、その他	建築構造(実教出版)発行 建築計画(実教)発行
昭和49年	6・7-8 総会・研究協議会・愛知県名古屋市 「職業教育の改善に関する委員会審議の経過をめぐって」 見学：犬山城・明治村 事務局 葛西工高 8・7-8-9 施工部主催 於盛岡工高 「施工実習の指導法、実技教育」	
昭和50年	6・6-7 総会・研究協議会・千葉県成田市 「工業教育の改善、専門科目の最少限教育内容について」 見学：成田空港 8・21-22 計画部主催 於小石川工高 「計画実験・実習の指導法」(日照、換気、音響、空調)ミサワホーム総合研究所見学	建築設計製図(実教)発行 建築施工(実教)発行 建築構造設計(実教)発行 プレハブ住宅(コンクリート編)16mm映画
昭和51年	5・28-29 総会・研究協議会・山梨県富士吉田市 会長 遊佐五郎 「基礎実習の実践と問題点」 8・23-24 構造部主催 於田無工高 「材料・構造実験・実習」「コンピューター講習会」	建築史(実教出版)発行
昭和52年	6・10-11 総会・研究協議会・東京 九段会館 会長 高橋豊次 「教育課程の改善について」 「産振法、設備基準の改訂による運用上の問題点」 6・20-21 製図部会 「透視図のかき方、着色実技」 於東工大付高	建築の基礎問題(市ヶ谷出版)教材委員会発行 建築資料集(実教出版)発行 建築実習(1、2)改訂版(実教出版)発行
昭和53年	6・10-11 総会・研究協議会・青森県青森市 会長 堀 重雄 「学習指導要領の改訂について、建築科科目の統合」 8・18-19 「教材の作成と視聴覚教材の指導法」 於東京工業大学	
昭和54年	6・8-9 総会・研究協議会・栃木県、鬼怒川 「改訂学習指導要領の問題点」 8・20-21 施工部主催 「安全教育について」 於横須賀市、三浦ドック社員寮	

東日本建築教育研究会

創立30周年記念誌のための座談会

出席者 中江 齊（二代理事長）
 富塚 信司（三代理事長）
 池田 寿男（二代会長）
 堀 重雄（現会長）
 五十嵐永吉（東工大付工高）
 松本 延夫（事務局・葛西工高）

編集委員 井上 満（墨田工高）
 高山 英一（蔵前工高）
 堀越喜与志（小石川工高）
 森安 四郎（田無工高）（司会）

本会の発足と活動

会長 本会が昭和26年に東京の若葉荘で発足してから30周年を迎えようとしています。会員の皆様のご御努力によって本会が現在のように発展して参りましたが、30周年という一つの節目にあたり、会の発展に寄与して下さいました理事長、諸先輩の先生方に、過去、現在、未来についての御指導、御意見をいただきたく、御多忙の所御出席をお願い致しました。どうぞよろしく。

司会 早速ですが、初代理事長伏見先生と共に、会の発足・発展に大変な御尽力をしていただきました中江先生から、まず、会の設立から10周年位につきまして、社会的、教育的背景、あるいは、苦勞話などについてお願いします。

中江 本会設立当時のことにつきましては、すでに20周年記念誌に詳しく載っていますし、また、20～30年も前のことは記憶も薄らいでいますが…当時学習指導要領の改訂や産振設備基準の設定やら行なわれており、また、戦後の工業教育の胎動期でした。そしてお互に協力し合って建築教育を盛んにして行こうという気運が盛り上がっていた。その頃すでに関西には近畿工高連盟がありましてし、東の方にもつくろうということで、岸田先生（元神奈川工高）と意気投合し、伏見先生に中

心になっていただき、最初は関東地区建築教育研究会ということで発足し、だんだん大きくなって東日本建築教育研究会になりました。設立から20年間は大変充実した年月で、次々と革新的な方針が示され、新しい方向へ前進した時代でした。その間、「学習指導要領の手引き」を他科に先がけて発行するなど本会の活動が、工高教育界のパイロット的な役割を果たすと自負しています。

伏見先生が停年で勇退（昭和36年）された後、私が本会のまとめ役を勤めさせていただきましたが、暫くして県の教育委員会に転勤になりましたので、昭和41年から富塚先生をお願い致しました。

なお、2年間教育委員会勤務の後、再び現場に戻り、また、文部省の教材等調査委員をしておりましたので、停年退職後も昭和45年度からの指導要領改訂に携わり、その解説の講習会まで勤めてから委員を辞めました。当時の改訂に富塚先生も関係されておりましたが、その後はずっと先生が担当して下さいだったので、富塚先生あるいは池田先生にその後のお話をお願い致します。

今後につきましては、建築教科目内容の構造化を推進したいと思っています。

司会 では、昭和36年から41年までの5年間、理

事長を勤めていただきました富塚先生に御苦労話などをお願い致します。

富塚 その当時の話の前に、中江先生のお話と重複しますが、国会発足当時の補足をさせていただきます。国会設立以前は各科の研究会というものはなく、工業校長協会も現在とは違って、各科の研究会などの設立はあまり歓迎していませんでした。したがって「やろうじゃないか」といって口火を切った伏見、中江、岸田先生方は大変苦労されたのではないかと思います。設立だけではなく、標準テストも国会が独自で始めたのが最初です。このように、国会の活動は、他の研究会の嚆矢になったもので、その功労は大きいと思います。

標準テスト実施以前の頃、神奈川県内でも建築教育論議が盛んで、当時は学習指導要領もはっきりしていないし、また、どの程度指導すべきか、あるいは、指導できるかはっきりしていなかったもので、工高生としてはこの程度までは知らなければいけないという範囲を、問題にして示そうということで、皆で苦労をしてくっていました。岸田先生が特に熱心で、それらが国会で最初に実施した標準テストのもとになり、その後は工業校長協会に引き継がれ現在に到っています。実施当初からしばらくは非常に盛んだったようですが、今は様子が変わって来ている様です。

当時は、工業教育の昂揚期というか、整理の時代というか、とにかく、教育分野の変化とともに、それに合せて、学習指導要領がつくられ、見直されて改訂される。それに合せて産振設備基準をつくらなければならないというように、年中それらに追掛けられていたような気がします。当時、殆どの学校が非常に貧弱な設備しか持っていなかった。製図台と製図板を除けば、僅かな大工道具、簡単な測量器具と数台のレベル程度という状態から、今のような充実した施設・設備を持つことができるようになった。その出発点となり、また、大きなイナーシャとなったのが産振設備基準の制定であった。また「学習指導要領の手引き」など、

大変な情熱を傾けてまとめていただいた中江先生を中心に、多くの先生方の御協力で作られ、また時の移り変りに応じて、それらをよりよく実際的なものにする努力が国会を中心にしてなされた。……というのが、昭和45～46年頃までの大きな仕事だったと思います。

中江 その設備基準のことですが「建築科は製図板があればそれでよい」というような見方をされていたので、いやそうではない。建築を理解するためには、実験・実習も大切であるということに納得して貰うために、何をどのように使用するかということをもとめたわけですが、苦労しました。**富塚** その成果が「手引き」上・中・下巻にまとまったわけですね。

司会 先ほどから話に出ている学習指導要領の「手引き(建築科編)」の最初が昭和42年、次の上巻が43年、中・下巻が44年に発行されています。

では、年代順ということで、池田先生、昭和47～48年頃のことについてお願い致します。なお、昭和46年に会則を変更して、それまでの理事長制を会長制に改めました。

池田 私の話も古い所から補足させていただきます。私が川越工高に勤務するようになったのは昭和22年からで、学校には製図板と台が生徒数分と測量機械が1台ありましたか。さてどの様に生徒を指導をしたらよいものかと思案しているときに国会の発足の連絡を受け、早速出席し、埼玉県で建築科を設置している学校が少なかったので理事となり、たびたび会合に出席させていただきましたので、学校では私が一番新しい情報を知っている状態でした。ある時、川越工高で理事会を開いた後、校長(電気)から「建築は良いことを始めたな」といわれました。また「手引き」に関しては、編集に当たって土井さん(文部省)から「建築はよくまとまっているから、まず、建築から「手引き」をつくって貰い、追々と他科もつくりたい」といわれたことをはっきりと覚えています。

さて、会長になってからですが、前任の先生方がすでに立派な組織をつくれ、皆さんがそれぞれ

れ着実に任務を果たして下さったので特に申し上げることもありません。その間、指導要領・設備基準の改訂がありましたが、それは、五十嵐先生が担当され、他の先生方それぞれに協力・活動されていまして、話はその先生方からどうぞ……。

ただ会長になりました、本会総会の開催をどこにお願いするかということが悩みの種でしたので、会長最後の総会に約10年間の開催案私案をつくり提出しましたが、現在の所大体その線に沿って進んでいる様子ですので喜んでます。私の残したのはその位のことです。

五十嵐 池田先生は大変謙遜されていますが、分科会活動が軌道に乗ったのは先生の会長の頃からです。

冨塚 確かにそうですね。私のときにはそれほど整っていなかったようですね。

話は変わりますが、会の発展に関係することとしては財政問題ですね。どういうきっかけでしたかね、何時頃からでしたかね、ワークブックをやるうということになりまして、会の活動として取り上げました。その頃、工業校長協会に間借りをしていました昭晃堂から発行しました。その頃としてはかなり潤ったのではなかったかね。現在は大事なことではないでしょうか。

司会 ワークブック委員会は途中から教材委員会という名称に変わっております。その活動についてのお話しもどこかでお伺いしようと思っておりました。丁度話題に出ましたので、委員長の五十嵐先生からどうぞ……。

五十嵐 ワークブックは昭和45年頃には出揃っていたのではないですか。

冨塚 始めたのは何時頃だったですかね。昭和30年頃でしたかね。

司会 記録によると一番最初は、昭和30年に構造力学演習書が昭晃堂から発行されています。その後、法規・積算・設備・構造と発行され、その後教材委員会というように名称が変更になったと思います。

五十嵐 その後、材料・計画も考えていたのです

が、それについての検討を続けている間に教科目の改訂の話が出て来て、開店休業のようになってしまいました。その後、昭晃堂から「建築会社就職全科」を発行(昭和45年)しています。しばらくして、市ヶ谷出版から話があって「建築の基礎問題」をまとめました。

冨塚 会費は設立当初から昭和46年までは1000円、長谷川先生の頃は2000円、50年から3000円となって来ていますが、会費だけでは会の運営がなかなか難しい。

中江 会の運営費のことにつきましては、私の頃、賛助会制をお願いすることになり、その頃東京の事務局を担当されていた岡登先生(元小石川工高)は大変御苦勞をされた様で後で「コリゴリした」といわれました。

冨塚 ワークブックと賛助会でバックアップして行かないと会の運営が難しい。

司会 話を進めさせていただきますが、昭和51年、52年は、遊佐先生、高橋先生(両者元葛西工高長)に会長をお願い致しましたが、御不幸にも両先生とも御病気で亡なられました。御冥福をお祈りする次第です。さて53年から会長は堀先生をお願い致しております。これまでは諸先輩のお話を伺って参りましたが、会長として、堀先生お願い致します。

会長 私は電気出身です。したがって、今ほどのお話を伺いながら、電気の教育界に移して考えていました。電気では初め東京で研究会が設立され、現在では関東地区に拡大されていますが再来年で30周年です。

今、産振法が制定される昭和26年頃を省えりみますと、電気も建築と同様に大変貧弱な設備しかありませんでした。さらに逆か上って終戦直後などでは、戦時中に商業高校から工業高校に転換させられたというような生徒も一時期おりました。彼等が卒業した昭和23年頃は不況のドン底でした。今でいう一流会社にはクラスで1～2名しか就職できませんでした。地方の校長・教頭は、米・味噌をかついで上京し、就職を頼んで歩きました。そ

の結果が上記のようなものでした。その時はこれらの生徒達を何とかしてやりたいという念で一杯でした。建築も同じような道を歩いて来たものと思います。

設備・教育目標・学習指導要領といい、その頃はまだ占領軍政下にあり、しかもその地方の軍政によって教育方針も違うということもあり、自主的でなかった面が多々あったように思います。その様な状況の中から工業教育の振興を目指して皆で努力した結果が、産振法の制定という実を結んだ。そのために私達も動員されて、衆議院から参議院、自民党から共産党まで陳情に出かけたこともありました。産振法の実施が今日で見る工業教育発展の基礎であったと思っている。

現在工業高校は斜陽だといわれているけれども、私は希望を持っている。現在の豊かな社会をつくり上げて来たのは、現場において創意工夫を重ねながら物をつくり出して来た技術者の熱意であり、アイデアである。その点で工高卒業生が大きな貢献した事実を数多く耳にしている。しかし、現在の生徒は、豊かさに迷わされて創意工夫が足りない。この点を克服するよう指導して行かなければならない。

また、今伺いました本会設立と発展に寄与された諸先輩の苦労話の中から創意工夫を感じました。その気持を今後伝えて行きたいと思っています。

司会 次に本会発展の模様を、総会出席人数、会員校数などの面から眺めてみたいと思います。事務局の松本先生どうぞ……。

松本 私が森安先生から引継いだ頃、予算を立てるとき見積った学校数は100~105校でしたが、その後125校まで増し、次に徐々に減って現在では会費納入校は115~120校です。しかし総会の連絡は非加盟校にも発送していますので、発送校数は約250校です。賛助会費は当初1口、5000円で40口未満でしたが、森安先生が事務局をやっておられる頃、1口、10000円になり、オイルショック前は38~45口で、オイルショック後は18口に減り、昨年から24~26口とやや増加しています。なるべ

く、賛助会への依存を低くしようと、会費も徐々に値上し、今年から5000円にして貰いました。

教育課程の変遷

司会 次に本会が直接、間接に関係した学習指導要領の変遷につきましてお話しを伺いたいと思います。御存知のように学習指導要領がつけられたのは昭和26年で、31年、38年、48年、57年（実施年度）と改定され、建築科目数は、6、14、14、8、と変化し57年度からは6科目になろうとしています。26年は目やすとして定められた程度だと思いますが、31年、38年と段々と充実して参ります。その頃から中江先生が関係されていますので、御苦労話などをお願いします。

中江 学習指導要領一般編は昭和22年に発表、工業編は昭和26年発行です。その時、東工大小林先生が委員長で、岸田先生と私が委員に任命されました。昭和31年は伏見先生が委員として活動されましたが、私は入っていません。その次の昭和38年、48年のときは委員として作成に当りました。後の方は富塚先生と一緒にです。最初は米国の指導もあって科目の数は少なかったが、31年からは、“技術の高度化”という気運の盛上っているときで、レベルをうんと上げた。そのために指導要領改訂時に14科目となった。それから10年経って、“指導内容を学問体系から技術体系に改めよ”ということと、内容を融合して科目数を減少せよということで、その頃はまだ研究不足でしたが、8科目に減らしたわけです。それから“多様化”が論議のまよになりました。

司会 昭和48年改訂には協力委員として参画された富塚先生からどうぞ……。

富塚 中江先生がおっしゃったように“科目数を減らせ”というのが大命令で、我々建築は大分抵抗した方です。科目それぞれに歴史がある。科目名を聞いただけで内容がわかるようにしたいし、その方が勉強もしやすい、という考えを持っていましたので、急激に科目数を大きく減らすのには反対だった。またその時には時間的に多少

余裕もあったようで、アンケートも取ったし、大いに議論もしたと思っていますが、今回は大分急いだようですね。

司会 中江先生“多様化”について、どうぞ……。

中江 “多様化”は富塚先生がお話しになった改訂の前のときで、建築では、建築施工科を考えました。それは採用になりましたが設置するところもなく、結局“まぼろし”で終わってしまいました。

富塚 その頃は進学率が増大し、職人がいなくなるのではないかとというような危惧の念もあって、その様な科が考えられた。

司会 昭和48年の科目の統合の際、電気では電気工学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲというようになりましたが会長さん感想を一つお聞かせ下さい。

会長 昭和48年実施するためには45年頃から検討されたわけですが、それまであった10余科目、電気理論、交流理論、電気機器……。などを電気工学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲにまとめたわけです。その時の考え方は、あちこちつまみ食いするより融合して指導した方がよい、また、当時は“らせん式”という言葉がありまして、それに真正直に取組んだのが電気でした。抵抗が強かったりは、建築・土木それから機械も反対でしたね。

今反省してどうかということですが、科目名を聞いただけでは、どこでどんなことをやっているのかわかりませんね。電気技術士の資格では学習内容、単位数が規定されていますので、適当にいくつかろっている場合も無きにしもあらずです。また、技術の職人が育てられないという点で難点がありますね。したがって融合という主旨が、完全に結実したかどうかは多少疑問を持っています。しかし、機械、電気を卒業して、本当に自分の専門の職業に就職して行くのはどの位なのか……。少ないのではないかと、というような背景もありますけれども、我々技術を教える者としては、腕に自信のある職人をつくりたいものである。

とにかく“分化”と“総合”という掛け声の間であって、良く言えば“全人的教育”であるが、悪く言うと“実際に当って役に立たない”教育に

なりたくないものである。

富塚 その時のまとめ役は、電気の副島先生で、統合に熱心でした。建築も電気のようにまとまらないかと声をかけられました。

池田 副島先生が米国に視察に行かれたのは何時でしたか、一番最初でなかったかね。恐らく昭和20年代だったと思いますが、帰国されてから、副島先生のお話を聞いたとき「それではこれからの工業高校はどうなりますか」と質問した所「米国の Vocational School のようになるでしょうね」と言われました。その時東工大の小林先生も同席されていて「工高はこんなに科目が多いのですが、これは大学より多い」といわれました。それは14科目の時でしたがね。しかし、アンケートを取れば、地方からは、科目は減らさないでほしい、時間をふやして欲しいという要望が強かったですね。

中江 日本だけでなく、世界的にも、技術革新ということで、レベルを上げなければ……。という空気が強かった時です。

会長 言うなれば、広域のカリキュラムですね。しかし実際には電気工学Ⅰを2～3人の先生が分担しなければ教えられない、理想としては1人で教える方がよいのですがね、その時には、理想と現実が少し離れすぎたのではないですかね。

中江 それはそうですよ。大学の教育がそうですからね。学問体系で習って卒業したての若い先生に、技術体系で教えろといっても無理ですよ。その点がこれからも問題でしょうね。

司会 次に、昭和48年産業教育教科調査委員会から、いわゆる工業教育の改善につきまして答申があり“各科共通に学ぶ基礎”とか“共通基礎”(現在は工業基礎といわれている)と呼ばれていたものについて、そしてそれにまつわる問題につきまして五十嵐先生お願いします。

五十嵐 教育課程の改訂を振りかえってみると、昭和31年の改訂は何とはなしに過ぎた感じですよ。38年からの改訂では、製図・実習、科目実習を含み、実習の体系というものを中江先生が特に強調されました。単に座学のみでなく、それで教えて

実習で確かめるといってお考えがあったわけで、また、産振設備をまとめるに当って、建築科は製図板があればよい」という説に対する反論でもあったと思います。その頃からは我々も教科書に参画する様になり座学関係はまとまりつつあったわけですが、実習・製図関係の整備が遅れていた。その対策が「手引き」となって表われ、その中には中江先生の主旨が強く生かされたものと思っている。その頃から私も「手引き」に関係、指導表などもつくるなどして非常に立派なものが出来たのですが、その後、あまり活用されなかった。それは、その後、オリンピック、万博などであまりにも景気がよすぎて、我々が生徒の就職について苦労がなくなったからではないかと思っている。

好景気の間は良かったのですが、やがてオイルショック、その前から大学進学率の増大、それに伴って工高進学希望者の減少と学力の低下などからみ、職業教育の見直しがなされ、現状を打開するためには大ナタを振る必要があると、文部省は判断したのだと思います。その結果が今回の指導要領として示されたわけです。すなわち、製図・実習を除けば、38年改訂にくらべると、12科目が4科目に縮小されたことになる。その時に、私の専門はこれであるというような姿勢を何時までも持っている、この難関を乗り越えないのではないかと思っている。そこで我々としては、まず思想の転換が必要である。次に、愚痴をこぼさずに“落ちこぼれ”といわれている生徒の教育に前向きに取り組む必要がある。

また産振設備基準の改訂に際して大きな変革があり、その前提としては、今までは、建築製図室とか施工実習室というように科目実習室の看板で設備基準が配当されていたものが、その枠をはずしてしまっただけで建築の中の一連の設備基準であるとされた。すなわち、測量実習室である機器が買えて、同じものが計画実習室でも台帳の定める範囲で買うことができたが、それらが統合されて建築科として何個というように定められた。この思想は、私が思うには、今後は学校全体の枠の中で設

備を有無通ずるようによろしくと、その一つの表われが“工業基礎”で、各科共通の課題でやれということにもつながっているのではないかと思う。だから工業基礎は前向きに学校挙げて、工高へ進学してくる生徒に、いわゆる技術教育というのが中学校で完成されておれば心配ないものが、結局失敗したのだと思います。文部省自体がそれを認めたのだと思います。そのような思想を、中学校で駄目ならば工高でやって貰いたいというのが一つの流れに入っているものと思います。大都會を中心としていわゆる“落ちこぼれ”の生徒が多いという声が増え込んでくる。また、普通高校との兼合いで、それをもって防波堤にしたいということがねらいだと思ふ。したがっていわゆる地方の名門校で、程度のよい学校ならばその必要はないけれど、やはりその思想は生かす必要があると思うのですが……。そこで、私は委員になっただけでいながら、建築科としても工業基礎には賛成だというのが私の立場です。

今後の建築教育のあり方

司会 では最後に今後の建築界の動向、建築教育の問題点、あり方などにつきまして、本会、および会員に、御意見、御忠告などたまわりたいと思います。

五十嵐 その前に東工大付工高の就職状況について申し上げます。昭和48年以降は、大手中流会社の工高生採用が中止されておりました。ところが昨年および今年度から大企業からの求人がポツポツ入って来るようになった。それは大学卒業生の内勤志望が強く、したがって現場マンとして、工高生が見直されて来た結果のようです。

池田 大学進学傾向はどうですか。

五十嵐 昨年当りから頭打ちです。電気科では三分の一が就職、建築は2割が就職、1割が公務員希望、したがって、進学希望が7～8割で、そのうちの2割が各種学校志望です。

司会 先に中江先生から、大学、工専、工高それぞれにかなった教育目標がなければならないとい

う説をお伺いしたことがあります。工高建築科の教育について先生の御意見をお願いします。

中江 教育を考える場合には、先ず目標を明確にしなければならない。そこで工高の教育目標は何だろうと考えてみると、大学・工専と技能者教育との間にある工高教育の意義を鮮明にしなければならない。ところが工高教育はややもすると大学教育の亜流のようなもので、目標はそうではないんだけど、実際やっていることは、現場の先生はそっちへ傾いてしまう。ということは大学で教育を受けた人が工高教師をやっているわけであるから当然そうなるという大きな問題点がある。中教審の委員の人達というのは、大学の先生もおられるが、現場の先生方も大勢おられて、主として実務の関係から参画している委員の発言が相当大きくって、しかもその発言は現状の教育の実情をあまり考慮しないで自分達の立場から相当強く主調されているのだろと想像されます。

そこで先ほどの話のように、学習指導要領は、いろいろな方向を目指して改訂されて来たが、それがまだ未消化のままのうちに、種々の情勢変化のうちに押流されて来ているとか、また、職人を養成しなければならないという目標が、実際には職人の教育というものをも十分に目指さない教育になってしまっているというように、種々の問題があるようですね。私は工専と工高の教育は、学術の研究ではなく、技術者の育成であるとはっきり割切るべきであると思う。ところが建築はアーキテクトの養成すなわち芸術的な要素が混在するので、機械・電気のように技術的な方向への割切りができない人が多いのではないかと。現実には、就職先を考えると、設計・施工は3：7位になっていると思う。それにも抱らず、建築教育が技術教育へと指向できないのは、先生方の心の中に芸術という誇りというか、プライドというようなものを持たせたいという気持ちがあるのではないかと。私はそこの所を割切って、芸術的な方向へ伸びる生徒は大いに伸ばすとして、教育の目標は、はっきりと建築技術教育の目標を抑える。

その目標は、設計技術と施工技術だとすべきである。その設計技術の中へ芸術的なものを加える。しかしそれはいわゆるアーキテクトを育成するというのではなく、設計技術者を育成するという立場でなければならない。ところで、今までの建築教育の議論の中で、最近まで皆なの気持ちの中には、工高建築教育では、建築の専門教養を育成すればよい。技術教育を目指さなくてもよい、という考え方が欺瞞していると思う。したがって、建築工学を基礎にして、その工学の概念を与えれば、それが専門教養になると思っている。それらの立場の人でも、勿論卒業してから製図を書く、測量もやらなければならないから、ある程度の実学は必要だ。しかし目指すところは専門教養を与えさえすればよいのだという。しかも、それ以上は時間数その他の事情で出来ない。本当の技術教育は出来ないのだ。さらに、学問体系で教えられて来た先生方は、その受売りだけでよしとし、それ以上のものをやろうとする信念、意欲に欠けている面もある。専門教養だけでよしとする考え方を改めなければ、絶対工高教育の改革はないといたい。科目を学問体系で教えてはいけないう。工高教育内容の程度は低いことから、専門だからとか専門でないというようなことはチャンチャラおかしい。工高生に教える程度のことは、どの科目でも教えられる力を持っていなければうそだと思ふ。難しいことを教えようと思うからわからないのであって、そうでなく実学的に考えれば、これは誰でも教えられる。それには、参考になる本を誰かが書かなければならない。それまでの準備ができていないのに中教審のお偉方が、こうやれ、ああやれといっても、下地の出来ていないのにそうするから浮き上がってしまったたり、未消化になってしまうのではないかと。

五十嵐 ただ、建築の場合は素人でもわかり易いという面があるのではないかと。自分の家を建てる時、平面図を書いたり、台所をどうするか取付きやすいでしょう。だから、建築科を出ている人は、せめてそれ位知らなければ困るのではない

か。その位は指導できなければ困る。

中江 先ほどから出ている“実学”という言葉はいいですね。工高の教育は実学をやるべきで、高等な学問、学理に偏るべきでない。ある会合の席上、某先生が「……僕は、建築工学を教えることに生甲斐を感じているんだ」といったら他の先生も「そうだ、そうだ」といった。それはとんでもない間違いだと思っている。工学を生徒に教えるべきではない。むしろ実学に直して教える位でなければならない。

大学の教育にしても、大学は学理を教える所で技術なんか教えないということを誇らしげに言われる先生方もおられる。学理というものは確かに魅力がありますよ。しかし、そのような考えで、工高生に対すると工業教育は成立たない。

次に「構造化」というのは、建築の場合でいうと、設計技術と施工技術者として実社会に出てから活躍をする素地をつくるには、どういうもの、どのように教えないといけないかを考えて科目内容を組立てること、すなわち、目的を定めて、それに到達するためのネットワークを組んでゆく、その過程で科目の統合があるのである。それを、はじめから科目があってそれを教えるというのではなく、科目をネットワークに従ってどんな風に整理したらよいか、という根本的な研究が出来ていない。20周年記念誌にそのようなことを書いておいたのですが……。その頃、機械科ではかなり熱心に構造化を進めているという話を聞いたことがある。

会長 実学という言葉では、例えば、実験と呼んでいたものを実習というようになったことを思い出します。実験とは理論的な傾向が強く、実習という経験して学ぶという今でいう体験学習で、理論をつくるというのではなく、理論を理解することで、それが、学問と実学の違いだと思う。私は昔の工専を出て就職し現場に配属になった。そこには工高出身者がいて初めて工高の教科書をみた。実によく出来ているので感心した。大学の教科書では厳密にステップを踏んで最終の目的に到

達する。しかしそれに到るまでの間に嫌になって投げ出してしまう。しかし実学というものは、最初に結論を出して、それから、それがわかるように途中を要領よく説明する。また現場では、理屈だけでなく、体にしみ込んだものでないと役に立たない。体験から組立てられた理論は強いものである。

五十嵐 先に中江先生がおっしゃったように、大学が学理を教えていること自体に悩んでいます。生徒がついてこないということです。それはあまり学理的なことが過ぎていて実学が伴わないからですよ。それを何で我々がまねをしなければならないのだろうか。

中江 私が技術教育を目指せという「2～3年で技術教育が出来るわけがない」と反論する人がいるが、私は学校で技術が身につくまでやれという意味ではない。それは、社会に出て、その技術に入っていくような基礎をやれという意味です。

五十嵐 しつけの問題として、心構えをつけることが出来ればよいんですね。先ほど、建築の科目の中で意匠的な面が捨て切れなかったことが出ていましたが、製図を書くという過程で、一枚の紙の中にきちんと書くとか、デザイン的なことはその中に入っているし、それで十分だと思うのですが……。

司会 富塚先生工高教育について御意見を申し上げます。

富塚 皆さんが既にお考えになっていることだとは思いますが、文部省がどのような教育方針をもっているのかということのほか、社会が教育界に要望している大よその輪かくというものを考えておく必要があると思う。特に我々は工高にいるわけであるから、そして建築であるから、建築をつくって行くのに、誰が一体どういう仕事に従事して、それを、誰がどうやって供給しているかという問題をつねに頭の中に入れておかなければならない。そして、中江先生がおっしゃったように、大学は大学のやる分野があるし、現場で割合程度の低い総合的な技術を担当する分野もあるしとい

うように、それぞれの立場の人々の働きがなければ建築というものは完成しない。それらの全体を掴んで、誰が、何処で、どんな教育をするのかということになるわけだが、そのうちの技術・技能教育は、日本では不幸にして、元来文部省がやるものではない。労働省とかそっちの方でやるのだと軽視されていた向きがある。それではいけない。現状ではそのようなことは工高でやるべき範ちゅうに属している。その中でも比較的高度な技術を必要とするもの、そうでないものさまざまあると思う。そのような技能・技術者を養成する役目は、早かれ遅かれ、工高のやる仕事になってくると思うし、あってもいいと思う。したがってそのようなことを頭の中に入れて考えて行かなければならないと思う。また、成長期でやらないと身につけられないという技能・理論といったものがあるし、それと学校教育とを噛み合わせた教育をやる場所というものを頭の中に置きながら建築教育を考えて行かなければならない。また、我々は建築を担って行く広範囲の人々を養成するのだ、という広い視野に立って考えて行かなければならない。

司会 池田先生お願いします。

池田 大学進学率、卒業生の就職の動向を考えて、まだ必要があるならば、現在のものを踏襲して行ってもよいと思う。

司会 最後に、本会および会員の皆さんにアドバイスを一言ずつお願いします。

中江 建築教育にぜひ執念を持って終始していただきたい。

富塚 建築教育全体の中で、各分野の「教科の研究」すなわち、その教科が建築をつくるということ全般のうちのどこをどういうように分担するかということの研究することが大切だと思う。その点を盛んにしていただきたい。

なお、実業界との連絡会を持ってほしいと思います。

池田 生徒一人一人にわかるような授業を考えて、実行して欲しい。

司会 司会がスムーズに行かず最後が少し尻切れ

トンボになってしましまして申しわけありません。最後に会長さんお願い致します。

会長 先生方の「遺言」をいただきまして有難うございました。我々はこの遺言を守る義務があると思います。それから昭和57年度からの改訂はそれなりの理念もあるし、要請もある。とにかく現場で役に立つ人をつくってくれということだと思います。それは、今すぐ現場で役に立つということではなく、心構えをしっかりと適切に現場に順応してゆける人をつくってほしいということだと思います。それには単に知的な教育ではいけないという御意見だったと思います。それは単に建築だけではなく、機械・電気は勿論、工業全般の問題、あるいは、普通科の問題、下は中学、上は大学の問題と相関係するところでしょから、そう単純にはいかないでしょうが、先生方のお言葉を会員の皆様方とよく噛みしめていただきたいと思います。また、反省すべき点多々あることと存じます。これからも御指導のほど宜しくお願い致します。

本日はお忙しいところ、貴重なお話をどうも有難うございました。

分科会報告

製図分科会

東京工業大学付属工業高等学校 五十嵐 永 吉

戦後からの歩みをみるに、大きく2つの流れがあったように思える。その一つは教科課程の整備・変遷であり、たの二つはそれに伴う教科書の整備・改訂であろう。

このような流れのなかで研究会にも4つの分科会が設けられ、これに対応すべく研究活動を行ってきたわけであるが、今までの経過をふりかえり、そのうえで今後いかにあるべきか、あるいはどのように対処していったらよいか考えてみたい。

教科課程については、14教科の整備から8教科への統合、そして57年度からの改訂と変遷していくわけであるが、分科会の担当科目の一つである「製図」に関しては、57年度からは一応工業科としての共通科目として統合された形にはなっているが、従来同様建築製図として取り扱ってよいことになっているので、他の分科会にくらべると科目の統合もなく、従来同様の指導方針を中心にしながら対処していけばよさそうである。

教科書については、製図例の整備に重点が置かれ、分科会としてもこの面で協力し、またその内容の取扱いと指導方法についても研究をしてきた。幸いにして「製図」という科目の性質上、目新しい教具の必要もなく、また多くの適切な指導者に恵まれていたこともあって、特に「実習」などのような科目の研究の困難さは少なかったようだ。

ただ、教科課程の改正に伴ない、各学校で実施できる製図の時間の減少が目立ち、限られた時間内で、いかに製図を消化し指導するか、質の低下をいかに防ぐか、各学校ともその指導に当ってはぜひぶん苦勞され、工夫されてきたことと思われ

る。

いろいろ問題もあったが、少なくとも教科書の面では一応の整備が終わり、必要と思われる課題例とその内容図面も整った。さらに従来の完成された製図例のみのタイプから、そのかき方、設計方針などの指導面についても充実させ、新たに造形についての項目も新設強化し、一応の形がつけられたように思われる。このような流れのなかで20周年を記念して製図の展示会を開催できたことは、先生方のご努力によるたまものであり、私達の努力の結晶であって、大変喜ばしいことである。また、これを契機として各県で製図の展示会が行なわれているともきいているが、今後とも引き続き開催し、その輪の拡がることを願うものである。

このように科目「製図」には、他の科目のような大きな変遷もなく、教科書も一応整備されたとはいえ、今後考えなければならない点がある。それは従来の「建築設計製図」と改訂後の「建築製図」の内容とその取扱いについてである。というのは先にも述べたように、新しい学習指導要領では、その目標としては従来以上に「製図に関する基礎的な知識と技術を総合的に習得させ、製作図・設計図などを正しく読み、作成する能力を養う」ことを要求していることである。勿論、専門科目の内容を「製図」と関連させながら「実習」で学習し、「総合実習」において「設計製図」を指導することを含んでいるので、従来同様「製図の基礎」「建築製図」「設計製図」という指導体系には大きな相異はない。しかし、「製図」の主体が「製図の基礎」「建築製図」におかれ、「設計製図」は「実習」の体系のなかで総合的に考えるとしてい

ることは、考慮すべきことであろう。

また、一方「工業基礎」が新設されたが、このなかで共通的に“製図の基礎”を取りあげようとする空気もみられるので、製図の指導は、「工業基礎」「建築製図」「建築実習」という科目の流れのなかで取りあげる必要が生ずるのではなかろうか。

また、一方建築科目の単位数との関連も考えることが大切であり、上記の流れのなかで、製図指導にさかれる総単位数、これに関連して他の専門科目の単位数をいくらに押えられるかは非常に重要である。特に“設計製図”を考えるに当っては、関連専門科目の単位数とその内容は、大きなかわり合いがあるだけに、取りあげる「設計製図」の課題内容との関連を考え、精選する必要がある。

「設計製図」以外の科目が統廃合されてきた過程で、その内容の精選がいつもいわれてきたが、57年の改訂に当っては、名実ともにその内容を精選し、総合的目標、学年別の目標の確立とその方策が問われることと思うが、総体的に変化していないといいながら、「建築製図」の流れのなかで、

“設計製図”を取りあげることの必要性がある以上は、科目の精選に合せた課題の精選、そしてそれに到るまでの“建築製図”“製図の基礎”の合理的かつ効率的な指導法の確立が当面对処しなければならない問題ではなかろうか。

今までの指導方法をみるに、夫々の科目が単独にその科目目標をたて、それとは別に「設計製図」が設けられ、指導されてきたきらいがある。今までと異なり十分な時間がとれそうもないこと、ある程度の質の低下が考えられるならば、“総合実習”としての“設計製図”が設置されたとき、その過程としてどの科目でどこまで、或はいつまでになすかの目標をしっかりとたて、相互に関連させながら指導していくことが大切であろう。

私もはかつて学習指導要領の手びき上・中・下の編集に協力してきたが、57年度改正に当たり、この手びきの精神と考え方にたちもどり、建築科目学習上の総合的かつ基本的な指導標・作業標・知識標などの方策を確立すべく努力していきたいものである。

計 画 分 科 会

東京都立小石川工高 佐藤賢吉

① はじめに

計画部会は昭和43年度東日本建築教育研究会の総会において現在の組織として運営されるようになったもので、当初は、建築史部会、建築計画・設備部会として発足している。

本研究会創立30周年にあたり、本誌では20周年記念誌以降のすなわち、昭和46年度以降の主な計画部会の活動を中心に記録をまとめて報告にかえさせていただきます。

② 研究活動の概要

〈研究協議の主題〉

昭和46年度：建築計画内容編成について(1)……
展開例

昭和47年度：建築計画内容編成について(2)……
展開例（新教科書との関連）
昭和48年度：建築計画の学習指導法について……
指導計画案（1章、4章）
昭和49年度：建築計画の最小限学習要素の研究
昭和50年度：建築計画各論と計画実験・実習について
昭和51年度：建築計画の学習指導法について……
指導計画案（2章、3章、5章）
昭和52年度：建築計画の学習指導について……
指導計画の実態
昭和53年度：建築計画の学習指導について……
指導計画・領域
昭和54年度：学習指導要領改訂にともなう建築計

画の指導上の問題点について

<講習会等の開催>

昭和47年 10月13日～14日 計画部会研修会開催。

於：宇都宮工業高校

- (1)建築計画の導入に関する指導法の研究協議。
- (2)見学会……湯西川・平家落人家並等。

昭和50年 8月21日～22日計画実験・実習講習会

開催。於：小石川工業高校、ミサワホーム研究所

(1)実験実習内容

- 1.有効温度の測定 2.昼光率の測定 3.騒音測定 4.周波数分析 5.気流分布の測定

※協力：電子測定棟、リオン棟

(2)見学会、講演会

- ミサワホーム総合研究所、環境試験室の見学

●講演：ミサワホーム理事長 三浦 忠夫氏

昭和52年 12月14日見学会開催。

超高層建築の計画一般と建築設備計画を中心として、新宿野村ビルの見学会を実施（安井建築設計事務所、熊谷組の協力を感謝）

●関連資料：

京王プラザホテル(竣工S46.6)高さ 169.9m

新宿住友ビル (竣工S49.3) # 210.3m

新宿三井ビル (竣工S49.9) # 223.6m

新宿野村ビル (竣工S53.5) # 209.9m

昭和53年 1月20日 講演会開催

於：東工大附属工業高校

演 題：現代ヨーロッパ建築講演

(アムステルダムの近代建築)

講 師：日本大学生産工学部教授

工博 山口 宏氏

講演はスライドを併用しながら主としてアムステルダムでの先生の滞在生活における建築家としてのものの見方ともいうべきユニークな解説の中にも貴重な“建築”の本質なるものが教示された。(1978. 12建築教育ニュースより)

③ 改訂高等学校学習指導要領における科目「建築計画」の目標と内容について。

◎専門教育を主とする学科に関して

(1)基礎的、基本的事項を重視するため、次の点が改訂された。

(a)科目の整理、統合（工業科目数64、現行164）

(b)基礎科目の明確化（工業基礎、工業数理などの新設され低学年で共通に履修する）

(2)実験・実習を一層重視（実験・実習にあてる授業時数は原則として専門科目全体の十分の五以上とする）

◎建築学科の科目・内容（新・旧対比）

㊦			㊧		
建築実習	建築製図	建築構造	建築実習	建築設計製図	※2 建築計画
建築設計	建築施工	※1 建築計画	建築構造	建築構造設計	建築施工
工業基礎	工業数理		建築法規	建築史	
㊦建築計画は従来の内容と「建築史」建築設計製図の中の造形、建築法規の中の計画要素に関するものを融合して指導することが望ましい……とされている。					
※1 建築計画の目標と内容 建築計画における基礎的な要素を理解させ建築物を合理的に計画する能力を養う。(目標) (1)建築計画の概要 (2)建築物の形態と色彩 (3)建築計画の方法 (4)建築物の内外の環境			※2 建築計画の基本的な諸要素を理解させ建築を合理的、意匠的に計画し設計する基礎的な能力を養う。(目標) (1)建築計画の概要 (2)建築計画の方法 (3)環境構成と設備計画 (4)各種の施設と地域計画		

④ おわりに、計画分科会では、今後、これまでの学習指導に関する研究を続け、新しい学習

指導要領における「建築計画」の指導法について活動をすすめたいと思います。

構造分科会

東京都立墨田工業高等学校 井上 満

① 構造分科会について

構造分科会の充足については、20年誌に述べてありますので省略させていただき、それ以後の約10年の構造分科会の歩みについて述べたいと思います。次に総会での議題等について略記しますと次の通りです。すなわち、

昭和47年度 新教育課程における内容及び指導法→構造について（於秋田）

昭和48年度 建築構造の学習指導上の問題点（於土浦）

昭和49年度 建築構造、構造設計の学習指導上の問題点（於名古屋）

昭和50年度 建築構造、構造設計の教育内容の改善について（於成田）
建築構造、構造設計教科書による研修会（日本建築学会）

昭和51年度 建築構造実験実習について（於山梨）
51.8.23～24 “建築構造実験実習研究協議会”（於都立田無工高）
光弾性、ひずみ、非破壊、地耐力
パーソナルコンピューターのプログラム実習と利用（日本オリベッティーKK）

昭和52年度 建築構造、構造設計の学習指導について（於九段会館）

昭和53年度 構造設計の学習指導について（於青森）

昭和54年度 建築構造、建築構造設計の学習指導について（於きぬ川）

視聴覚教材の利用について（田無工で実施している状況）

以上をみると、新教育課程に移行する時点

ではその問題点、その後は一貫して、建築構造、構造設計の学習指導上の問題点について協議してきましたが、毎年のように単位数、時間数、生徒の質の問題、教科書の難易の問題、工高卒業までに生徒に修得させるべき内容について討議し、多少なりとも各学校の参考になったことと思います。また建築構造実験が難しく、産振設備機器の利用が思わしくないのではないかとということから、昭和51.8.23～24日まで田無工高で夏期研究協議会を開催し、多数の先生方が有意義な研究協議をされ、各校の構造実験実習の進歩をはかりました。また、新教育課程に移行した時点で、建築構造、構造設計の教科書の執筆者による説明と研修会を学会サイドの企画で行いました。また、コンピューターの導入も計画しなくてはということから、パーソナルコンピューターのプログラム実習と利用についてオリベッティーの協力のもとに実施し、以後、田無工高、葛西工高では機器を導入し教科指導に利用しているとのことで、別の機会を利用して研修会でも開けたらと思っております。また、建築構造の中で材料をどう取り扱うか、構造力学と計算の単位数の問題とか未だ解決しない点が多いが、昭和54年度から新しい教育課程に移行するわけですが、いろいろの問題が生ずるのではなからうか、次に、建築構造、構造設計が生徒にとって難しいとか、理解しにくいなどの点が多いと思うので、これからの建築構造、構造設計の学習指導に工夫が必要になるのではなからうか。

② 構造分科会の内容について

構造分科会の活動は必ずしも活発ではありませんでしたが、今後生徒の質の多様化しつつある状況からどうしても“構造・構造設計の学習指導”

が最大の目標であろうと思う。しかし、時代の変遷につれて、その方法も変化しなければならない。あるときは小テストとか、あるときは模型とか、あるときは実測とか、あるときは教科の難易度の調査とか、どこまで修得させればよいかとか、そのときどきにいろんな点が取り上げられてきたが、今後は視聴覚教材をどういう風を利用して学習指導を高めたらよいかという点の研究が必要かと思う。また、われわれ相互の質を高めるための研修会、見学会などを盛んにしたいと思っています。例えば構造物の動的耐震設計などの勉強会が開ければいいと思っています。あるいは、若い先生方による構造、構造設計に関する研究発表などが推進できればいいと思う。超高層ビルの見学会も2～3回行い、参加者には大変有意義であったと思うので、構造に関する見学会を実施していきたいと思う。また、鋼材倶楽部からの御好意により、H型鋼ハンドブックとか日本の鋼構造とかその他資料を提供していただき、鋼構造の普及についてどういう点を注意したらよいか、また地方への普及をはかる一助になったかと思っています。今後、

鋼材倶楽部の協力がえられれば、更に研修会を実施したいと思っています。

③ 構造分科会の今後について

大変はずかしいことですが、小生の学校では、生徒が構造、構造設計に興味を示さず、学習も全くといってしないような状態になってきたので、どうやったら生徒の学習意欲を昂揚できるか悩んでおる状態です（地方の工高では生徒の質の低下が余り問題にならないところもあるようですが）、したがって、個々の生徒にどこまで構造・構造設計の教科内容を修得させればよいか、今後の構造分科会で取り上げなければならない点かと思えます。また、工高卒業生の質をどう高めるかが今後の分科会の問題点でないかと思う。したがって、今後の構造分科会を発展させるために、多くの先生方の創意工夫点、意見などをお出し願って、30周年記念を契期として頑張っていきたいと思えますので、諸先生方の御協力をお願い致します。構造分科会の報告にもならないかと思いますが御了承下さい。

施 工 分 科 会

神奈川県立神奈川工業高等学校 山 室 滋

30周年記念に際し、施工分科会のあゆみを分析し、80年代の展望へと結んで寄稿します。

① 70年代の経過

1. 施工分科会の活動

分科会の委員活動は、総会・研究協議会（分科会）の討議資料や、分科会が主体となって夏期に開催した研究協議会、講習会のための準備、資料作成などが主なものです。

また、他に附随した内容を下に列記します。

- 分科会が単独で研究会を催すように本部から促され、主題「実習の基本項目と運用について」（43. 11. 21）を2回に分け、向の岡工高（44・

3・18）の横須賀工高（45. 1. 30）で実施する。

- その後、会員から「手をよごして身につく施工実習技術・指導法の習得が出来るような研修会」を望む声と、準教科書・実習(2)の発行（昭和47年4月）、そして次年度の48年度より新指導要領の実施などがあって、夏期研究協議会、（47年8月・於 横須賀工高）へと進展した。第2回は岩手県の先生方の要望と協力で盛岡工高を会場にして実施する。（49年8月）
- 分科会の作業のための会場は委員校を持ち回りに充て、本部の行事計画に併行しながら分科会としての作業を完成して参りました。委員会

は年に6回前後ですが夏の催しのある年では倍以上の数にもなります。これは委員の生きた協力の賜物と信じております。

- 新指導要領(48年)へ移るに伴い、実習分科会を施工分科会へ改称して他の分科会の実験・実

習のまぎらわしさをなくし、分担を明確にしました。

- 分科会の報告は、秋発行の建築教育ニュースへも掲載しています。

2. 夏期に実施した研修会・講習会の概要

回	年度	内 容	会 場	資 料	備 考
1	47	施工実習	横須賀工高	分科会で作成した実技・研究協	基本から各種構造
2	49	"	盛岡工高	議会用の資料を配布する。	の主体を内容に。
3	54	足 場	浦賀クラブ 住友重機	講習用テキスト頒布 労働安全衛生規則配布	講師は横須賀労働 基準監督署

3. 提供済みの資料 ベスト8

提供年月日	No.	資 料 の 内 容	ね ら い
46. 7. 28	7	基本項目と施工実習構成案	実習を見通した方法の確立
47. 8. 2	講	施工実習研究協議会(横須賀)	協議会用に作成する。
49. 8. 7	10	施工実習研究協議会(盛岡)	協議会用に作成する。
48. 6. 1	10	科目別時間配当一覧(表1) 施工に関する科目相互の関連	現時点での比較のための資料(表2)
49. 6. 7	"	実習を展開する場合の問題点とその 解決例	事例を踏まえた解決策の利用
50. 6. 7	12	施工と他の教科の関連を表示 (各種構造の工程を母体にして)	施工指導ネットワーク
1967.10建築ニュース		「建築施工」の学習指導について	問題提起による指導法の確立
52. 5. 25	14	教科書「施工」の検討	内容を整理する。
53. 5. 15	15		
54. 8. 21	講	足場のJASSと労・基・法の比較	現状の把握と安全教育

㊦ 80年代の展望

施工分科会の80年代は人生でいう青年時代から壮年に入らんとする姿と考える。

それは、「実験・実習を中核として他の教科目と関連づけて・・・」という指導要領の改訂で、施工実習の具体的な内容の指導・科目の変化などと取り組み、また一方では、高学歴社会の進行と職業高校入学者の資質の変化に対応しながら建築教

育の施工に関する学習指導について分担いろいろ資料を提供しながらひとすじに進めて来たからです。

今後は、これからの事実を明日の糧として内容整理・統合し、摘出し改良を加えながら新しい課題に進んで行こうと考える。次に具体的な方策を参考に供します。

- 建築物は企画—設計—施工の工程で完成する点を認識し、基礎的・基本的な知識と技術を習得するため、施工実習研究協議会や講習会などを計画的に実施する。
- 生徒の資質・学校の実態によって施工に興味を持たせるように工夫した指導法の交流を行い、卒業後他の産業へ流出するのを防ぐ。
- 建築の自営者・建築の職域に従事する家庭の生徒の急増に対しては、教師が良き相談者となるため建築生産技術を理解し知識を高めるための意見の交換・資料の提供を計る。
- 施工実習の履習時間を内容を加味した各種の施工実習のシートを作り、学校の実状に応じロ

ーションと組み合わせて選択して実施できるものを考える。

- 産業教育施設設備を見直して施工実習の効果を高めるようにする。

本稿は、分科会の委員会で所感・要望などをまとめ記載したものです。紙面の都合で省いた部分のあることをご了解下さい。

今後も分科会委員の情熱と会員皆様方の協力によって以前にも増して充実した活動になることを願っております。

以 上

東日本建築教育研究会会則

第1条 本会は東日本建築教育研究会とよぶ。

第2条 本会は工業教育、特に建築課程に関する研究を行ない、その向上改善を図ると共に、相互の連絡を密にすることを目的とする。

第3条 本会は、下の会員を以て組織する。

1. 正会員……東日本地域工業高等学校在職中の建築課程関係教職員及び建築科出身の学校長など。
2. 賛助会員……本会の趣旨に賛同する会社、事業場など。

第4条 本会の事務所は原則として会長所属の学校におく。

第5条 本会は第2条の目的を達成するために下の事業を行なう。

1. 建築課程に関する学習指導の研究
2. 建築界の動勢に関する研究、並に各種資料の蒐集調査
3. 研究発表会、講演会、見学会等の開催
4. その他本会の目的達成上必要な事業

第6条 本会に下の役員を置く。

会長 1名 副会長 若干名

理事 若干名(内若干を常任とする) 監事 2名

専門委員 若干名 顧問 若干名

参与 若干名

顧問、参与以外の役員の任期は1年とし、重任を妨げない。但し途中移動の場合後任者の任期は前任者の残部とする。

第7条 会長は理事会において選出し、総会において承認を受ける。副会長は会長が推せんし総会の承認を受ける。

理事は各都県会員の中からそれぞれ1名以上互選する。建築出身の学校長は理事として別に加える。

監事は理事会において選出し総会の承認を受ける。

専門委員は必要に応じ会員の中から理事会にはかり会長が委嘱する。

顧問は理事会の推薦する学識経験者中から会長が委嘱する。

参与は会員所属の学校の建築科出身以外の学校長及び特に本会に功労のあったものを会長が委嘱する。

第8条 会長は本会を代表する、副会長は会長事故あるときこれを代行する。

理事会は会長・副会長・理事によって構成し、会務を処理し、事業計画、予算決算等の重要な事項について審議する。

監事は本会の事業及び会計を監査する。

専門委員は専門委員会を構成し、特別事項を審議する。

顧問及び参与は本会の運営について助言し、会の発展を援助する。

第9条 理事会・専門委員会は随時会長が招集する。

第10条 総会は年1回定期に開き、特に必要ある時は理事会の決定により臨時総会を開くことが出来る。

第11条 総会は出席者の過半数の同意によって議決する。

総会の議長は会長があたる。

第12条 総会において行なうべき事項は次の通りとする。

1. 会務並に会計の報告
2. 事業計画及び予算の承認
3. 役員の改選
4. その他重要と認める事項

第13条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第14条 本会の経費は会費および補助金、寄附金、その他をあてる。
会費は全日制・定時制それぞれ1校とし年5,000円とする。
但し臨時会費を徴収することがある。

賛助会費は年額1口10,000円、1口以上とする。

第15条 本会則を変更する場合は総会の議決を経るものとする。

第16条 本会は各地方に支部を置くことが出来る。
支部はその地域内の会員を以て組織する。
支部に関する規定は別にこれを定める事が出来る。

付 則

本会々則運営上必要な規定は別に定める。
制定 昭和26年11月5日
本会則は昭和30年5月20日から実施する。
改定 昭和30年5月20日
本会則は昭和37年6月1日から実施する。
改定 昭和37年6月1日
本会則は昭和42年6月2日から実施する。
改定 昭和42年6月2日
本会則は昭和46年7月28日から実施する。
改定 昭和46年7月28日
本会則は昭和50年6月6日から実施する。
改定 昭和50年6月6日
本会則は昭和54年6月8日から実施する。
改定 昭和54年6月8日

東日本建築教育研究会加盟校一覧表

昭和54年4月現在

[北海道]	北海道旭川工業高等学校	私立専修大学北上高等学校
	〃 小樽工業高等学校	[宮城県] 県立古川工業高等学校
	〃 帯広工業高等学校	〃 白石工業高等学校
	〃 釧路工業高等学校	市立仙台工業高等学校
	〃 札幌工業高等学校	〃 仙台第二工業高等学校
	〃 苫小牧工業高等学校	[秋田県] 県立能代工業高等学校
	〃 函館工業高等学校	〃 秋田工業高等学校
	〃 美唄工業高等学校	〃 横手工業高等学校
	〃 室蘭工業高等学校	〃 大曲工業高等学校
	〃 留萌工業高等学校	〃 由利工業高等学校
	〃 名寄工業高等学校	[山形県] 県立鶴岡工業高等学校
	私立立正学園旭川実業高等学校	〃 山形工業高等学校
[青森県]	県立青森工業高等学校	〃 米沢工業高等学校
	〃 弘前工業高等学校	私立山形電波工業高等学校
	私立八戸工業大学付属第一高等学校	[福島県] 県立会津工業高等学校
	〃 光星野辺地工業高等学校	〃 郡山工業高等学校
[岩手県]	県立久慈高等学校	〃 福島工業高等学校
	〃 盛岡工業高等学校	〃 勿来工業高等学校
	〃 大船渡工業高等学校	私立福島高等学校

[福島県] 私立日本大学東北工業高等学校
" 原町工業高等学校

[茨城県] 県立水戸工業高等学校
" 土浦工業高等学校
" 大宮工業高等学校

[栃木県] 県立宇都宮工業高等学校
" 真岡工業高等学校
私立足利学園高等学校
" 足利工業大学付属高等学校

[群馬県] 県立高崎工業高等学校
" 前橋工業高等学校
" 桐生工業高等学校
" 藤岡工業高等学校
" 長野原高等学校

[埼玉県] 県立川越工業高等学校
" 春日部工業高等学校
" 熊谷工業高等学校
" 大宮工業高等学校
私立越生高等学校

[千葉県] 県立市川工業高等学校
" 葛南工業高等学校
私立千葉工商高等学校

[東京都] 東京工業大学工学部
" 付属工業高等学校
都立蔵前工業高等学校
" 小石川工業高等学校
" 田無工業高等学校
" 葛西工業高等学校
" 墨田工業高等学校
私立関東第一高等学校
" 工学院大学高等学校
" 安田学園高等学校
" 昭和第一工業高等学校
" 東京工業高等学校
" 帝京高等学校

[神奈川県] 県立神奈川工業高等学校
" 向の岡工業高等学校
" 小田原城北工業高等学校
" 藤沢工業高等学校
川崎市立工業高等学校
横浜市立鶴見工業高等学校
横浜市立横浜工業高等学校
横須賀市立工業高等学校

[山梨県] 県立甲府工業高等学校
" 峡南高等学校
" 北富士工業高等学校

[新潟県] 県立新潟工業高等学校
" 新発田商工高等学校
" 高田工業高等学校

[長野県] 県立長野工業高等学校
" 飯田長姫高等学校
" 上田千曲高等学校
" 池田工業高等学校

[富山県] 県立高岡工業高等学校
" 富山工業高等学校

[石川県] 県立小松工業高等学校
" 羽咋工業高等学校
" 珠洲実業高等学校
金沢市立工業高等学校

[福井県] 県立武生工業高等学校
私立福井高等学校

[静岡県] 県立静岡工業高等学校
" 沼津工業高等学校
" 修善寺工業高等学校
" 島田工業高等学校
" 浜松工業高等学校
" 天竜林業高等学校
私立日本大学三島高等学校

[愛知県] 県立愛知工業高等学校
" 第二愛知工業高等学校
" 一宮工業高等学校
" 豊橋工業高等学校
" 碧南工業高等学校
" 半田工業高等学校
" 佐織工業高等学校
名古屋市立工芸高等学校
私立名古屋工業高等学校

[岐阜県] 県立大垣工業高等学校
" 岐南工業高等学校
" 岐阜西工業高等学校
" 高山工業高等学校
" 中津川工業高等学校
" 可児工業高等学校
市立関商工高等学校

工業高等学校建築科教育課程の変遷

表-1

昭和26年学習指導要領による教科・科目

普通教科		
教科	科目	単位数
国語	国語(甲)	9
	国語(乙)	2~6
	漢文	2~6
社会	一般社会	5
	日本史	5
	世界史	5
	時事問題	5
数学	一般数学	5
	解析(I)	5
	幾何	5
	解析(II)	5
理科	物理	5
	化学	5
	生物	5
保健体育	保健体育	9~11
芸能	音楽	2~6
	図画	2~6
	書道	2~6
	工作	2~6
家庭	一般家庭	7~14
	家族 家庭教育 家庭経理 食物 食被服	
外国語		

建築課程の科目		
教科	科目	単位数
工業 (実習を含む)	建築実習	10~37
	応用力学	2~10
	材料	2~10
	計画	3~10
	建築施工	3~5
	構造	3~10
	工業関係法規	2~5
	機械一般	2~5
	電気一般	2~5

普通教科のうち、国語(9)、社会(10)、数学(5)、理科(9)保体(9)は必修とする。

表-2

昭和31年学習指導要領改訂による教科目と単位数

普通教科		
教科	科目	単位数
国語	国語(甲)	9~10
	国語(乙)	2~6
	漢文	2~6
社会	社会	3~5
	日本史	3~5
	世界史	3~5
	人文地理	3~5
数学	数学I	6・9
	数学II	3
	数学III	3・5
	応用数学	3・5
理科	物理	3・5
	化学	3・5
	生物	3・5
	地学	3・5
保健体育	体育	7~9
	保健	2
芸術	音楽	2・4・6
	美術	2・4・6
	工芸	2・4・6
	書道	2・4・6
外国語	第1外国語	3~15
	第2外国語	2~4

建築課程の科目		
科目		単位数
実習		4~20
製造		5~20
図形		2~4
建築材料		2~6
建築構造		2~6
構造計力学		2~6
構造力学		3~6
建築史		2~4
建築計画		2~8
建築設備		2~4
建築工法		2~6
測量		2~7
建築経営		2~6
建築法規		1~3
機械電気		2~6
電気一般		2~6
機械一般		2~6
土木一般		2~4

表-3

昭和38年学習指導要領改訂による教科目と単位数

普通教科目			
教科	科目	職業科必修単位数	
国語	現代国語	7	
	古典(甲)	2	
社会	倫理・社会	2	} 5*
	政治・経済	2	
	日本史	} 3	
	世界史A・B		
人文地理A・B	3		
数学	数学 I	5	
	数学 II A	4	2*
	数学 II B	(5)	←いずれか一方3*
	応用数学	(6)	
理科	物理A・B	} 2科目 以上	
	化学A・B		
	生物・地学		6
保健体育	体育	7	
	保健	2	
芸術	音楽I 美術I	} 2	1*
	工芸I 書道I		
外国語	英語A・B その他	3	

建築に関する科目			
科	目	単位数	
建築	実習	4	20
建築	設計製図	5	20
建築	材料	2	6
建築	構造	2	6
建築	造力	3	6
建築	構造計	2	6
建築	算史	2	4
建築	計画	2	8
建築	設備	2	4
建築	測量	2	6
建築	工法	2	6
建築	経営	2	6
建築	法規	1	3
測	量	2	8
造	形	2	8
造	意	2	6
機	電	2	6
電	機	2	6
機	一	2	6
土	一	2	8
土	一	2	4
そ	の		
	他		

注* 印は特別な事情のある場合に認められる最低単位を示す。

表-4

昭和48年学習指導要領改訂による各教科・科目の標準単位数

各教科	各科目	標準単位数
国語	現代国語	7
	古典 I 甲	2
	古典 I 乙	5
	古典 II	3
社会	倫理・社会	2
	政治・経済	2
	日本史	3
	世界史	3
	地理	3
数学	数学一般	6
	数学 I	6
	数学 II A	4
	数学 II B	5
	数学 III	5
理科	基礎理科	6
	物理 I	3
	物理 II	3
	化学 I	3
	化学 II	3
保健体育	生物 I	3
	生物 II	3
	地学 I	3
	地学 II	3
	体育	7~9
外国語	英語会話	3
	ドイツ語	15
	フランス語 外国語に関するその他の科目	15

建築に関する科目		
科	目	標準単位数
建築	実習	7~25
建築	設計製図	7~25
建築	計画	4~8
建築	構造	4~6
建築	構造設計	4~8
建築	施工	3~6
建築	法規	1~2
建築	史	2~3
電	機	2~6
機	一	2~6
土	一	2~4
土	一	2~4
建	一	2~4
工	英	2~4

表-5

昭和57年学習指導要領改訂による各教科、科目の標準単位数

教科	科目	標準単位数
国語	国語 I	4
	国語 II	4
	国語表現	2
	現代文典	3
社会	現代社会	4
	日本史	4
	世界史	4
	地理	4
	政治	2
	治・経済	2
数学	数学 I	4
	数学 II	3
	代数学・幾何	3
	基礎解析	3
	微分・積分	3
	確率・統計	3
理科	理科 I	4
	理科 II	2
	物理学	4
	化学	4
	生物学	4
	地学	4
保健体育	体育	7~9
	保健	2
芸術	音楽 I	2
	音楽 II	2
	音楽 III	2
	美術 I	2
	美術 II	2
	美術 III	2
	工芸 I	2
	工芸 II	2
	工芸 III	2
	書道 I	2
	書道 II	2
	書道 III	2
外国語	英語 I	4
	英語 II	5
	英語 IIA	3
	英語 IIB	3
	英語 IIC	3
家庭	家庭一般	4

建築に関する科目				標準単位数は、設置者が定める。
科目			標準単位数	
工実製工	業	基	礎習	
			図	
建	業	数	理	
			造	
建	業	構	計	
			画	
建	業	設	施	
			工	

編集後記

本誌編集の主旨は、本文中各所に述べられておりますように、30周年を記念して、会の発展と活動状況を記録しておくことであり、ひいては今後の教育活動に、なんらかの貢献をしたいと願って進めてきました。幸い多数の先輩諸氏の祝辞、激励のことばや、各校の歴史や教育現況などの御寄稿をいただきなんとか体裁の整ったものができましたことを感謝致しております。ご協力有難うございました。

編集経過は、昭和54年5月常任理事会で、記念誌発行と編集委員4名を決定し、同年7月第1回会合をもち、編集の基本方針と分担を決め、具体的に資料集め、進め方などを練りました。また昭和54年11月6日、座談会を開催し、本会の発展につくってくださった先輩諸氏の話をお聞きしながら、その情熱に敬服するとともに、今後の会の発展のためにも有意義な話しを伺うことができました。編集を能率的にすすめるため、予め、学校紹介例をつくり原稿を依頼しましたところ、回収率はほぼ100%でしたので、非常にスムーズに行き、新晃社のご協力を得まして、どうやら終着点にたどりつきました。また、資料収集や整理につきましては、工業高校長協会の事務局の方々に大変ご厄介になりました、紙上をかりて御礼申し上げます。では、北海道大会が盛会に終り、また、皆様の一層の御活躍をお祈り申し上げます。

昭和55年5月

編集委員(長) 井上 満(墨田工高)
森安 四郎(田無工高)
高山 英一(蔵前工高)
堀越喜与志(小石川工高)

東日本建築教育研究会 30 周年記念誌

昭和55年 5月26日印刷

昭和55年 6月 4日発行

編集 東日本建築教育研究会30周年記念誌編集委員会

発行 東日本建築教育研究会 (代表者 堀 重雄)

印刷 新晃社

表紙デザイン 須賀隆久 (東京都立蔵前工業高等学校 建築科 3年)
